論　説

習近平の原点と「紅色基因（あかいDNA）」
——毛沢東・鄧小平への継承と超越（1）

夏　　剛

序　　言

本論説は「5.4 運動」（中国現代史の起点）100 周年・中華人民共和国成立 70 周年・胡耀邦逝去及び第 2 次天安門事件（学生・民衆の民主化運動と首都戒厳・「6.4」武力鎮圧）30 周年・東欧社会主義陣営解体及び冷戦終結 30 周年・マルクス生誕 200 周年・趙紫陽生誕 100 周年に当る 2019 年の元日に書き始め，連載の第 1 部分の校了時（5 月末）に予定の半分弱（約 25 万字）が出来上がっている。

当初の序説では中澤克二（『日本経済新聞』編集委員兼論説委員）著『習近平帝国の暗号　2035』（日本経済新聞社，2018）を引き合いに出し，其処（そこ）で着目された中共第 19 回党大会の最終日・19 期 1 中全会の開催日（2017.10.24，25）と露西亜（ロシア）「10 月革命」の勃発・成功の日付（ユリウス暦）との出来過ぎた一致に対して，党首再選の 10 月 25 日は「中国人民志願軍赴朝（朝鮮に赴く）作戦」（1950）記念日と，71 年の国連総会で中華人民共和国の加盟と台湾国民党政権の追放が可決された日で，24 日は 45 年の国際連合設立の日だから，朝鮮戦争で米国主導の国連軍と渡り合えた軍事大国，国連安全保障理事会常任理事国を為す政治大国として，国際社会で更に権勢の拡張を図る意欲に暗合すると指摘した。

中澤は習の「政治報告」中の現代化国家建設の基本完成の中途半端な目標設定から，当該年（2035）に毛沢東の歿年と同じ 82 歳に為る習の続投の可能性を見出し，ソ連の寿命を上回る中共政権の超長期存続を目指す至上命題に党首集権の正当化の理屈を突き詰めたが，本稿では中央赤軍の長征（1934.10.10～35.10.19）の途中の遵義会議（35.1.15～17）及び勝利の 100 周年を意味すると見做（なし）し，彼（かの）の歴史的な政治局拡大会議で党・軍に於ける指導的な地位を確立した毛沢東への尊崇を再確認する。

第 1 部分の校正中の 5 月中旬に米中貿易戦争が双方の追加関税の増幅と報復で白熱化し，その最中に中央電視台（CCTV）は 16 日から急遽予定を変更して，「抗美援朝」（米国に抗し朝鮮を支援する）題材の映画を 6 夜連続放送した。習近平は 20 日の江西省視察で対米反撃の切札を見せ付ける可（べ）く贛州（かんしゅう）市の稀土（レア・アース）企業を視察し，次に同市于（う）都県の中央紅（ぜき）軍出発記念碑に献花し同記念館を参観した。長征出発の 3 ヵ月後の遵義会議と 1 年後の完遂は，斯（か）くして「習近平帝国の暗号　2035」の謎解きの手掛りと為る。

党首再選の「10.25」の隠れた寓意の１つも，「抗美援朝」映画の緊急放映に由って証明された。

中唐の詩人・政治家元稹（しん）の七言律詩「遣悲懐（悲懐を遣る）三首・其（その）二」に，「昔日戯言身後意，今朝都到眼前来」（昔日戯言す身後の意，今朝都（こんちょうすべ）て眼前に到り来たる）と有る。昔戯（たわむ）れに語った死後の事が今や全て眼前に遣って来たという情景は，**言霊（ことだま）の文字通り予言の霊験の恐しさ**を思わせる。本稿第１部分の校了直前に**「10.25」「2035」に関する推理の裏付けが現れた事も，直感の予見が現実と為った意味で想像を超える「今朝都到眼前来」と言えよう。**

朝鮮戦争への越境出兵は 16 年前の長征出発と同じ 10 月 19 日の事（「10.25」は初戦の日）で，習近平の長征起点詣（もう）では首都戒厳実施 30 周年に巡り合せた。国難を超克する為に「建国の父」毛沢東の苦闘と「中興の祖」鄧小平の辣腕に肖（あやか）るのは，**習の原点と「紅色基因」（革命的な遺伝子（DNA））に基づく両者への継承・超越の現れ**である。直近の動向を入れて序説の補足を試みたが，時間・紙幅の制約に由り本号に間に合わない故，異例ながら順番を逆にして別途で発表する。

筆者は 1987 年から「文化大革命」と改革・開放時代を中心に，当代の中国政治・社会等に就いて論文（文末に一覧掲載）を多数発表して来た。本稿は特に 1998 年以来の**指導者論や「天数・周期律」論**等を下敷きにするが，従来の学術論文と違って**分析・認識を示す歴史叙述**の形を取る。

物語性を持つ歴史叙述は出来事を時間順に語って行くのが通例であるが，**時間軸ならぬ主題軸（テーマ）に沿って展開する本稿の構成は，過去・現在・未来の時制（テンス）が無い中国語の特徴の深層原理**と通底して，**中国の歴史の紆余曲折に多い交錯と倒錯，躍進と後退の混在や反復に対応する**為である。

小林秀雄（文芸評論家）は従軍紀行「蘇州」（1938）で名園の獅子林を酷評し，その「繁華な街中に，厳（いか）めしい鉄門のある見上げるばかりの土塀を廻（めぐ）らし，池を掘り，岩を畳み，洞を通じ，橋を渡し，亭を作り，廻廊を廻らし，ただもう呆（あき）れ返った不様」は，「龍安寺の庭を知っている僕等には，言葉もない」と斬った。**京都の龍安寺の洗練された美は同じ世界遺産の獅子林の重厚な佇（たたず）まいと対照を為す**が，**両国の精神風土や人間模様の有り形（かた）と各々（おのおの）重なる処が有り**，本稿の**重層的な回遊式構造は中国社会の多岐に渡る複雑さに相応しい心算（つもり）**である。

伊藤潔（杏林大学客員教授）は訳編『鄧小平伝』（中央公論社，1988）の前言で，原著（［香港］寒山碧『鄧小平評伝』，78 年より『東西方』『南北極』月刊にて連載）は鄧の伝記でありながら，中共党史の盛り合せの観無きにしも非（あら）ず，それだけに若干煩雑にもなっている，と書いた。本稿の**習近平とその「新時代」に関する研究も，毛沢東・鄧小平と「旧時代」との相互参照が欠かせない**から，**自（おの）ずと中共党史の盛り合せの観が強く，関連対象の全体像と同じく大変な煩雑さ・厄介さを免れない。**

日本の文芸評論の巨匠は獅子林の一旦入ると直ぐには出られない様な仕掛けを嘲笑し，「可成りの広さはあるが，それを出来るだけ長い事かかって歩かせる様に，一本道の石を畳んだ小径を曲りくねらせている。つい眼の先きにある小高い岩山に登るにも，中腰になって潜らねばならない洞穴を，向うに連れて行かれたり，こっちに連れ戻されたりした揚句（あげく），ぽっかりと頂上に押し出される」という按排に毒突（づ）いた。**龍安寺の精緻・平坦な石庭の静寂・高雅な風情が生れ難い中国の激動の歴史の見所**には，

万里の長城の規模や万里の長征の進路の様な迂遠・迂回が有る。

「蘇州」の論断は大真面目な庭師に由る庭の享楽者の精神が「馬鹿々々しく而も完全だ」とし，水泥で繋ぎ合せた奇岩怪石から「やくざな石しか転がっていない」印象を得，庭の趣味の頽廃と「古く美しい記念碑を失って了っている」中国の街の有り様とを結び付けた。**古く美しい記念碑を失って久しい現代中国を有りの儘に描く**本稿は，**敢えて馬鹿馬鹿しく而も完全な「水泥製の岩」の繋ぎ合せに由る造りを大真面目に追求する**。一律に6行と為る段落は水泥の「泥」と通じて，**粘土に砂を混ぜて練り固めた煉瓦を形象する**物である。

2000年代から著しい経済発展を遂げている伯剌西爾・露西亜・印度・中国は，01年に米国の投資銀行ゴールドマン・サックス（漢訳＝「高盛」）の経済学者オニールに由ってBRICsと命名された。漢訳の「金磚4国」は英語のbricks（煉瓦［複数形］）に因み，「金磚」（金塊）で確実で大きな財成の機会・果実を表す妙味が有る。**中国で多用される建築材料の「磚」（煉瓦）の字形は石の様に堅牢な専制を連想させ**，本稿の**「煉瓦造り」の意匠は国民党・共産党の数十年に亘る1党独裁や，歴代王朝の数千年に及ぶ強力統治の重圧の連続を実感させる仕掛け**である。

宮川英二（日本大学教授［建築］）は共著『日本人の精神風土』（名著刊行会，1981）の中で，東京の羽田～新橋間に当る距離の和蘭・アムステルダムのある区間に有る，鳶色の煉瓦を積んだ同じ形の集合住宅がずっと続いているのは，日本人には耐えられない思考だと指摘した。共著者の平野雅章（食物史家）も曲阜の孔廟の呆れる程の同じ物の繰り返しを取り上げ，1つ門を潜ると又同じ様な門が有って，最後に達するまでにこれでもか，これでもかとウンザリし，日本人はそういう「諄い」「あくどい」物に耐えられないと述べた。同じ分量の段落が数百も延々と続けば大抵の人は拒否反応が生じようが，**中国と徹底的に向き合う事は煉瓦の堆積の如く無味乾燥な単調・冗漫を受容する必要も有る**。

平野の言う通り日本人は淡泊を好むから敦煌遺跡の天井画みたいな同様の画面に辟易して了うが，彼の莫高窟（世界最大の石窟寺院，世界遺産）の492の石窟に有る4.5万㎡の壁画は，**余白重視の日本的な美意識と正反対の「空白恐怖」や全幅占拠の強迫観念**を窺わせる。本稿の1段落も略40字×6行の紙幅を目一杯使うので増々受け付けられ難いであろうが，**偏執的かも知れない独自の統一規格は電脳網時代の文字情報の発信様式を意識している**。中国の「智能手機」（高度智能化携帯電話）の小説閲覧の画面は，同じ240字の16字×15行の仕様が有る。「推特」（Twitter）の短文投稿の字数制限の140字は日本語・朝鮮語と同様であるが，同じ内容を表す中・日両言語の1：約1.7倍の差（経験則）で238字に為る。

6行有る各段落の紙幅を大体使い切る体裁は印字すると全頁に殆ど空白が無く，**真っ黒な紙面は論説対象の時代の息が詰まり出口が見えない状況に妙に符合するが，約240字で最大限の情報・論点を提示する貪欲で且つ抑制的な表現を工夫するのが動機**である。どの部分も詳述すれば軽く数倍も膨らんで了うが，**絵巻物的な物語の展開の速度の為に細部の割愛は已むを得ない**。

筆者は30年来の数冊の編著書と100篇に近い論説で大体脚注を施し，「中日社会、文化多面比較：

風土、国情篇――地縁人文層次的考察」（1～7）の 1 868 個に上る注や,「“9.11”的既視曾識和『超限戦』的曲径幽処――中共軍事新潮及中華智術根基初探（之一）」の 165 の注の内の注 60・81・126 の各 1 頁，注 129 の 2 頁の様に，**出処の明記や諸説・疑義に関する考証を至って丹念に行って来た**が，本稿の場合は同じ感覚・手法を用いれば本文に匹敵する程の量の注が出来かねず（現に，「“儒商・徳治”の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化［3］」では，注 104～156 の内の注 146 の 6 頁，注 149 の 4 頁，注 139・151 の各 3 頁，注 145・148・153 の各 2 頁等に由って，注釈の分量は本文の 7 頁の 4.5 倍と為る 30 頁にも達した），文中に 4 桁もの注の番号を挿入しなければならないので，**煩雑さ及び既刊論説との重複を避ける為に異例の参考文献列挙の方式を採る**。

出自――建国後「頂上政争元年」に首都で生れた要人子弟

習近平は習仲勲（1913～2002）の 8 子中**の第 6 子**（後妻斉心［1926～　］との間の 5 子［2 男 3 女］中の第 3 子･長男）**として, 1953 年 6 月 15 日に首都北京で生れた。中国人の生存･成長･発展を大きく左右する外的な要因として,「籍貫」**（先祖の居住地又は本人の出身地）**・家庭を含む出自**（出処。出生。血縁に基づいて規定される系譜上の帰属），**民族・性別等の属性，更に時代・社会制度・統治体制・生活環境の諸条件が有る。時間・空間・人間の次元に於ける生年・生地・生家の起点は，彼の物理的・心理的・社会的な原点**と言える。

毛沢東（1893～1976）**治下の中華人民共和国**（49.10.1 成立）**では，就業・結婚・昇進等で「本人成分」（階級区分）と共に問われる「家庭出身」（出身階級）は，**無産階級・勤労大衆か昔の搾取階級か，革命的か反革命的か，体制順応組か否か等に由って，**善悪・優劣の差を付けられ処遇も異なっていた。親の出自・社会的な地位・政治的な評価は今も猶，子供に先天的な烙印を押し後天的な影響を与える事が多い。習近平の人生は産声を上げた瞬間から父親と連動し，その死後まで栄枯盛衰の波及に由って明暗･浮沈の両面を体験して来た。**

習仲勲は陝西省富平県の農家に生れ，第 1 次国（民党）共（産党）内戦（1927～37）の 2 年目, **学生運動に参加した為の投獄中に共産党**（21.7.23 結成）**に入った**。陝（西）甘（粛）辺区蘇維埃政府主席に就く（34）等，**中共・中共軍**（27.8.1 創設）**の西北根拠地の中心人物**を為した。抗日戦争（1937～45）後の第 2 次国共内戦（46～49）では，中国人民解放軍第 1（西北）野戦軍副政治委員を務めた。**貧困地域の黄土高原の寒村で窮乏の暮らしを強いられ，長年の戦争で生死の試練に耐えた経歴は，開国世代の 1 人として典型性が有る。**

建国後は党中央西北局第 2 書記の在任中に中央宣伝部長（1953.1～54.6）に抜擢され，政務院 / 国務院秘書長（53.9～54.9 /～65.1），国務院副総理（59.4～65.1）等を歴任したが，**第 8 期中央第 10 次全会**（62.9.24～27）**で突如「反党集団首領」と断罪された**。査問･強制「学

習」後の1965年12月に河南省洛陽市鉱山機械工場の副工場長に左遷され，北京衛戍区に由る「監護」拘禁（68.1～75.5）を経て再び工場に戻された。**毛沢東の粛清で失った自由・待遇は1978年2月に漸く回復**し，4月の中共広東省委員会第2書記就任で返り咲きした。

改革・開放路線始動の同年12月に広東の党・政首長に昇格した習仲勲は，翌年から経済特区の創設を推進した。1980年に第5期（78～83）全国人民代表大会（国会）常務委員会副委員長に追加当選され，81年に党中央書記処（中央の日常業務を仕切る機構）書記，82～87年に第12期政治局委員・書記処書記を務め，93年に第7期全人代常委会筆頭副委員長の任期満了を以て引退した。**1980年代の裏の最高指導部「八（大元）老」の一員ともされた重鎮**であるが，**一連の職歴・為政には「務実」（実務的）・「開明」（賢明）の感が強い。**

前出の異動は国民経済発展第1次5ヵ年計画（1953～57）実施の為に，高崗（1905～54）・饒漱石（1903～75）・鄧子恢（1896～1972）・鄧小平（1904～97）と共に中央の要職を任ぜられた事である。高の東北局第1書記・東北人民政府主席・東北軍区司令兼政治委員→国家計画委員会主席，饒の華東局第1書記・華東軍政委員会主席→中央組織部部長，鄧子恢の中南軍政委主席代行→中央農村工作部部長，鄧小平の西南軍政委副主席→常務副総理と合せ見ても，習仲勲が**地方の実力者として最高指導部から嘱望されていた**事は可く分る。

1953年初めの**「五馬進京」**（5頭の馬［戦力や大将の譬え］北京入り）**の内，高崗は「一馬当先」**（1頭の馬が先頭に立つ）と言う様に権勢が抜きん出た。全国6大区（広域）の中で彼だけが党・政・軍3権を一手に握り，政治局委員・中央人民政府副主席・同人民革命軍事委員会副主席でもある。北京も含む華北以外の5大区の要人を引き上げた人事は，**地方の「山頭」（縄張り）を削減する狙い**も有ったろう。「東北王」を**支配力が強い本拠地から移らせた**のは，古代兵法**「三十六計」中の「調虎離山」（調って虎を山から離す）**に為った。

露西亜10月革命14周年の1931年11月7日に「中華蘇維埃共和国」が樹立されたが，江西省瑞金県を「首都」とし毛沢東を主席とする**擬似政体は政府軍の討伐に敗れた**。党中央と中国工農紅軍（労農赤軍，初代中共軍）第1方面軍（中央紅軍）は，1.25万キロに渉る長征（1934.10.10～35.10.19）を経て陝甘寧（夏）根拠地に辿り着いた。**陝西北部の延安県に本部を据え12年近く安住した「揺籃」は，劉志丹**（1903～36）**・高崗等が血と汗を流して作っただけに，守護者を以て自任した高の論功行賞の権力欲の膨脹も自然な成行き**である。

中共「7大」（第7回全国代表大会，1945.4.23～6.11，延安）と7期1中全会（6.19）で，中央委員会（委員44人，委員候補33人）と政治局（13人）・書記処（5人）が選出された。陝甘寧根拠地の生え抜きの高崗は序列8位の政治局委員，習仲勲は中央委員候補と為ったが，**最高指導部の書記処には「西北幇（閥）」は1人も居ない**。高の中央人民政府副主席は6人中の最下位で，人民革命軍委副主席も1951年10月からの兼任に過ぎない。**権力の中枢に片足を入れた彼は頂上層には未だ届かず，其故自らの躍進に繋がる下剋上を敢行した。**

第７期中央の「5 大書記」は当初，毛沢東・朱徳（1886～1976）・劉少奇（1898～1969）・周恩来（1898～1976）・任弼時（1904～50）であった。中共軍の総司令を長年務めた「建軍の父」朱は，中央人民政府で国家主席相当の毛に次ぐ筆頭副主席（国の No.2）に収まったが，「7 大」会場に肖像画が政治局・書記処主席の毛と並んで掛った程の地位は，建国の前から毛の意向に由って次第に失った。**往年の「朱毛」の並称も「両雄不并立」**（両雄並び立たず）**の原理に沿って，「1 強（単）独（制）覇」を図る毛に由って許容されなくなった。**

中共「建政」（政権建立）**後の党・国・軍の行方を急激に変えた最初の出来事は，朝鮮民主主義人民共和国**（1948.9.9 成立）**が大韓民国**（同 8.15）**に仕掛けた戦争**である。勃発（1950.6.25）の 2 日後に国際連合（45.10.24 創設）安全保障理事会が侵攻側を糾弾し，武力制裁の決議に基づいて翌月 7 日に国連軍が組成され，主体を為す米軍の先行介入（7.4）に次ぐ猛烈な逆襲が始まった。北朝鮮は漢城等の占領地から敗退し 38 度線への突破も食い止められなかったが，**中朝国境への戦火延焼を憂慮する毛沢東は超難問を突き付けられた。**

北朝鮮首相・朝鮮労働党（1945.10.10 前身創設，49.6.30 結成）党首金日成（1912～94）は，韓国軍が越境進撃に踏み切った 50 年 10 月 1 日に中国の出兵支援を緊急要請した。建国 1 周年の日に**盟友からの哀願を受けた毛沢東は派兵の意志を固めたが，米国との実力差を慮り国内の経済・治安と台湾征服を優先する主張が多く**，翌日の書記処会議と 4 日の政治局拡大会議では**多数の承認が得られなかった。**第 4（東北）野戦軍司令兼中南軍区司令林彪（1907～71）も病気を理由に，毛の指名に由る中国人民志願軍司令の就任を拒否した。

毛沢東の要請で 4 日の会議の途中に西安（陝西省都）から飛来した彭徳懐（1898～1974）が現れ，翌日の会議で彼の毛への同調と志願軍司令の拝命に由って出兵が決定された。**強烈な義侠心で避戦の主流を一挙に変えた最下位の政治局委員は屈指の猛将**であり，解放軍副総司令兼第 1 野戦軍司令・人民革命軍委副主席の他に，西北局第 1 書記・西北軍政委主席・西北軍区司令も兼務していた。**米国と干戈を交える事は毛にとって生涯の中の最も困難な決断の 1 つに入る**が，軍・地方の重鎮と為る彭の支持が無ければ多分成し得なかったろう。

毛沢東が 8 日に発布した軍委命令に由り，東北辺防（国境守備）軍が志願軍に改称し，彭徳懐司令兼政治委員の指揮下で朝鮮へ移動する事が決った。ソ連が朝鮮に於ける空軍支援を拒む等の変化で越境が見送られ，毛は彭・高崗と検討・調整を繰り返した上で，平壌陥落の翌 19 日に秘密裡の入朝を実施した。司令部附近で韓軍の一部を殲滅させた 25 日の初作戦から，休戦（1953.7.27）まで多国籍軍と血戦し続けた。**世界最強国と互角に渡り合えた結果は勝利と言って可いが，最大の功臣は「西北王」の彭と「東北王」の高**に他ならない。

彭徳懐は戦後「共和国英雄」の名誉称号を朝鮮から贈られた時，これは第 1 に高崗，第 2 に洪学智（1913～2006，上将）に与える可きだと謙遜した。其々北朝鮮と接壌する東北の長官，志願軍副司令兼後方勤務司令部司令として，戦争の生命線と為る軍需品の補給を保障

してくれたお蔭だというのが理由である。日本語の「縁の下の力」に当る中国語は「無名英雄」と言うが，高の場合は**高い名声を更に高める事が出来た**。彼は朝鮮戦争で**命の危険を冒さずに株が上がった**が，**党内序列が意外な事態で1つ進んだ展開は彭以上の収穫**と思える。

10月5日の会議で出兵に賛同した任弼時は高血圧等の為，4月から静養や執務時間規制を強いられ開国大典にも出席できなかったが，朝鮮戦争勃発後は書記処書記の責任感から，所管の組織・青年工作以外の戦局にも密接に注目し，志願軍初交戦の10月25日に脳溢血で倒れ2日後に早逝した。政治局員6位・書記候補1位の陳雲（1905～95）が「5大書記」の空席を埋めたが，高崗の党内序列も7位に繰り上げられた。1位上の康生（1898～1975）は50年代前半に療養に専念中で，彼には**野望実現の機会到来**と捉えたのかも知れない。

7期2中全会（1949.3.5～13，河北省平山県西柏坡（はくは））の主席団（議長団）は，毛沢東・劉少奇・周恩来・朱徳・任弼時の順で朱の2位→4位の下落が目を引く。8期1中全会（1956.9.28）選出の毛主席＋劉・周・朱・陳雲副主席も同じ順位であるが，第1期全人代第1回会議（54.9.15～28）で国家副主席に選出された朱は，同時の解放軍総司令の職位廃止に由って**体裁良く干（ほ）され装飾的な存在**と化した。高齢の彼も病弱の陳も**性格が淡泊**で影響力の行使も余りしないので，高崗の**大権争奪の標的**は自（おの）ずと前から不満を抱いて来た劉・周と為った。

1953年3～4月に毛沢東の提議に由り中央政府の職能分担が再設定され，外交は周恩来，経済企画・工業は高崗，財政・金融・貿易は陳雲・薄一波（はくいっぱ）（1908～2007），政治・法律は董必武（1886～1975）・彭真（1902～97）・羅瑞卿（きょう）（1906～78），鉄道・交通・郵政・通信は鄧小平，農林・水利は鄧子恢，労働部は饒漱石，文化・教育は習仲勲，が其々責任を持つと決められた。**高の重みは「五馬」の他の4人の総和に匹敵し**，異名「経済内閣」の計画委員会と8つの工業部門に対する統括は，**外交限定の周総理に比肩する程の権勢**を呈していた。

高崗は中共を「根拠地・軍隊の党」と「白区（敵が統治する地域）の党」に分け，「白区」活動歴が長い劉少奇・周恩来の**準最高位**を承服しなかった。党・国の指導機構は「白区」組に握られているとし，「根拠地・軍」組の支配に変える可（べ）きだと考えた。朝鮮戦争中の後方支援と通じて「白区」工作は根拠地の戦闘と両輪を為し，逮捕・処刑の危険が多い地下工作者も戦場並みに命を懸けたし，周・劉は後に根拠地に入り其々軍委副主席と南方中共軍の政治委員を務めたので，**高が称（とな）えた対立軸と改造論は筋が通らず邪念の混在も否定できない**。

高崗は高級将領の擁護（よう）を得る為に，党は軍が創った物とする**「軍党論」**を鼓吹し，「槍桿子上出党」（鉄砲（てっぽう）から党が生れる）と極言した。北朝鮮の2世領袖金正日（ジョンイル）（1941～2011）は労働党中央総書記と為った97年に，軍事を最優先し朝鮮人民軍（32.4.25創立）を社会主義建設の主力と為す「先軍思想」を打ち出したが，革命を勝利に導く万能の宝剣と言う**「先軍政治」の危（あや）うさは高の「軍党論」にも潜（ひそ）む。毛沢東は「槍桿子里面出政権」（鉄砲から政権が生れる）と唱（とな）えたが，「党指揮槍」（党が鉄砲［軍］を指揮する）の原則をも力説した。**

毛沢東の宿敵蒋介石（1887～1975）は国民革命軍（25.7.8 創設）総司令として，27 年 4 月 12 日に上海で反共政変を起し 18 日に南京（江蘇省都）で国民政府を樹立した。汪精衛（1883～1944）が率いる武漢（湖北省都）国民政府も 7 月 15 日に中共粛清を始め，国民党（19.10.10 成立）「1 大」（24.1.20～30，広州［広東省都］）で発足した第 1 次国共合作は崩壊した。8 月 7 日に漢口で臨時政治局常委会が**中央緊急会議**を招集し，**初代総書記陳独秀**（1879～1942）**を批判・解任したが，「槍桿子里面出政権」は其処で言い出された**のである。

毛沢東の臨時政治局委員候補当選（7 人中 3 位）は 2 回目の指導部入りで，中央秘書として列席した鄧小平は年末に指導部側近の秘書処秘書長に任命された。**非常時に初対面した 2 人は武装闘争・軍隊掌握の意義・効用を十二分に心得，各々の執政に於いて軍委主席の座を堅守した**。毛は又「戦争と戦略の問題」（1938.11.6）で「党指揮槍」，「決不容許槍指揮党」（鉄砲が党を指揮することは決して許容しない）と語った。党を軍の所産とする高崗の「軍党論」は建党 6 年後に軍が創立された史実，及び**「党高軍低」の実態と共通認識**に反する。

毛沢東は生涯の最も暗黒な時として長征中の党・軍分裂の危機を挙げ，党が軍を指揮する鉄則はその経験に由って確立された。中央紅軍は紅 4 方面軍と合流した時点（1935.6.12，四川省懋功［今の小金県］）で，兵力が当初の 8.6 万人から 1.8 万人に減り，張国燾（1897～1979）が総帥と為る 4 方面軍の 1/5 に過ぎなかった。張は**数の力に頼って**部下 9 名の政治局（現状は 8 名）入りを要求したが，毛等は**党の優位と中央の権威を盾に**拒否した。張が**政争の禁じ手である武力行使**に出ようとした処，毛等は察知して急遽脱出し難を逃れた。

張国燾は自ら主席と成る「中国共産党中央委員会」を作った（10.5）が，南下の挫折と共産国際（1919.3.2 成立）の厳命で翌年 6 月 6 日に解散した。10 月に甘粛で中央紅軍と合流した後は軍権を取られ，陝甘寧辺区政府副主席在任中の 1943 年 4 月に国民党に身を投じ党から除名された。彼は初代指導部の中央局 3 人団の内の組織主任であるが，陳独秀も 1929 年 11 月に中央の方針に反する言論で党籍を剥奪され，32 年 5 月に「中国共産党左派反対派」の初代中央総書記に推されたので，この様に**上層部には決裂・分裂の危険が間々有る**。

中央局 3 人中の宣伝主任李達（1890～66）は 23 年に総書記との衝突で脱党し，建国直後に再入党し哲学者として最後に武漢大学の学長を務めたが，「文化大革命」（66～76）初頭に紅衛兵（青少年の造反派）の非難・殴打に遭い，旧知毛沢東宛の命乞いの手紙も効かず無残に死んだ。陳独秀は国民党に投獄され（1933～37）貧困な隠居生活の中で病死し，張国燾は香港に次ぐ移住先の加奈陀で孤独死を遂げた。**3 人とも党から離脱し政治的な処刑（除名や迫害死）を受けたから，中共は草創期から厳酷な政争に満ち求心力が常に求められる**。

張国燾の「第 2 の中央」設立と並ぶ党史上の最大の動乱は，「文革」前期の党・軍委の唯一の副主席が主役と為る「林彪事変」（1971.9.13）である。「9 大」（1969.4.1～24）採択の党章（党規約）で毛沢東の後継者と明記された彼は，ソ連への亡命とされる国外脱出で妻

葉群（53歳）と共に蒙古の砂漠に墜落死し，麾下の「4大金剛」（四天王）の将領の逮捕と合せて，政治局委員の21人中6人が一挙に消えた。**複数の政治局成員が同時に非業の死に至るのは前代未聞の事**であるが，**建国後の政治局委員が政争で命を落す第1号が高崗**である。

高崗は民族資産階級に対する自分の左傾偏向を指摘した劉少奇に怨念を持ち，毛沢東と劉の間に政見の相違が出た事を劉の凋落の兆しと捉え，全国財経会議（1953.6.13～8.13）で劉に近い薄一波を攻撃する形で劉を貶めた。会議後に中央からソ連の閣僚会議を最高国政機構とし，党に副主席又は総書記を設ける案が出され，毛は煩雑な日常業務を減らす可く指導部を1線・2線に分け自ら2線に退くと言い出した。**高は自分に対する重用と機構改組の可能性に乗じて劉降ろしに掛ったが，策士が策に溺れて己の墓を掘る破目に陥った。**

高崗は毛沢東は劉少奇に不満を持っていると言い触らし，毛は劉を議会（全人代常委会），周恩来を内閣議長会議，高に政治局を司らせる心算だと噂を流した。1953年10月の休暇で華東・中南を回って**高官の反劉情緒を煽動し**，先ず内閣議長会議主席に彼が相応しいと主張した林彪の共鳴を得た。鄧小平に対し「未熟」な劉を倒すよう共闘を求め，陳雲に対し副主席の増設と彼我の就任を提案したが，2人は口車に乗らず12月中旬に毛に告発した。毛は直ちに陳を高の遊説先に派遣して，高の**陰謀活動**を通報させ林彪等に同調を戒めさせた。

彼は12月に社会主義時期に於ける党の総路線の学習・宣伝の要綱案に，高崗を敲く論評を書いて党内の広範囲で**警鐘を鳴らした**。「集団指導は我々の類型の党組織の最高原則で，分散主義を防げ，党内の個人野心家（中国の張国燾，ソ連のベリヤの類）の非合法活動を防げる。故に党組織の集団指導制度を特に強調し真剣に実行しなければならない。如何なる個人の英雄的な役割も不適切に過分に強調す可きではない。満腔の情熱で勤勉に人民に奉仕する共産党員の尊い品格が資産階級の卑劣な個人主義に堕落する事は決してさせない。」

個人の英雄的な役割を誇示する野心家の非合法活動とは正に高崗の振舞で，彼は陝甘寧時代から朝鮮戦争までの功労と全国最大の重工業基地の東北の実力に頼って，**自信過剰の向う見ずな猪突猛進で党紀と政争の禁則を破った。派閥を許さぬ中共では小集団の結成と高官同士の結盟が忌み嫌われ，政敵打倒の為の謀反は反党行為として容赦されない**。元より彼は軍で主に政治工作を担当し中央入り後に軍職も無いのに，**政局を動かす為に政権の礎・要の軍に働き掛けた挙動は，毛沢東の聖域に踏み込んだ故に自滅を決定的にした。**

高崗は1953年3月に中央組織部副部長安子文（1909～80）に対し，毛沢東から政治局の改組と中央各部機構の強化を直に指示されたと伝えた。安は中央の委任が無い儘に政治局委員・中央各部責任者の案を作って，高と上司の饒漱石に示したが，高は安を劉少奇の側近と見て案も劉の意思に依る物だと決め付け，薄一波が有るのに林彪も朱徳も無い事を捉えて党内で離間を行った。朱・林を外すのは**戦時体制から脱却する発想**であろうが，中央人民政府人事部部長でもある安の**越権行為は，波乱を惹起した**為7月に訓戒処分を受けた。

安子文が主管首長でない高崗の伝言を信じたのは，**毛沢東の至高性**と共に**毛に近いと見られた高の権勢**の証である。彼は3年後に組織部長に昇任し「文革」初頭まで務めたが，高・饒漱石が感じた通り劉少奇の信頼を負う処が大きいかも知れない。高・饒は全国財経会議で安の失態を突破口に後ろ盾の劉に矛を向け，劉・周恩来は其々「圏圏」（縄張り）が有ると攻撃した。饒は9～10月の全国組織会議で直截に劉に反対する闘争を展開したが，高との共同戦線は**最高指導部の安定を脅かした**ので，**流石に坐視できぬ危険水域**に突入した。

毛沢東は高・饒問題に就いて17～19日に陳雲・鄧小平・周恩来と4者協議を続け，20日に彭徳懐・劉伯承（1892～1986）・陳毅（1901～72）・賀龍（1896～1969）・葉剣英（1897～1986）と話し合った後，劉少奇・周と個別会談し，21日に朱徳・陳毅と其々面談し，22日に彭と会った。**政争の勝利に必要な党・軍要人の多数支持**を得た上で，23日に高を呼んで批判した。毛は同夜の劉・周・彭・鄧との打ち合せを経て翌日に政治局拡大会議を招集し，北京には自分を頭とする司令部の他に別の人を頭とする司令部が有ると言って高を撃った。

党を分裂し党・国の最高権力の簒奪を謀る高崗・饒漱石の蠢動から，**一部の幹部の党の団結や集団指導，中央の威信の強化・向上の重要性に対する認識不足，革命勝利後に擡頭した極めて危険な傲慢な気分が露呈した**，と毛沢東は考えて「党の団結の強化に関する決議」の起草を提案した。翌年の7期4中全会（2.4～10）で決議が採択されたが，自己批判は歓迎し批判は可能な限り避けるという毛の方針に関らず，2人は余り反省・承服しなかった。高は2月17日に拳銃で抗議の自殺を試み，未遂後8月17日に大量の睡眠薬で命を絶った。

1953年初めから準備された「8大」は事件の影響で延期したが，55年3月21～31日に異例の全国代表会議が開かれ，鄧小平が中央を代表して「高崗・饒漱石反党連盟に関する報告」を行い，両者の党籍剥奪と党内外の全職解任が決定された。中央・各地の党員，取り分け**高級幹部への監督を強化する**為に，中央監察委員会が復活し董必武が書記に当選した。国民経済発展第1次5ヵ年計画に関する陳雲の報告と草案採択の決議が為され，毛沢東は開会の辞で数十年以内に高度に工業化した社会主義強国の建設を遂げようと目標を掲げた。

官製『毛沢東伝（1949－1976）』（中共中央文献研究室編，逢先知・金冲及主編，上・下2巻，中央文献出版社，2003）第8章「過渡時期総路線（下）」に，前述の経緯に続いて毛の2点の所感が記してある。先ず長期に亘って信頼・重用した高崗・饒漱石の陰謀に遅々として気付かなかった事から，**人を洞察・識別する事の困難さ**が感じられ，**見せ掛けの表面的な現象に惑わされてはならない**という教訓を得た。そして**高級幹部の傲慢な気分が最大の危険**だと再認識し，**全党，特に古参同志は驕りと短気を戒めなければいけない**，と言う。

同章の総括は高崗・饒漱石に反対する闘争を**中共執政後の第1次重大な党内闘争**とし，批判と自己批判を通じて思想上・政治上の教訓を汲み取る事に重点を置き，高・饒の影響で過ちを犯した人に対する処理は慎重だったので，比較的成功した，比較的健全な党内闘争だ

と断じる。確かに高の「五虎上将」と呼ばれた部下5人の党内解職・左遷を除いて処分が少ないが，**「五馬進京」中2人の失脚と高の自殺・饒の投獄は極めて凄惨（せいさん）な結末**である。この様に**1953年は建国後「頂上政争元年」**と命名でき，**以降の上層部内争の祖形**を為している。

饒漱石は全国代表大会閉幕の翌日に逮捕され，罪名は「饒漱石・潘（はん）漢年・揚帆（はん）反革命集団の頭目」である。上海市委第3書記･副市長の潘（1906～77）は抗日戦争中の情報工作で，占領軍の傀儡（かいらい）政権（40.3.30成立）の主席汪精衛と秘密会談をした事が有り，歴史上の問題の申告を促す毛沢東の呼び掛けに応じて白状するなり拘禁された。元上海市公安局局長の揚（1912～99）は54年の除夜に身柄を押えられ，饒は華東局・上海市委第1書記在任中2人の敵の廻し者を庇護したとして逮捕され，潘は翌々日に**同じ毛の命令で自由を奪われた**。

饒は1965年8月の**初裁判**で**最高人民法院（最高裁判所）の終審判決**に由り懲役14年に処され，翌月の仮釈放後67年3月に再収監された。潘は1963年1～6月の初裁判（同）で懲役15年と為り，2月に北京市公安局労働改造農場に移され，65年9月の仮釈放後67年3月に再投獄され，75年5月に湖南省第3労改農場に移され，翌年1月に無期懲役・党籍永久剥奪を言い渡された。揚は逮捕（1955.4.1）後65年8月に懲役16年の判決が下され，仮釈放を経て67年3月に再逮捕され，75年8月の釈放後は湖北の労改農場に送られた。

饒は刑期を上回る通算18年の監禁の末，最重要犯人を入れる公安部の秦城監獄で死去した。翌々月に刑期より数年長い服役を終えた潘は7ヵ月後に無期懲役を食い，既（すで）に患（わずら）った肝癌の悪化で1年3ヵ月後に没した。同じく刑期以上の囚人生活を強いられた揚は歿（ぼつ）年71の2人より長生きしたものの，「文革」中の北京衛戍区が管轄する秦城監獄から出た時に，**虐待で妻を識別できない程に精神が錯乱し**，1979年1月に自由の身で上海へ帰った後に数年の治療で改善したが，饒の獄中の精神分裂（統合失調）症との**同病は憐（あわ）れむ可（べ）き**である。

最初に捕まった揚は1980年4月に公安部の再審査に由って，「敵の廻し者」「反革命」の冤罪は晴れ，83年4月に「仕事上の重大な誤り」の結論も覆された。潘は1982年の党中央「8.22」決定で名誉が回復したが，功績を追認する待遇として翌年4月に遺骨が北京八宝山革命公墓（要人・著名人の墓地）に入れられた。饒は中共中央文献編輯（しゅう）委員会編『毛沢東著作選読』（1986）の注釈で，間諜（スパイ）摘発工作を司（つかさど）る中の一部の行為が誤って「敵の廻し者」活動とされた為，「反革命罪」で懲役に処された，という表現で**部分的な名誉回復**に為った。

揚帆の失脚は江青（1914～91）の恨みに起因し，53年3月にモスクワで同じ療養中の江と出遇（くわ）したのが**悲運の発端**である。彼は南方中共軍の新4軍（国民革命軍新編第4軍，1937.10.12改編）の軍部秘書として，39年5月に政治委員項英（1898～1941）に江の女優時代の悪評を告げ，延安に行った江が毛沢東と結婚する可能性を聞いた項は電報で反対したが，半年前に既成事実と為ったので情報源の彼は不快を買った。同年12月の上海公安局副局長の解任から「文革」中の迫害まで，**領袖夫人の威光と周囲の迎合とは無関係ではない**。

建国初期に中宣部映画処副処長・文化部映画局顧問に過ぎなかった江青は，1956 年の政治局決定で毛沢東の「5 大秘書」の末席（生活担当）と為り，10 年後「中央文革」（中共中央文化革命領導小組［指導部］, 5.28 設立）第 1 副組長に就任した。翌年 3 月に陳伯達（1904～89）組長を通じて謝富治（1909～72，上将）公安相に対し，揚帆・饒漱石・潘漢年の再逮捕を命じる無署名の「小組」指示が渡された。揚の名が先ず出た処を見ても**江の魔手の影**が感じ取れるが，彼女は夫君の死後に逮捕されたから揚の名誉回復の障害が少ない。

19 字の手書きの命令書で又 3 人を監獄にぶち込めた暴挙は，毛沢東が潘漢年の告白・反省文に「此の人は今後信用す可からず」と書き，数時間後に即刻逮捕・審査を指示した一幕に既視感が有る。上海市党・政首長の陳毅から潘の件を報告された時の激怒は，抗日戦争中の中共と外敵の暗中結託に対する詮索が耐え難いからだとも見られるが，**前日の監委設立の空しさを思わせる彼の横暴な制裁**は後に 1 例しか無い。潘の名誉回復は**罪名の不成立と処罰の非合法性が明らか**である上に，**毛の誤りを正す新時期の路線に則った**ので実現した。

饒漱石の逮捕は潘漢年告白の前日だから潘を庇った云々は牽強付会で，初裁判の終審判決文も潘に触れず増々奇々怪々である。不当逮捕が 31 年後の『毛沢東著作選読』の注釈で遠回しに認められたのは，**「高饒反党連盟」の処理を推進した鄧小平の健在で完全否定は難しい**為であろう。高崗との繋がりが弱いのに陰謀集団の盟友とされた疑獄には疑問符も付くが，中共政権の第 1・2 期（1949.10～54.9 /～59.9）に跨る 2 回の粛清は，**建党以来の「残酷闘争，無情打撃」の伝統を体現し，政争・弾圧を厭わぬ毛・鄧の辣腕を存分に示した。**

『毛沢東伝（1949―1976）』第 7 章「過渡時期総路線（上）」には，**建国後の第 1 次党内頂上政争の前哨戦**が詳述されている。**「大規模経済建設元年」**（造語）の 1953 年を迎える前年の大晦日に，党中央機関紙『人民日報』に新税制に関する通告・社説・記事が掲載された。税制改正の案は財政部が提起し，中央財経委員会党組（党の核心［指導］小組）が審議し，政務院会議が批准した後，中華全国工商連合会等の賛同を得たが，社説中の「公私（国営・私営）一律平等納税」の文言は，毛沢東から 7 期 2 中全会の決議に反すると指摘された。

税制改正を予め中央に報告せず資本家と相談した事は党より資本家を重んじる事で，新税制は資本家の喝采を浴びたから右傾日和見主義の誤りだ，という**毛沢東の叱咤は政治の次元で非を咎める厳しさが有る。**毛の指導の下で周恩来・高崗・鄧小平が進行役を務める全国財経会議は，第 1 議題の財政問題で大いに揉め半月の予定が 2 ヵ月に為った。政務院財経委員会副主任・財政相の薄一波は 2 回（7.13，8.1）の自己批判を強いられ，査問・弾劾の場と化した不穏な空気の中で，高崗は**経済政策を政争の具にして**劉少奇を暗に攻撃した。

毛沢東は 1952 年 9 月 24 日に「過渡期の総路線」を首唱し，53 年の同日に全国政治協商会議（49 年 9 月 21 日に成立した中共主導の政治助言機関）全国委員会の建国 4 周年慶祝「口号」（標語）の形で公表された。建国後の新民主主義から社会主義へ転変する過渡期の総路

線は，相当長い時間を掛けて逐次に国家の工業化と農業・手工業・資本主義工商業に対する社会主義化の改造を実現する旨である。毛は実行の過程で**左傾（急進）・右傾（保守）の偏向を警戒した**が，新税制問題で**不満を感じたのは思案中の総路線に合わない為**である。

党紀違反の行為の中で「叛党」（党を裏切る）が最大の罪と為り，故に入党の誓詞は「永不叛党」（永遠に党を裏切らない）と結ぶ。**2番目の「反党」も「高饒連盟」に被（かぶ）られた様に大罪**であり，**その粛清で編まれた罪名の「陰謀簒党奪権」（党を簒奪し権力を奪うことを企（たくら）む）は，思想・言論に止（とど）まる反党傾向を超える究極の反党行為とされる**。次の**「路線錯誤」（路線の誤り）は党是に背く行為**で，「経済問題」（金銭面の醜聞（スキャンダル））や「生活錯誤」（性的な醜聞等）より重いから，会議で**「路線錯誤」を糺（ただ）された薄一波の恐懼（く）は察するに余り有る。**

源流――中共創設者・党首の多岐（き）・多難と毛沢東の「歩歩高昇」

習近平は総書記再選（2017.10.25）の6日後に政治局常委全員を率（ひき）いて，上海の中共一大会址（会場跡）記念館を訪ね，敬礼姿で入党誓詞を読み上げ他の6人に復唱させた。**「不忘初心」（初心を忘れず）と銘打った仰々（ぎょうぎょう）しい儀式**であるが，**「1大」代表の中で張国燾の「叛党」と李達の離党の他，李漢俊**（1890～1927）**は22年の脱党後24年に除名，包恵僧**（1894～1979）**は27年に脱党，劉仁静**（1902～87）**はトロツキー派結成で29年に除名，陳公博**（1892～1946）**・周佛海**（1897～1948）**は22・24年の離党後25・26年に国民党に転じた。**

劉仁静は1935年3月から国民党に投獄され，2年後に出所しトロツキー派を離脱したが，50年12月21日の『人民日報』に党への謝罪を発表したのに，誤りが許されない故に長らく定職に就けず，67年6月から78年末まで秦城監獄に入れられた。**中共が裏切り・変節・分裂行為を容赦しないのと通じて，国・共両政権とも「叛国」（国を裏切る）者・売国賊を極刑も含めて厳罰する**。汪精衛死後の傀儡政権の主席陳公博は最大の漢奸（かん）として銃殺刑に処され，官職が彼に次いだ周佛海も死刑判決の特赦（しゃ）後に無期懲役を服する内に獄死した。

陳独秀・張国燾の専制に反撥して脱党した李漢俊は，湖北省教育庁長在任中に蔣介石・汪精衛の中共粛清に反対し，広西軍閥胡宗鐸（こたく）（1892～1962）の部隊に殺されたので，**党歴上の汚点に関らずマルクス主義の伝播者の英名を留（とど）めた**。彼の影響を受けた陳潭秋（1896～1943）は新疆（きょう）軍閥盛世才（1892～1970）の命で処刑され，鄧恩銘（1901～31）は軍閥韓復渠（きょ）（1890～1938）治下の山東で処刑され，何叔衡（しゅくこう）（1876～1935）の戦死と合せて**「1大」代表中4人も革命に殉（じゅん）死し，陳公博・周佛海を入れれば6人も戦争に由って命を喪（うしな）った。**

動乱・貧困の時代に天寿を全（まっと）うする事の難しさを物語る様に，もう1人の王尽美（1898～1925）は肺結核で早逝した。**党から遠ざかった7人中の建国後の大陸に残った3人の内，再入党した李達は親交を再開した毛沢東が起した「文革」で惨死し**，政治の圏外に身を置

く劉仁静・包恵僧の享年（85）は彼より長いが，13 人中最年少の劉は国務院参事室参事に任命された翌年に交通事故で急死した。包は「叛党」行為も無く 1948 年に国民党側の官職を辞めて澳門（マカオ）に行った為か，建国後に内務部・国務院の参事を歴任し平穏な余生を過せた。

各地共産主義小組代表の枠外に在る陳独秀代理の包恵僧の安泰は，**中共結成時の成員（メンバー）（50 人余り），取り分け役職者に付き纏う多難な運命**を浮彫（うきぼり）にする。欠席した陳独秀と並ぶ創始者の李大釗（しょう）（1888～1927）は，東北軍閥張作霖（りん）（1875～1928）の命に由り「外国と通謀」罪で絞首刑に処された。ソ連大使館に避難中の逮捕は武漢の日本租界に逃げた李漢俊の処刑と似通うが，**李大釗の「ソ連と和す」容疑は 1950 年代後期の 2 回の将帥に対する粛清でも持たれ**，林彪に加えられた「叛国」の罪名も逃避行がソ連への亡命と断じられた為である。

毛沢東は「9 大」開会の辞で「1 大」の 12〔ママ〕人の代表に就いて，山東の王尽美・鄧恩銘，武漢の陳潭秋，湖南の何叔衡，上海の李漢俊は犠牲となり，陳公博・周佛海・張国燾・劉仁静は「叛変」（敵側に寝返る）乃至漢奸に為り，武漢大学学長の李達は 2〔ママ〕年前に死去し，今此（ここ）処に居るのは董必武と自分だけだ，と語った。陳潭秋と同じく李漢俊の影響でマルクス主義に接した董は建国後，政務院副総理・最高人民法院院長・国家副主席→主席代行・政治局常委を歴任し，**政治的に無傷の儘 13 人中最長寿の 89 歳で大往生を遂げた人生は示唆に富む。**

董必武は政治局常委・全人代委員長在任中に 89 歳で死去した朱徳と同様に，**無私・無欲・無害の為 1 度も失脚せず名誉職に近い閑職が与えられ続けた。**同じく**戦争中に負傷する事が無い毛沢東は政争で負けも有ったものの，「無畏」（畏れる所無し）・無情と強力・強運に由って絶対覇者と成った。両者の進取と無為は同工異曲に党内で生き延びる術を見せたが，**待遇改善の陳情を試みる劉仁静に対し面会を拒否した董も，公の場で邂逅（かいこう）した劉と敢えて握手しなかった周恩来も，**晩節を汚すまい一心で不要な危険性を負わない保身本能が強い。**

『春秋公羊伝』「襄公二十九年」の「君子不近刑人」（君子は刑人に近寄らず）から，「君子不近危」（君子は危うきに近寄らず）という警句が生れた。**党内闘争の刑罰を受ける人や前科者を疫病神（やくびょうがみ）として扱うのは君子の慎重さ**かも知れぬが，**毛沢東が任期最長（名目上 33 年，実質的に 38 年）の党首を務めたのは君子でない故である。君子が党首に不向き**である事の好例は 2 代目の瞿（く）秋白（1899～1935）であり，彼は国民党に処刑される前に随想「多余的話」（余計な話）を綴（つづ）って，**一介の知識人が領袖の地位に推された歴史の誤解**を嘆いた。

習仲勲の前任・後任の中宣部長（1943.1～52.12，54.7～66.5）陸定一（1906～96）は，中国社会主義青年団（22.5.5 成立）中央宣伝部長（27.5～31.?）に就任する前に，党中央の宣伝工作責任者（27.4・8～10 部長）瞿秋白から，「同志諸君は一部の重大な問題に対する見解の食い違いが有り，党内には闘争が有る」と言われた。**共産党員は革命の為に生死をも度外視するから党内闘争は有り得ない，と世間知らずの彼は思っていたので衝撃を受けたが，**「5 大」（1927.4.27～5.9，武漢）で内争を目撃した事で，瞿を師と仰（あお）ぐ様に為った。

「8.7 会議」で臨時中央局責任者と為った瞿秋白は，**ソ連共産党**（1912.1.5 前身成立）**を主体とする共産国際（コミンテルン）の意に適わない故**，「6 大」（28.6.18～7.18，モスクワ）で地位が下がった。政治局常委として 1930 年 9 月から再び中央を司ったが，6 期 4 中全会（31.1.7，上海）で政治局から追われた。1935 年 2 月 24 日に福建省長汀（てい）で敵の包囲を突破する戦（いくさ）で逮捕され，**同日・同じ戦場での何叔衡の死と共に建党世代の遭難率の高さを思わせる**。国民党への帰順を断り「6 大」初日の 7 年後に銃殺されたが，毛沢東に由って**政治的な処刑**を受けた。

瞿秋白の獄中随想録は**党を健全化できなかった自責**から消極的な内容と為り，革命への忠誠を信じる陸定一は四半世紀後も敵の偽造だと思い込んだが，毛沢東は 1964 年に党内「叛（はん）徒」摘発の為に「命乞い」「自首・裏切り」の証拠と捉えた。1967 年 5 月 12 日に八宝山革命公墓に在る瞿の墓が紅衛兵に破壊され，72 年中央第 12 号通達（3.17）で毛の「自首・裏切り」の断罪が公表された。改革・開放後，中央紀律検査委員会（1949.11.9～55.3.31 を経て，78.12.22 復活）の審査報告書（80.10.19）に由って，**漸く潔白・忠節が証明された**。

党首の職名は第 1 期の中央局書記から第 2～4 期の中央執行委員会委員長，第 5 期の中央総書記に変った。6 期 1 中全会（1928.7.19）で政治局・同常委会の主席に選出された向忠発（1879～1931）は，名義上の党首として慣用の「総書記」と呼ばれた。彼は上海潜伏中に逮捕された当日（1931.6.22）に党の機密を売り，投降の意を示したにも関らず 2 日後に処刑された。**労働者出身・労働運動経験が政治的な資本と為って，労働者階級を前衛部隊とする中共の最高権力が付与された凡才の男は，皮肉にも党首「叛党」の悪（あ）しき例を作った**。

向忠発は 4 月 24 日に逮捕された中央委員の顧順章（1903～35）に敵に売られたのであり，中央特別行動科を率いて**多数の叛徒を制裁・処刑した顧の裏切りも衝撃的**である。第 6 期中央の初代 23 人の内に順直（今の河北・天津・北京）省委書記王藻（そう）文も党を裏切り，1929 年に除名され省委の報復で殺害された（歿年未詳）。1931 年 1 月・9 月に政治局委員・常委と為った盧（る）福坦（1890～1969.11.?）は，33 年 1 月の逮捕後に国民党側に寝返り，28 年に亘る服役中に康生の 30 年代の逮捕・変節歴を供述した後，口封じの為に秘密処刑をされた。

向忠発時代の中央を 1928 年 7 月～29 年 1 月に仕切った蔡（さい）和森（1895～1931）は，香港で逮捕され引渡し後に広東軍閥陳済棠（とう）（1890～1954）の命令で殺された。1929 年 1～11 月に大役を担った政治局常委李立三（1899 年生）は，後任の周恩来に次いで 30 年 6～9 月に実質的な最高指導者と為ったが，次に**再登板した瞿秋白と同じく内争で失墜した**。初代労働相（～1954.9）在任中の労働組合寄りの姿勢も批判を受け，67 年 6 月 22 日に「自殺叛党」の道を選び（毛沢東宛の遺書の言），80 年 3 月 20 日に中央主催の追悼会で名誉が回復した。

毛沢東時代には迫害に由る自殺は自ら党・人民と断絶する事と見做（な）され，高崗の自殺も党に対する反抗として断罪された。同じく睡眠薬で自害した李立三が「自殺叛党」を認めたのは**政治的な自裁**の様に映るが，**自らの「罪行」（犯罪行為）を弁護する方法が無いと言**

う悲痛な気持が根底に有った。自分及び一家は「里通外国」（秘かに外国と内通する）の犯行は一切しておらず，この点だけは確りと調査・審査して事実に基づく結論を下すよう中央に請いますとも哀願したが，**家族の免罪の為に命と政治生命を犠牲にした悲劇**は痛ましい。

李立三は1931年に**過激・妄動の「左傾路線錯誤」**を批判され，**「学習」の名目**でソ連に派遣され15年間も異国に滞在した。中共駐共産国際代表団勤務中の1936年に現地の女性（中国名李莎，1914～2015）と結婚し，38年2月～翌年11月に**ソ連の大粛清で「トロツキー派・日本の間諜」容疑で監禁され**，無罪釈放後「7大」での中央委員当選に由り帰国が許された。1960年の中ソ決裂後62年に康生主導の妻に対する審査が為され，母国との繋がりを疑われた彼女は64年に帰化したが，「文革」中「ソ連の間諜」の冤罪を被せられた。

李立三と外国人の結婚は党の内規に由り上級組織の承認が必要で，許可を出した中共駐共産国際代表団の責任者王明（1904～74）は，共産国際の支持の下6期拡大4中全会（31.1.7，上海）で事実上の最高指導者と為り，向忠発事変の6月に政治局常委に選出され9月まで総書記代行を務めた。その「左傾路線」と抗日戦争中の「右傾投降主義」に由り，**毛沢東が起した党内闘争の延安整風（1942.2.1～45.4.20）で最大の標的にされた**。失脚後1956年1月から病気治療の為ソ連に赴き，同年の中央委員当選の後も客死まで党と没交渉でいた。

王明は上海での潜伏が困難な状況下1931年11月にソ連へ行ったが，本名陳紹禹から変えた通用名と同音の「亡命」（wangming）は，図らずも敵に追われた当時と党から疎遠された余生の身分に符合する。死去（3.27）の4日前に完成した回顧録『中国共産党の50年と毛沢東の叛逆行為（原文＝叛徒行径）』は，毛を叛逆者と敲く「負け犬」の遠吠えの感も無くはないが，**中共から除名されないのは反党・「叛党」とまでは断じられない事，権力を失った無害の存在である事，庇護者のソ連に影響力を及ぼせない事に由る結果であろう**。

1931年9月に臨時政治局書記総責任者と為った博古（1907～46）は，6期5中全会（34.1.15～19，瑞金）で旧称「総書記」の党首に再任した。彼は共産国際派遣の軍事顧問ブラウン（中国名李徳，独逸人，1900～74）を信頼し切って，その**強情な指揮と硬直な戦法の所為で軍に甚大な損害を与えた**。長征中の政治局拡大会議（1935.1.15～17，貴州省遵義県老城）で更迭され，延安整風で王明と共に**「教条主義・主観主義・宗派主義」**を糾弾された。末席の第7期中央委員に当選した後，失意の儘に翌年の「4.8」飛行機事故で散った。

毛沢東は1932年10月から**主流派の排除**で権力を失い，その中華蘇維埃共和国中央政府人民委員会主席の職は，34年2月に先月に政治局委員・書記処書記と為った張聞天（1899～1976）に継がれた。彼は長征中に毛・王稼祥（1906～74）と連合戦線を組んで遵義会議で「路線錯誤」を問責し，博古・李徳・周恩来「3人団」の解散と党・軍指導部の改組を実現させた。2月5日の政治局会議（雲南･四川両省と接壌する貴州省畢節林口鎮雞鳴三省村）で，遵義で政治局常委に追加選出された毛の提案に由り，張は常委会の総責任者に推された。

遵義会議は李徳に代って周恩来・朱徳が軍事を指揮すると決定し，3月10～12日の政治局会議（遵義県楓香鎮苟壩村）で軍事指揮小組が組成され，周恩来・毛沢東と遵義で政治局委員候補から委員に昇格した王稼祥が軍事の指揮権を握った。前（線対）敵委員会政治委員として新「3人団」に入った毛は，8月4～6日の政治局拡大会議（四川省松潘県毛爾蓋沙窩寨）の後に軍の統帥と成った。**軍事指揮小組入りから次第に軍・党の最終決定権の掌握に至った上昇は，鉄砲から権勢が生れる原理に沿い，毛の「小組統治」の祖形と威力を現した。**

6期拡大6中全会（1938.9.29～11.6，延安）では**共産国際の意に由り，日増しに実力・権威を強めた毛沢東は実質的な党首に成り**，名義上の総責任者張聞天は宣伝工作等を主管する事に為った。1927年7月12日に発足した臨時中央常委会の5人中の李維漢（1896～1984）は，歴代指導者の中で瞿秋白は封建的な家父長制を行らず，最も民主集中制（民主的な中央集権主義）を貫徹・実行したと讃えた。**張も同じ美風に由って毛から「明君」と称賛されたが，陳独秀に勝るとも劣らぬ毛の専制の第1歩が正式に張に取って代える事である。**

6期6中全会の長江局撤廃の決定で責任者の王明は実権を奪われ，3年後に始まった延安整風で王に近い要人たちは批判された。学風・党風・文風の「三風」（「風」＝流儀・活動方法）整頓は，思想上の主観（独断）主義，組織上の宗派主義，表現上の空言癖の克服を建前としたが，**立派な隠れ蓑の下で非情な党内闘争が展開された**。博古・劉伯承等のソ連留学組や，王の補佐者として周恩来・任弼時・彭徳懐・陳毅・李維漢等が自己批判を強要され，多くの幹部・党員・関係者が査問・拷問を受け，**党史上の粛清の規模の新記録**が作られた。

毛沢東が主任，劉少奇・康生が副主任を務める中央総学習委員会（1942.6.2成立）の推進で，**非主流派・異端者への強硬抑圧と毛派の全権掌握が急激に展開された**。共産国際解散（1943.5.15決議，6.10実施）の直前の政治局会議（3.16～20）で，毛は政治局・書記処主席に推挙され名実倶に党首の座に就き，書記処の毛・劉・任弼時3人構成には建国後の毛・劉体制の原型が現れた。**劉は「7大」に於ける党規約改正の報告で「毛沢東思想」の概念を首唱し，整風終結の直後の同大会は彼の主導で毛を神格化する個人崇拝の起点と為った。**

「延安整風を経て，何人かの親友が出来た。それは劉少奇・陳伯達・胡喬木・高崗・陸定一・彭真，又周揚も居る」，と毛沢東は何度も言って劉を始めとする協力者を褒めた。陳・胡（1912～92）は39・41年から毛の政治秘書を務め，後者は中央総学委秘書（事務局長）を兼ねた。彭は毛が校長と為る中共中央党校（党中央学校。33.3.1前身成立，35.11改称）の副校長，周（1907～89）は魯迅芸術文学院（38.4.10設立）院長である。7人衆は後に**論功行賞で大抜擢**されたので，**毛の「親信」（側近）重用も宗派主義の嫌いが少なからず有る。**

「7人の侍」中1位の劉少奇と4位の高崗は軍歴を持つが，劉は新4軍の陳毅軍長時代（1941.1～47.1）の政治委員（同～42.3）であり，高も陝甘辺紅軍臨時総指揮部政治委員（34.8～11）を始め主に政治工作を司り，抗日戦争中の陝甘寧辺区保安司令（37.9～45.8）や東北

平定後の東北軍区司令兼政治委員（49.1～54.5）も，戦火が及ばない根拠地や後方に於ける職位で軍事指揮官とは違う。彭の軍歴も東北中共軍の政治委員（1945.10～46.6）なので，**新しい盟友には純粋な軍人は１人も居ない**が，**将領に抱いた毛の猜疑**の現れとも思われる。

5位の陸定一の軍歴も総政治部宣伝部部長（1935～40）等に限り，延安整風の2年目から「文革」勃発の当月まで中央宣伝部長を2期（通算22年弱）担当した。初代指導部3役の中央局書記・組織主任・宣伝主任には**宣伝工作の重み**が窺われ，歴代の中宣部長の中の瞿秋白・李立三（1928.11～30.12）と張聞天（31.4～34.12，37.7～42.12）は，党首と為る前にも在任中もこの要職に居り，胡耀邦（1915～89）も党首（81.6～82.9主席，以後～87.1総書記）就任前に務め（78.12～80.3），**「文革」清算や改革・開放の輿論作り**を指導した。

毛沢東の指導部成員歴は「3大」（1923.6.12～20，広州）での中央執行委員会（9人）・中央局（5人）入りに始まり，担当した秘書の役職は日常業務を処理する事務局長に等しい。翌年の国民党「1大」で中共党員も中央入りし，李大釗と共に中執委委員（24人）に当選した譚平山（1886～1956）は，第5期中共政治局委員の身分でその3常委の1人と為った。毛は張国燾・瞿秋白と共に中執委候補（17人）に当選したが，1925年10月に任命された国民党中央宣伝部長代行の職務は，**宣伝鼓動を重んじ言語表現に長けた性分・本領**に合う。

毛沢東は8期10中全会の初日の講話で，「凡（およ）そある政権を覆すには，常に先ず輿論を作り上げ，先ず意識形態（イデオロギー）方面の工作をしなければならない。革命的な階級も左様（さよう）で，反革命的な階級も同じだ」と語ったが，**政権奪取に効く輿論先導の作戦は権力闘争にも適用し得る**。林彪は1966年5月18日に「文革」発動を決める政治局拡大会議（4～26）で，政権を奪取する利器として「筆桿子・槍桿子」（筆・鉄砲）を挙げた。**延安整風も「文革」も毛が文武併用の二刀流で主導権を握り，異質分子や政敵に対する打撃・追放に成功した**のである。

第2の新盟友陳伯達は党内屈指の理論家の名声が有り，毛沢東初訪ソ（1949.12.16～50.2.17）の際ソ連の領袖スターリン（1878～1953）が彼の為に祝杯を挙げた程である。次の胡喬木は鄧小平から中央随一の「筆」（文筆家）と絶賛され，鄧の時代にも重要文書の作成を仕切る事が多かった。最後の周揚も**理論の牽引力や言語の威力を重視する中共**らしく文芸理論家の出身で，中宣部副部長（1952～66）として**言論統制・思想弾圧**に携わった故，「文芸沙皇（ツァー，帝政露西亜（ロシア）［1721～1917］の専制君主の称号）」の綽名（あだな）で呼ばれた。

毛沢東が整風で得た7人の側近の内5人が第7期中央に入り，1945年6月9日に選出された委員44人の序列（得票数順，同数の場合は氏名の画数順）に於いて，劉少奇が朱徳に次ぐ3位，高崗が陳潭秋に次ぐ12位，彭真が康生に次ぐ18位，陸定一が鄧小平に次ぐ29位と為り，陳伯達が委員候補33人（翌日選出）中の王稼祥に次ぐ3位と為った。陳潭秋は1943年9月27日に殺害された事が知られずに選ばれたが，**異例な物故者当選は生存の確認も儘に為らぬ乱世の厳酷を思い知らせ，「1大」代表群の数奇な運命を改めて印象付ける**。

延安整風の批判対象だった陳毅・周恩来・劉伯承は，中央委員21位の賀龍（元紅2方面軍総指揮，8路軍［国民革命軍第8路軍，北方中共軍］120師［団］師長）の次に名を連ね，彭徳懐は聶栄臻（1899～1992，晋察冀［山西・察哈爾〈今の内蒙古・河北・北京に跨る〉・河北3省］軍区司令兼政治委員）の次の33番目に位した。元党首・最高実力者の内に李立三は饒漱石に次ぐ15位，張聞天は鄭位三（1902～75，新4軍第5師政治委員）の後ろの26位と為り，陳紹禹（王明の本名）・秦邦憲（博古の本名）は薄一波に次ぐ末席に在った。

「9大」の中央委員（170人）選挙では陰で得票数の不正操作が行われ，上層部の指示に従って各大組（広域代表団）で各自の投票が規定・実施された結果，毛沢東が「反面教師」として当選を望む「反対派」代表の10人は，低い得票（最多の張鼎丞［1898～1981，元最高人民検察院検察長〈最高検察庁検事総長〉］は1 510票中1 099票）で再選され，前の地位に反比例して朱徳・陳雲の得票は10人中最低（809・815票）に抑えられた。「7大」では左様な嫌がらせは流石に無かったろうが，**毛派の上昇と傍流の下落**は得票順に現れた。

政治局委員中1～3位の毛沢東・朱徳・劉少奇は中央委員得票順と一致し，以下の9人は中委序列（括弧内）と異なり，周恩来（23）・任弼時（4）・陳雲（8）・康生（17）・高崗（12）・彭真（18）・董必武（7）・林伯渠（5）・張聞天（26）・彭徳懐（33）の**順位の乖離から，粛清主導で憎まれた康と同じ毛に近い高・彭真を重用し，実務派・実権派の周・陳に頼り，前党首の張と毛・朱に次ぐ軍のNo.3彭徳懐に相応の処遇を与え，無欲・無害の董・林**（1886～1960，陝甘寧辺区政府主席）**を古参組代表として置く，という均衡感覚が読み取れる。**

高崗は1937年12月に政治局が決めた「7大」準備委員会で25人中の末席に居たが，「7大」開幕の2日前の予備会議で選出された議長団の15人中，毛沢東・朱徳・劉少奇・周恩来・任弼時・林伯渠・彭徳懐・康生・陳雲・陳毅・賀龍・徐向前（1901～90，8路軍129師副師長）に次ぐ13位（下の2人は張聞天・彭真）と為り，**陝甘寧根拠地の代表の地位と整風の手柄の御蔭**も有ってか政治局で更に5位上がった。熟語の「歩歩高昇」（1歩1歩高みに昇る。着実に昇進する）は，正に**とんとん拍子に大出世して行く高の上昇**に相応しい。

強情――粛清の連鎖を織り成す「虎気・豹変」の「高危」

毛沢東は高崗と同じ「英雄好色」の性向が強く，能く舞踏会で女を漁って性的な奉仕をさせた，と長年の担当医李志綏（1919～95）が暴露した。中南海（党中央・内閣の所在地と要人の居住地）では，要人の息抜き用の舞踏会を週末に催す慣わしが有った。文芸工作団の妙齢の成員が首長の踊りや歓談を御伴する仕組みに就いて，彭徳懐は士気鼓舞・将兵慰問の為の公演を任務とする軍の文工団の使命から逸脱したとし，1953・57年の政治局会議で**毛の皇帝気取りの「后宮佳麗，粉黛三千」**を非難し，中南海文工団を解散に追い込んだ。

当代「皇居」内の舞踏会は「第一夫人」江青の嫉妬にも関らず更に続き，「文革」初期に享楽主義一掃の気風を利用する江の命令で始めて中止したが，その有り形から**赤い塀の裏の内実**が窺える。毛沢東が途中で現れた時の生演奏の曲目変更が注目に値し，**一番愛用の「瀏陽河」は故郷の湖南省の民謡の旋律を基にした領袖讃歌**である。湖南湘江文工団の徐叔華（1931～　）作詞，朱立奇・唐璧光（経歴未詳）編曲で，**毛を崇める大衆心理が高まる51年に生れたこの「紅（革命）歌」は，称揚・迎合の対象を満悦させる効果が極めて高い。**

「瀏陽河，弯過了九道弯，五十里水路到湘江。江辺有個湘潭県，出了個毛主席，世界把名揚。」（瀏陽河，曲り角を9度も曲り，50里の水路湘江に到る。江辺には湘潭県が有り，毛主席を出し［毛主席が出て］，世界に名を揚げた。）歌詞の最後の句は1959年に「領導人民得解放」（人民を解放に導いた）に改められたが，毛沢東を出した湘潭とも湘潭に出た毛とも主語であり得る元の方が，**西洋の「罪の文化」と日本の「恥の文化」に対する中国の「名の文化」**を思わせ，**中国人の「成名天下聞」（名を成して天下に轟かす）願望**を顕にする。

「瀏陽河」は当初「双送糧」（穀物納付に行く2人）と題し，農業税としての穀物を納めに行く祖父・孫の問答の形で上記の故郷・偉人自慢をする。中央政府と西藏地方政府（ダライ・ラマ14世［1935～　，40年就位］政権）の西藏の和平解放に関する17条協定の調印式（51.5.23）の後，中南海で座興として要人の前で幾つかの出し物が演じられた処，毛沢東はその礼賛を聞いて微笑んで頷き立ち上がって拍手した。**大成功の発端と為った当人のお気に入りと「笑納」は，故里に馴染む郷愁よりも称賛を好む性分の方が大きいであろう。**

建国初期に朱徳の秘書を務めた陳友群（1918～97）は中共中央文献研究室に在籍中の80年，建国以来の党の若干の歴史問題に関する決議の草案を討論する会合で，毛沢東は50年の国際労働日の宣伝標語に自ら「毛主席万歳！」を加筆したと発言した。唯一の領袖と為ったのに建国時「朱総司令万歳！」の並称も有った事に起因するが，**唯我独尊の排他・独歩は「両雄不並立」（両雄並び立たず）の原理**に合致する。**最高峰の独占まで登り続ける姿は又「歩歩高」を思い起させる**が，**中南海の舞踏会で最も人気の有る伴奏曲**がこの題である。

作曲家呂文成（1898～1980）のこの代表作は「歩歩高昇」「歩歩登高」に因んで，**軽快に躍動する**旋律の音域の**起伏の反復**に由って**段階的な上昇**の情緒を醸し出す。舞踏会の定番曲目には同じ広東音楽の「雨打芭蕉」（雨が芭蕉に振り注ぐ。作曲家潘永璋［1944～　］改編），「旱天雷」（旱天の雷。揚琴演奏家厳老烈［1850～1930］改編）も有るが，共に『増刻弦歌必読』（揚琴演奏家邱鶴涛［1880～1942］編，［香港］亜洲石印曲，21）が初出と為る両名作や他の曲よりも，**周恩来は上昇志向・楽天精神が溢れる「歩歩高」を一番好んだ。**

20世紀の熱戦・冷戦時代の党首に多い悲運の1例として，遵義会議で失脚した博古は11年後の1946年4月8日に38歳の生涯を閉じた。共に国共談判及び政治協商会議に出席した中共代表の中央秘書長王若飛（1896年生），前新4軍軍長葉挺（同），中央職工委員会主

任鄧発（1906年生）等も，同盟国の米軍機に乗って四川省重慶（抗日戦争中の「陪都」［臨時首都］）から延安へ帰る途中，濃霧の所為で山西省興県黒茶山に墜落死した。「4.8空難」は**当時の党史上最大の複数要人事故死**で，訃報に接した周恩来は余りの衝撃で慟哭した。

常に冷静な彼が人前で取り乱す事は殆ど無いから，**喪失感の深刻さは想像を絶する**。彼は悪天候の中で敢行した空路帰還の遭難に就いて，何故2機に分けて危険性を分散する事に思い至らなかったかと自責した。四半世紀後の林彪・葉群夫妻と長男林立果（空軍司令部作戦部副部長，26）の墜落死は，**職位・影響とも遥かに上回る「飛来横禍」（飛んだ災禍）**と為ったが，皮肉にも彼等は葉挺と夫人（李秀文，39）・長女（第5子）揚眉（11）・7男（第9子）阿九（3）の全滅の教訓を汲んで，家族同士は同じ飛行機に乗らないと決めていた。

報道人・経営評論家梶原一明（1935～2012）著『住友銀行経営会議』（講談社，1984）に，**不測の事態に備えて交通機関の同乗を避ける同社首脳陣の用心深さ**が記してある。米国でも安全策として閣僚・両院議長が一堂に集まる事は無く最低1人が別の場所に居るが，**習近平が政治局常委全員を率いて上海・嘉興の「1大」会場跡を訪れた挙動は，最高指導部成員が全て首都以外の遠隔地に集まる異例で，1ヵ所に命を懸ける危険の増大に繋がる。**其処で**意識形態・儀式を重んじる価値観**や，**負の要素を顧みない強情・偏執**が感じられる。

林彪夫妻と長男は深夜に静養先の北戴河（河北省秦皇島市）から慌てて発ち，中央警備団（連隊）の阻止を振り切って山海関（同）の海軍航空兵専用空港へ急行し，乗降用梯子の調達が間に合わない為縄梯子で特別機に攀じ登り，燃料注入の終了を待たずに離陸を強行した。家族の同乗を禁じる林家の鉄則を破り乗務員も揃わない中での遁走は不可解で，**毛沢東との政争で余程追い詰められた極限状況が自滅を招いた**のであろう。**創建50周年の直後に起きた党史上最大の要人墜落死事件は，No.2の政治的な失墜の危険性の高さの象徴と為る。**

周恩来は林彪出奔の時点から不眠不休で緊急対応を指揮し，1日半後に墜落の一報を聞くと「死んだぞ」と連呼して毛沢東の処に駆け付け，**不意の打撃で落ち込んでいた領袖**を安心させた。その彼は事態が沈静化した後に塞ぎ込んで了い，李先念（1909～92，政治局委員・副総理）・紀登奎（1923～88，政治局委員候補）の請訓を受ける際に，林の自爆は喜ぶ可きで今後は経済建設に力を入れられますという紀の言葉で痛い処に触れられ，事が有ろうに黙った儘に涙を流し，軈て徐々に声を漏らして号泣し始め，途中で嗚咽に声を詰まらせた。

紀登奎が中央文献研究室室務委員の高文謙（1953～　）に語ったこの一幕は，故総理の姪周秉徳（1937～　）著『私の伯父周恩来』（［瀋陽］遼寧人民出版社，2000）にも出たが，新版（人民出版社，09）で削除された事は当局にとって不都合な所為か。紀は傷心が限界に達した理由を毛沢東との治世方針の相違に求め，経済・民生重視の故に階級闘争を強調する毛に何回も批判された事が背景に有るとした。事実その後も「敲打」は已まず寧ろ酷くなったが，**林の後釜に据わる立場に付き物の危険性**も，覚悟した周の悲涙の要因であろう。

清朝（1644～1911）に現れた警句の「伴君如伴虎」（君を御伴するは虎を御伴するに如く）は，傍で君主に仕える事は虎と一緒に居るのに等しく殺される恐れが何時も有ると戒める。林彪の名前は小さい虎の意で長男も家で「小虎」の愛称で呼ばれたが，**自らの性格が主に「虎気」（虎の気質［勇猛・非情］）だと言う君主に対し危惧を抱いた**。「文革」初頭に毛沢東から「副統帥」への昇格を提示された時，**嬲り殺される結末を予感した**かの如く三拝九拝で辞退したが，志願軍司令の拝命を断った病弱の理由は通用せず**滅亡への道に踏み入った**。

「伴君如伴虎」の由来は，『易経』「履」の「眇能視，跛能履。履虎尾，咥人，凶。武人為於大君」（眇にして能く視るとし，跛にして能く履むとす。虎の尾を履む，人を咥む，凶。武人，大君に為すあり）に遡れる。「片目が悪くても能く視る」「足が悪くても能く歩く」は思い込みに過ぎず，王事に尽す志の剛に由って虎の尾を履み人を咬む凶の相が出ると言う。逆の「履虎尾，不咥人，亨」（虎の尾を履む，人を咥まず，亨る）は，「柔履剛」（柔，剛を履む）の結果であり，**己惚れの高崗の破局と対照的な慎重居士の周恩来の安泰**に当て嵌る。

儒教の始祖孔子（紀元前 551～前 479，思想家･教育家）の弟子曾子（前 505～前 436）は，病気に罹った時に門人たちを呼んで，『詩経』「小雅・小旻」の「戦戦兢兢，如臨深淵，如履薄氷」（戦戦兢兢として，深淵に臨むが如く，薄氷を履むが如し）を引いて，絶えぬ注意に由って保てた手足の完全さを見せた。その発想の根底は『孝経』「開宗明義」の「身体髪膚，受之父母，不敢毀傷，孝之始也」（身体髪膚，之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは，孝の始め也）に在るが，**完膚無き焼死体と化した林彪夫妻の末路は如何にも悲惨過ぎる**。

『孝経』の下の文は「立身行道，揚名後世，以顕父母，孝之終也」（身を立て道を行い，名を後世に揚げ，以て父母を顕すは，孝の終り也）と言うが，**「宗聖」曾子の自戒**から**「聖人君子」の誉れ高い周恩来の美談**を連想する。彼の重慶滞在中の 1942 年 7 月に父親が急逝し，夫人等は入院中の彼の病気を配慮して暫く隠したが，3 日後に知ると慟哭しながら床に崩れ落ち，マルクス主義も孝行を否定しないのだと言って責めた。マルクス主義者である前に中国人だと自称した彼は，**究極の孝と為る「揚名後世」の意識も強かった**はずである。

褒貶の両義を持つ周恩来の異名「不倒翁」（起き上がり小法師）は，達磨の形に造った人形の底に重りを付け，倒しても直ぐに起き直る玩具から，情勢の変化に要領良く適応し容易に失脚しない者に譬えるが，抑々**自己防衛に長ける彼は数十年も絶えぬ党内闘争で倒された事が無い**。彭徳懐に「老奸巨滑」（老獪極まり無い）と言われたその建国後の**政界周旋術**は，高文謙が『晩年周恩来』（［紐育］明鏡出版社，2003）で喝破した様に，晩節を汚すまい意志の所産と思われるので，**善悪は別として「名の文化」の実践の典型**と見做せよう。

「文革」初期からの 10 年間 2 度失脚→復活した「不死鳥」鄧小平は，第 2 次天安門事件（1989.6.4）後の国際社会での孤立を打破する為に，外交戦略の 7 句指針を指導部に伝授した。その中の**「韜光養晦」（鋭気や才能を隠す），「決不当頭」（決して先頭に立たず）は，初代**

総理の韜晦・隠忍・謙抑にも見られた。周恩来は遵義会議まで長らく最高指導部に居たが，毛沢東との上下関係が逆転した後は控え目な大番頭に徹した。林立果が「懐疑狂・虐待狂」と貶めた毛の魔手に掛らないのは，**脅威に為らない安心感と国政運営の安定感**の為である。

周恩来が党首の毛沢東と正面から争う事は零に近く，唯1回1956年の基本建設への追加予算に就いて，「私は総理としての良心から同意できません」と言い放った。**毛の完全独裁の確立後は本心に背く唯唯諾諾や過剰な奉迎**が目立ったが，**「君子不近危」（君子は危うきに近寄らず）の賢明な世渡り**と思える。「三尺下がって師の影を踏まず」の様な遜り方の合理性として，**王座に近付く程「高危」（高い危険性）が増す法則**も有る。現に**劉少奇・林彪は毛の後継者に指定された故，主の不信で「殺身之禍」（殺害される禍）に遭った**。

歴史家司馬遷（前145頃か前135～?）著『史記』（前91頃成立）の「淮陰候列伝」に，「狡兎死，走狗亨；飛鳥尽，良弓蔵；敵国破，謀臣亡」（狡兎死して良狗烹られ，高鳥尽きて良弓蔵され，敵国破れて謀臣亡ぶ）と有る。中国初の中央集権国家である秦（前221～前206）の崩壊後，漢王劉邦（前256か前247～前195）が楚王項羽（前232～前202）を倒して前漢（前202～後8）を建てた。楚王に封じられた大将軍韓信（?～前196）は高祖6年に逮捕され，その時「果若人言」（果して人の言の若し）に続いて件の**不滅の警句**を発した。

天下は平定されたから自分も煮殺されると彼は諦観したが，帝は謀叛嫌疑の告発を告げ，彼に手枷・足枷を嵌めて地方巡狩の車に載せ，洛陽で罪を赦免して淮陰候に降格した。兵権を失った彼は翌年に反乱を謀ったが，相国（宰相）蕭何（?～前193）と呂后（前241～前180）の謀略に嵌って，高祖が都に居ない時に宮中に誘い込まれて処刑された。「飛鳥尽，良弓蔵」は春秋時代（前770～前476）末期の越（?～前306頃）の大夫范蠡（生歿年不詳）が同僚に寄せた忠告で，**歴史の再演で立証された古賢の名言は今日的な意義を持っている**。

劉邦生誕2 100周年の1953年に毛沢東は頂上粛清を始め，政権奪取前の西北根拠地と朝鮮戦争の功臣高崗が真っ先に抹殺された。次に1958年の軍委拡大会議（5.27～7.22）**の「軍事教条主義」批判で，建国元勲の劉伯承**（元第2［中原］野戦軍司令，10元帥中4位）**・粟裕**（1907～84，10大将中1位）**が失脚した**。建国時に西南軍政委員会主席を務めた劉は1951年に軍事学院院長兼政治委員に転任したが，**賢明な軍権返上**に関らず今回は職を解かれた。**戦功抜群・才徳兼備の粟も総参謀長を更迭され**，高等軍事学院副院長に左遷された。

朝鮮戦争の最大の功臣彭徳懐（元帥2位）は軍委拡大会議を仕切った翌年に，8期8中全会（8.2～16，江西省廬山）で「反党集団」の頭とされ，政治局委員・軍委副主席・副総理・国防部長の解任と隠居を強いられた。毛沢東は越南戦争（1961～75.4.30）激化の65年9月に，彭に西南「3線」（国防戦略後方）建設委員会第3副主任の職を与え，中央書記処書記・総参謀長・軍委秘書長在任中に彭と共に失脚した黄克誠（1902～86，大将3位）を山西省副省長に当て，同じく**首都に留めたくない習仲勳を洛陽の工場に行かせる**ことを決めた。

黄克誠の後任総参謀長・軍委秘書長・中央書記処書記羅瑞卿（大将８位）も，直後の政治局常委拡大会議（12.8～16，上海）で不意打ちの査問・解任をされ，翌年３月８日に跳び下り自殺で重傷を負い**高崗以来の要人自裁**（未遂を含む）と為った。次の総参謀長代行（1965.12～68.3.24）楊成武（1914～2004，上将），総参謀長（68.3～71.9）黄永勝（1910～83，同）は在任中に逮捕され，３年余りの空位を埋めた鄧小平（75.1～76.4）も途中で降ろされ，粟裕（54.10 就任）以来**６代の全員失脚**はこの**軍指導部要職の「高危**（ハイ・リスク）**」**を示した。

彭徳懐に替る軍委筆頭副主席・国防相林彪（元帥３位）も**粛清の連鎖**で倒れたが，1966 年末に紅衛兵に北京に連行され死去まで監禁された彭は林彪事変を知らされると，林は革命的だと自分は信じていて，彼を殺した事には納得できない，もう生きたくない，と激昂（げっこう）した。「鳥之将死，其鳴也哀；人之将死，其言也善」（鳥の将（まさ）に死なんとするや，其の鳴くこと哀し。人の将に死なんとするや，其の言うこと善（よ）し）と曾子は述べたが，死を覚悟した彭の所感は**「末期の眼」の洞察**に基づき，「殺害」の断言は**流血政争の記憶**に由るであろう。

周恩来は林彪事変の 27 日後（10.10），エチオピア皇帝ハイレ・セラシエ１世（1892～1975，30～74 在位）と共に上海へ飛ぶ際，所定の航路に沿っているのかと操縦士（パイロット）に訊ね，地図と目視で確認した。国賓と同乗するだけに変事は起り得ないが，その狐疑（こぎ）は林の支配下に在った空軍への不信を思わせ，林の特別機は小細工（こざいく）で不帰の道へ導かれたと疑う向きも連想される。「狡兎死，良狗亨」と重なる「兎死狐悲」（兎死（うさぎし）すれば狐（きつね）これを悲しむ）は，**明日は我が身と同類の不幸を悼む**意であるが，前出の周の号泣は似た思いが無かろうか。

淮陰候に由来した成語には「韓信の股潜（またくぐ）り」（中国語＝「胯下之辱」［胯（また）の下の辱（はずかし）め］）が有り，青年時代の彼が衆人の前で成らず者の言う儘にその股を潜るという屈辱を甘受した故事から，将来の大きな目的の為に挑発にも乗らず一時の恥に耐える心構えの勧めと為る。西晋（265～420）の歴史家陳寿（233～97）撰（せん）『三国志』（二十四史［中国の歴代の正史］の１つ）の「呉書・陸遜伝」に，「忍辱負重」（辱（はずか）めを忍（しの）び重きを負う）と有るが，**韓信の故郷・領地の淮陰（今の江蘇省淮安）で生れた周恩来は２つの熟語を見事に体現した。**

中国系・英国籍の作家韓素音（ハンスーイン）（1916～2012）著『長兄――周恩来と現代中国の建設 1898―1976』（94）に，国民党の許克祥少将 団（れんたい） 長（1889～1964）が長沙（湖南省都）で政変を起した時（28.5.21），100 人の共産党員が公衆の前で斬（ざん）首された事に師団の政治委員（中共党員）が仰天して，糾弾の為に武漢に急行した処，周は武漢政府との合作の維持の必要性を説き，「革命の為なら，我々は妾（めかけ）の役も，娼婦（しょうふ）の役さえ演じなければならない」と言い，彼は無頼（ごろつき）の前で這って見せた韓信の故事を思い出していたのだろうか，と書かれている。

許克祥の暴動・蒋介石への帰順と共産党員に対する大量銃殺は，第 35 軍（ぐんだん）の何鍵（けん）中将軍長（1887～1956）の暗黙の支持を得た。団（れんたい） 政治部主任柳寧（本名朱其華，1907～45，中共党員）は漢口で非難を展開した処，中共軍事部長周恩来から国民党左派との関係を壊す挙動とし

て制止された。罵られても殴られても黙って我慢するとは妾に等しいと抗弁すると，只「忍」の1字有るのみだ，革命の為には必要なら妾にだって為らなくてはならないと周は答えたが，**毛沢東に対する彼の妥協・譲歩・柔順も革命の利益の為という大義に基づく。**

周恩来研究の権威者高文謙の母親傅秀（本名林繡双，?～2001）は，鴉片禁止の首唱・推進で有名な清の政治家林則徐（1785～1850）の5代目の孫である。彼の愛国志士が揮毫した対聯の「海納百川，有容乃大 / 壁立千仞，無欲則剛」（海百川を納る，容る有りて乃ち大なり / 壁立ちて千仞，欲無ければ則ち剛なり）は，道教の祖老子（生歿年不詳，春秋時代の思想家）著『道徳経』第28章の「知其雄，守其雌，為天下谿」（其の雄を知りて，其の雌を守れば，天下の谿と為る）と共に，**虚心坦懐であればこそ万物を包容し得る**ことを示唆する。

鎌倉時代（1185頃～1333）末期の歌人兼好法師（1283頃～1352以後）は，随筆『徒然草』（1331）の第217節に「大欲は無欲に似たり」と書いた。大きな望みを持つ者は小さな利益に目もくれないから欲が無い様に見えるという意味の逆説は，欲の深い者は欲の為に目が眩んで却って損をし易いから欲の無い者と同じ結果に為る事，又，大欲を抱き目的を達成したとしてもその結果を有効に用いなければ小欲と同じである事にも言う。**周恩来の無欲が栄光に繋がり，高崗の大欲が徒労に終ったのも，その多義の其々の理を証明している。**

老子の「大国者下流，天下之交，天下之牝。牝常以静勝牡」（大国の者は下流なり，天下の交なり，天下の牝なり。牝は常に静を以て牡に勝つ），「天下柔弱，莫過於水，而攻堅強者，莫之能勝，其無以易之」（天下の柔弱は，水に過ぐるは莫きも，而も堅強を攻むる者，之に能く勝るもの莫し，其の以て之より易きは無し）も，**哲理と実用性に富む逆説**であるが，「弱之勝強，柔之勝剛，天下莫不知，莫能行」（弱の強に勝ち，柔の剛に勝つは，天下知らざる莫きも，能く行う莫し）の通り，**政治に関しては余程の達人でなければ出来ない芸当**である。

『易経』「繫辞下」の「尺蠖之屈，以求信也。龍蛇之蟄，以存身也」（尺蠖の屈するは，以て信ぶるを求むる也。龍蛇の蟄するは，以て身を存する也）は，**韓信の股潜りや周恩来の不倒翁，鄧小平の不死鳥の極意と通じる。**「大丈夫能屈能伸」（立派な男子は身を屈めるのも伸ばすのも出来る）という熟語の様に，**自己主張や強硬姿勢が必要で且つ実行可能の場合は，『易経』「革」に有る「君子豹変」「大人虎変」も鮮烈に演じ得る。周の柔軟・無欲の形象は複合性格の一面に過ぎず，党利・国益の為に堅強・強欲の根性を剥き出す事も多かった。**

南宋（1127～1276）以降の儒学者が編集した『名賢集』の処世訓格言に，「量小非君子，無毒不丈夫」（器量が小さければ君子に非ず，非情さが無ければ男子ならず）と有る。「君子は危うきに近寄らず」の由来とされる『春秋公羊伝』の「君子不近刑人」（君子は刑人に近寄らず）に因んで言えば，**周恩来は政争で処罰を受ける人と距離を保つ半面，党を裏切った顧順章への懲罰と情報漏洩防止の措置として，1931年4月27日に上海で別働隊を率いて顧邸に踏み込み，その妻や自分の恩人を含む家族・関係者10数人に対する絞殺を指揮した。**

「4.8 空難」の凶報に接した周恩来の慟哭は，特に王若飛を失った事の悲痛が大きい。生きていれば将来常務副総理として自分を補佐して貰えるのに，と口走った悔みの言葉は通常有り得ない本音だから吟味に値する。**建国の目処も立っていない頃に当時無かった職位を想定し，而も自分が総理に成る前提なので些かの謙譲も感じられない**。孔子の「当仁，不譲於師」（仁に当って，師を譲らず）と合致するが，1926 年 3 月に初代中央秘書長と為った王が周の滞欧時代（20～24）の仲間である事は，**「親友内閣」の伝統の根強さ**を窺わせる。

中華民国（1912.1.1 成立）の「国父」孫文（1866～1925, 革命家・政治家）の妻宋慶齢（1893～1981）は 42 年の冬，重慶で茶話会を催し延安へ帰る董必武等を招待した時，飾り物の稲の穂に即して豊作の有り難さを語った。周恩来は全国解放後これを国徽（国家の標徴と為る紋章や徽章）の意匠に入れようと言い，7 年後に出来た国徽にはその通り金色の穀物の図柄が組み込まれた。**第 2 次国共合作の最中に中央政府管轄下の僻地特区に身を寄せる弱小勢力の首脳の意欲は，野党・地方政権に甘んじない中共の野望を赤裸々に表現した。**

天数――傑物の秘めた貪欲・殺気と歴史に隠れた天理・天意

建国後の政争で大罪と為る「党・国家の最高権力の簒奪を企む」は，前漢を滅ぼした王莽（前 45～後 23）**の簒奪を見ても甚大な危害を感じる**。元帝（劉奭，前 74～前 33，前 48～前 33 在位）の皇后の弟の子である彼は，儒教政治を標榜して人心を収攬しつつ平帝（劉衎，前 9～6，前 1～後 6 在位）を毒殺し，幼児劉嬰（5～25）を立て自ら摂皇帝の位に就き，次いで真皇帝と称し国を奪って新朝（8～23）を創った。末に反乱軍に敗死し後漢（25～220）が復興したが，**前漢と合せた 495 年はこの中断に由って王朝の最長記録に為れなかった。**

林彪事変後の毛沢東は**自らの不明を繕う**為に，中唐（766～820）の詩人白居易（772～846）の七律「放言五首・其三」を援引した。「贈君一法決狐疑，不用鑽亀与祝蓍。試玉要焼三日満，辨材須待七年期。周公恐懼流言日，王莽謙恭未簒時。向使当初身便死，一生真偽復誰知。」（君に一法を贈りて狐疑を決せしめん，鑽亀と祝蓍を用いず。玉を試むるには焼くこと三日に満たんを要し，材を辨ずるには須く七年の期を待つべし。周公恐懼す流言の日，王莽謙恭なり未だ簒せざる時。向に当初に身便ち死せしめば，一生の真偽復誰か知らん。）

玉の真偽を判断し材木の良否を見分ける手段に見立てて，**怪しい人物の鑑定法**として**年月を掛ける試練・観察**が挙げられたが，高崗・饒漱石事件後の毛沢東の反省にも有る様に，**長らく信頼・重用している人に対する洞察・識別も難しい。王莽の簒奪前の低姿勢は正に偽りの表面的な現象の見本**であるが，周公（西周［前 1046～前 771］初期の政権重鎮，生歿年不詳）が **3 人の兄弟の流言に由って隠退させられ，後に忠誠が認められた史実は，当代の「周公」恩来が「文革」中「曾て党を裏切った」の流言に悩まされた現実と対を為す。**

国民党中央組織部党務調査科（諜報機関）総幹事張冲（1903～41）の画策に由って，32年2月16～21日の上海『時報』『新聞報』『申報』に「伍豪等脱離共党啓事」が掲載された。伍豪（周恩来の変名）等243人の離党告示は中共の瓦解を狙う奸計で，中華蘇維埃共和国臨時中央政府は直ちに毛沢東主席名義の声明で捏造を糾弾したが，1967年の「叛徒狩」で天津の南開大学の紅衛兵が掘り出して江青に報告した後，毛は故意に否定せず「中央文革」での回覧・保存を命じ，**疾うに破綻した敵の悪宣伝を悪用して周を牽制する武器とした。**

第5期（1935.11～45.5）中央委員に選ばれた張冲は当局の命で，36年4月『申報』に尋ね人広告を出して伍豪との連絡を求めた。潘漢年経由で中共と接触し第2次国共合作の功労者に為り，中組部副部長に昇進した直後の病没は彼が陥れた周恩来に嘆かれた。文学者・思想家魯迅（1881～1936）は33年6月21日に日本の友人に贈る七律「題三義塔」（三義塔に題す）で，「度尽劫波兄弟在，相逢一笑泯恩讐」（劫波を度り尽して兄弟在り，相逢うて一笑すれば恩讐泯ばん）と詠んだが，**両者・両党の相克相生は兄弟の有り形にも類似する。**

中共政権は国交正常化（1972.9.29）で国民党政府と同じく日本に対する戦争賠償の請求を放棄したが，**党内政争では旧王朝に多い権力者の兄弟反目と通じて「一笑泯恩讐」は簡単ではない。**周恩来は張冲を哀悼する挽聯（弔事用の対聯）に，「安危誰與共 / 風雨憶同舟」（安危誰と共にせん / 風雨同舟を憶う）と書いたが，1958年に理論秘書范若愚（1912～85）が起草した文書の中の毛沢東との「風雨同舟，朝夕与共」（風雨同舟にし，朝夕を共にする）の関係云々を見て，延安整風前に就いては言ってはいけない，と涙を湛えて痛切に諭した。

翌年に党中央学校副校長と為った范若愚も党史には余りにも無知だと言われたから，**党内闘争の複雑さと不透明さは想像を絶する。**周恩来の傷心は同年5月15日に毛沢東から「反猛進」を叱られた後の事で，8年後の「5.16」の「文革」勃発を経て翌年の5月17日に江青が「伍豪事件」を提起した。張冲が1933年から歴任した中央宣伝部映画科科長・映画事業処処長は，建国初期の江の職務と重なるが，**地位の低い江が「文革」中に周に威張ったのは，延安整風で釈明済みの疑惑が毛の態度に由って脅迫の材料と為った事が大きい。**

毛沢東は1968年1月15日に敵の陰謀と認めた後も折に触れて燻らせ，周恩来は**人質を取られる様に払拭し切れない陰影の下で苦しみ続けた。**彼は膀胱癌の全身転移の兆候が出た中で1975年9月20日に4回目の大手術を受ける際，最悪の事態に備えて手術室入り前に僅かな余力を振り絞って，「伍豪告示」の真相に関する資料を仔細に点検し，各省区の上位1～3番目の責任者への配布を要請した。鄧小平等が見守る中で手術室に搬入されようとする瞬間，突然「私は党に忠実だ，人民に忠実だ！私は“投降派”じゃない！」と絶叫した。

毛沢東の周恩来抑圧は1973年の暮れに露骨と為り，訪中のキッシンジャー米国務長官（1923～　）の帰国（11.14）直前の臨時会談に周が応じ，自分に指示を仰げない状況で軍事協力の情報交換の体制構築に同意した事を捉えて，政治局拡大会議（11.25～12.5）を開

いてその「右傾投降主義」を糾した。**政界復帰の踏絵を突き付けられた鄧小平も良心に背いて加担し**，貴方の現在の位置は主席から僅か1歩しか離れておらず，望んでも届かない他の人と違って，望めば直ぐに叶うから自ら警戒するよう，という**急所を突く忠告**をした。

キッシンジャーは6回目（国務長官として初）の訪中で，**自分が外交を主宰していると顕示する毛沢東の姿勢**を感じたが，**周恩来の声望への嫉妬が透けて見える**。「伍豪告示」の40年後の1972年2月21日，周・キッシンジャー交渉の成果としてニクソン大統領（1913～94）が訪中し毛と会見したが，毛は9日前に「9.13」事変の打撃の後遺症で一時心肺停止と為った。心臓按摩等の救急蘇生で意識が戻った後は周に対し，自分はもう駄目だ，後の事は頼むと珍しい弱気で言ったが，**生死の境での権力譲渡の意思表示は執着の裏返し**である。

周恩来は前年の12月に毛沢東が呼吸困難に陥ったと聞いて，大急ぎで駆け着け喀痰吸引等の応急手当を見守った。毛が目を醒ますのを見て興奮を抑え切れずその手を握り，「主席，主席，大権はまだ貴方の手に在ります！」と声を震わせて叫んだ。翌年の2月12日の場合は危篤の急報に接した途端に極度の緊張で失禁し，毛邸に到着した時に自力で車から降りられず，毛からの後任委託には驚愕の余り全身が固まった。一連の反応には**猜疑を避ける保身本能**も見て取れるが，**後継者を立てない独裁君主の大権独攬の弊害**も現れている。

「9大」で採択された改正党規約には林彪を毛沢東の後継者とする文言が盛り込まれたが，半年後の1969年10月18日に林が疎開先の江蘇省蘇州から黄永勝総参謀長に電話し，戦備を強化し敵（ソ連）の突然の襲撃に備える緊急指示を伝え，黄が即日「林副主席の指示（第1号命令）」として全軍に通達し，95師団・94万人・航空機4 100機・艦艇600余隻を1級戦備態勢に入らせると，武漢滞在中の毛沢東は翌日に速達の電話記録で報告を受けた時，その**「林副主席指示（第一個号令）」の名・実両面の僭越に立腹し**原本を自ら焼いて了った。

前年の8月20日に東欧共産圏聯軍がチェコスロバキアの民主化運動を潰す為に侵攻し，主力のソ連は軍人・戦車を搭載した民間航空機の事故を偽り不時着後に首都空港を制圧した。政府談判へ赴くソ連代表団の北京到着の前日の林彪指令は敵の欺瞞作戦を念頭に置き，毛沢東の戦備強化の意思に合致し毛への即時報告も手配した。毛は別に待ったを掛けなかったから指令自体は問題が無いが，**軍委主席の許可を待たずに発令した事を越権行為と見做し，個人名を冠する「1号号令」の称を使った事も副統帥の権勢顕示として悪く取った**。

単に「林副主席指示」か慣例の「（総）参（謀部）作（戦部）字××号」なら無難であったが，閻仲川副総参謀長兼作戦部部長（1922～2002，第9期中央委員候補，大佐）と当直参謀は，軍委前線指揮所の設立後の第1号指令につき深く考えずに問題の表記を付けた。書面指令を確認せずに睡眠薬を呑んで就寝した黄永勝は当日に拙さを指摘し，その**政治的な危険の察知が当って**，「9.13」後に「林彪一味の権力奪取の予備演習」と断罪され，閻は7年半も隔離審査を受け，林を含む関係者全員の無実は1986年に漸く当局に認められた。

「毛主席が自ら創設し，林副主席が直接に指揮する」軍に対して，軍委副主席・国防相林彪の指揮権は限られていた。**毛沢東は中隊１個の異動も自分の決済が無いと出来ない様にし，過剰な集権の中で副統帥と雖も統帥権への侵犯は許されなかった。毛に対する周恩来の恐縮も領袖との至近距離の故の自戒で，彼は針の筵の No.2 に為って長居を望まなかった。建国初期に毛の専用機が飛ぶ間に全国で一切の飛行は禁じられており，それ程の「天上天下，唯我独尊」の横暴ぶりでは，一握りの側近を除いて近寄る者は斬られる危険を負う。**

林彪が毛沢東の逆鱗に触れ後継者失格へと転落した行為は，1970 年春から憲法改正で空席と為った国家主席の職位復活を唱え，9 期 2 中全会（8.23～9.6，廬山）で中央委員会・政治局常委会の多数の支持を集め，自分の意に沿う寵臣を失脚させようとした事である。国家主席の設置は正当な要請で林は毛の就任を願ったのであるが，毛は事務的な負担を嫌って引き受けない一方，林は自ら成りたがっていると邪推し棚上げにした。**大権簒奪の野心が無い林や周恩来に対する彼の狐疑は，強欲の独裁・独占を守る為の国盗りへの警戒**である。

中国に詳しい米国の報道人・著述家ソールズベリー（1908～93）は，『新しい皇帝――毛沢東・鄧小平時代の中国』（92）の第 1 部「新中国の誕生」第 1 章「古都」に，第 2 次国共内戦（46.6.26 勃発）中の**中共軍の精力的な行動と貪欲さ**に関する記述として，異名「独眼（龍）」（銃傷に由る右目の失明が由来）の劉伯承の講釈を記している。「肉を食べるのは楽しい一時だった。たっぷり肉の付いた骨が有り，その一つを口に銜え，もう 1 つを箸で掴み，3 つ目に目を向けた。1 度に 3 つの肉を手にしようとするのは，食欲が有る証拠だ。」

その**「超肉食系」の重層的な爆食願望**から，**際限無き欲望**を形容する「得隴望蜀」（隴を得て蜀を望む）が思い泛ぶ。後漢の始祖光武帝（劉秀，前 5～後 57，25～57 在位）は 32 年の西征で，2 つの城を囲ませ勝利を略手中に収めて帰る時，「人苦不知足，既平隴，復望蜀」（人足るを知らざるに苦しむ，既に隴を平げて，復蜀を望む）と，武将岑彭（?～35）に勅した書の中で自らの野望の膨脹を嘆いた。隴（甘粛一帯）の土地を勝ち取ると蜀（四川一帯）の領有が欲しくなる心理は，**１つの望みを遂げて更に上を望む貪婪**の譬えと為った。

この熟語は又，三国（220～80）の魏（220～65）の権臣司馬懿（179～251）が，隴を平定した勝ちに乗じて蜀を攻め取ろうと進言した時，始祖の魏王曹操（155～220）が答えた言葉とされる。曹は人を見抜く力の有る名士に自分に対する鑑定を求め，「治世之能臣，乱世之奸雄」（治まった世には能臣，乱れた世には奸雄）と聞いて喜んだ男である。魏・呉（221～80）・蜀（221～63）鼎立の中の彼の「得隴望蜀」は，呉を攻める赤壁合戦（208 冬）の前夜に詠んだ「山不厭高，水不厭深」（山は高きを厭わず，水は深きを厭わず）にも現れる。

毛沢東は 1954 年夏の詞「浪淘沙・北戴河」で，「大雨落幽燕，白浪滔天。秦皇島外打魚船，一片汪洋都不見，知向誰辺？　往事越千年，魏武揮鞭，東臨碣石有遺篇。蕭瑟秋風今又是，換了人間。」（大雨幽燕に落ち，白浪滔天。秦皇島外魚打る船，一片汪洋都見えず，誰

が辺に向うを知るや。　往きし事千年を越え，魏武鞭を揮い，東に碣石に臨みて遺せし篇有り。蕭瑟たる秋風よ今又是にふきくれど，人間を換え了ぬ）と書き，207 年に北征の途中で碣石山を登って渤海を眺めた**曹操への敬意と，古代の豪傑を超越する雄心**を表現した。

曹操はその時「歩出夏門行」（夏門を歩み出ずる行）の題で組詩 5 首を作り，第 2 首（4 字句× 14）の冒頭の「東臨碣石，以観滄海」（東のかた碣石に臨み，以て滄海を観る），真ん中の「秋風蕭瑟，洪波湧起」（秋風蕭瑟，洪き波湧き起る）は，**毛沢東の詩・詞に多い本歌取り**で借用されている。最後の「幸甚至哉，歌以詠志」（幸いの甚しく至れる哉，歌いて以て志を詠ぜん）は，『尚書･尭典』の「詩言志，歌詠言」（詩は志を言い，歌は言を詠む）の正統を沿うが，**烏桓討伐の戦場へ向う際の志は高尚な情操よりも血腥い殺気が漂った。**

曹操は華北を平定した後に北方の異民族烏桓（前 1 世紀～後 3 世紀）に矛を向け，白狼山（今の遼寧省喀喇沁左翼蒙古族自治県）の戦で敵軍 20 万人を壊滅・投降させ，同族の服属に由り黄河以北の全域は曹軍の支配下に収められた。空前絶後の過酷な行軍で甚大の消耗を強いられ，作戦立案者の軍師郭嘉（歿年 37）は現地で風土病に罹って帰還直後に夭折した。**曹は当初の出兵反対論者に対してその諫言の合理性を認め，恩賞を与えた上で今後も萎縮せず直言するよう命じたが，北方制覇は天下独占の為なので征伐を止める事が無い。**

光武帝は「人苦不知足，既平隴，復望蜀」の次に，「毎一発兵，頭髪為白」（一たび兵を発する毎，頭髪は白み為り）と書いた。老子の「知足者富」（足るを知る者は富む）から，「知足者常楽（常に楽し）」の格言が派生されたが，曹操は**「山不厭高，水不厭深」の「不知足」（足るを知らず）派**である。同じ「得隴望蜀」を「楽此不疲」（此を楽しんで疲れない）の感で敢行し，**痛い代償にも懲りず**翌年に意気軒昂に南進し，孫権（182～252）･劉備（161～223）の呉・蜀聯軍と戦い，長江の畔の赤壁（今の湖北省咸寧・赤壁市）で大敗を喫した。

侵攻前の旧暦 11 月 15 日に曹操は文武諸官を招いて大宴会を催し，酔いが回った処で槊を持って船の舳に立ち**天下横行の意欲**を語り，「対酒当歌，人生幾何」（酒に対して当に歌うべし，人生幾何ぞ）で始まる詩を吟じた。即興の創作に一座が和して笑いさざめく中で，揚州の刺史（長官）劉馥（生年不詳）が進み出て，中の「月明星稀，烏鵲南飛。繞樹三匝，何枝可依」（月は明らかに星稀にして，烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること三匝なれども，何れの枝に依る可き）は不吉だと指摘したが，**興を削がれた曹は一突きで彼を刺殺して了った。**

鴉の啼き声は災いの告げとして忌まれ，依る枝を捜すのも不安な感が強いから，将士が国に身を捧げんと競う時に何故斯様に縁起の悪い言葉を出したか，と言うのは立派な動機に基づく尤もな異論である。曹操は翌日に涙を流して劉の子に謝罪し厚く葬礼を営んだが，**諫言を渋るなと前年に部下を諭した彼は最早暴君と化した。**問題の 4 句の後が「山不厭高，水不厭深」で，次の「周公吐哺，天下帰心」（周公哺を吐きて，天下心を帰す）は全 30 句を結ぶが，**食事中の来客を迎える為に口の中の食べ物を吐き出す周公の温良は彼には無い。**

周公は周（前1046～前256）の文王（生歿年不詳，在位50年）の子で，兄の武王（?～前1043，前1046～前1043在位）の死後に幼い成王（?～前1021，前1042～前1021）の摂政と為った。彼を讃えた曹操への思いを馳せる毛沢東の「北戴河」に「往事越千年」と有るが，**周王朝の建立からこの詞（うた）までの歳月は恰度（ちょうど）3千年**である。**1954年の夏は高崗の自殺と翌月の憲法採択（9.20）に由って共和国史上の転換点に当るが，周公の摂政就任の3千年後に毛は妄動的な経済「大躍進」を起し，周恩来の総理の大権はこの58年から削がれた。**

毛沢東の意思で1974年に展開された「批林批孔」（林彪・孔子批判）は，江青等に由って周恩来を貶める「批周公」（周公批判）が加えられたが，**孔子の逝去2 400周年に中共が創設し，生誕2 500周年に中華人民共和国が成立したのも，歴史に間々有る100年単位の時間の連環の好例**である。**林彪の特別機はソ連へ入る直前に急転向で南下し間も無く蒙古（モンゴル）の中部に墜ちたが，700年前に蒙古帝国第5代の世祖忽必烈（フビライ）**（1215～94，60～94在位）**が元（1271～1368）を立てた事と結び付けば，人為の結果と共に天数の成行きも感じられる。**

林彪遁走の23年前（1948.9.12），彼の率いる第4（東北）野戦軍が遼（寧）瀋（陽［省都］）戦役の幕を切って落した。終了（11.2）まで敵の47万人を殺傷・捕捉し，中共の兵力が初めて敵を上回った。国民党側の名称「遼西会戦」の様に**曹操の烏桓討伐の戦場とも重なる**が，中共が「解放戦争」と呼ぶ第2次国共内戦の3大戦役の1つ目が終った後，次の平津（北平［京］・天津）戦役（11.29～翌年1.31）に向けて，「4野」が23日から山海関以東の地域に入ったが，**関内進出の83万人は奇しくも赤壁会戦に臨んだ曹操軍と同数**である。

東北と華北の境に在る山海関は林彪の文字通りの「亡命」（命を亡ぼす）飛行の起点で，出発地の北戴河は党指導部が避暑を兼ねて重要事項を討議する言わば「政治特区」である。毛沢東が詞（うた）「北戴河」で表した**曹操への親近感は2人の傑物の接点の1つ**に過ぎず，曹が主人公群に入る**『三国志演義』は彼が長年の転戦で手放さなかった少数の本**に有る。小説家・戯曲家羅貫中（1330頃～1400頃）の**歴史物語は彼の知恵袋を為したが，赤壁会戦の前夜の曹操の作詩・酒乱・殺戮（りく）の場面の直前に，奇妙にも林の末路と符合する詩が出ている。**

曹操は江南の絶世の美女大喬（きょう）・小喬姉妹に抱く欲望を吐露し，江東・呉の将軍孫策（175～200）・周瑜（ゆ）（175～210）に嫁（とつ）いだ2人を奪おうと放言した。其処で作者は晩唐（821～907）の文学者杜牧（803～53）の詩，「折戟沈沙鉄未銷，自将磨洗認前朝。東風不与周郎便，銅雀春深鎖二喬」（折れたる戟（ほこ）は沙に沈んで鉄未（いま）だ銷（しょう）せず，自ら磨洗を将（もっ）て前朝を認む。東風周郎がために便ぜずんば，銅雀（じゃく）春深くして二喬を鎖（とざ）さん）を引く。**林彪が「三叉戟（さげき）」（英国製旅客機Tridentの漢訳名）に乗って沙漠に墜ちた事も，「折戟沈沙」と揶揄（やゆ）されている。**

魏王曹操は没後に武王と諡（おくりな），長子丕（ひ）（187～226）の魏の初代皇帝（220～26在位）即位後に武帝の称で追尊された。曹丕は後漢の献帝（劉協，181～234，189～220）に禅譲を迫って魏を建てたが，**王莽の漢朝簒奪や北洋軍閥の総帥袁世凱（えんせいがい）**（1859～1916）**の中華民国初代**

大統領（13.10.10～15.12.11）**→中華帝国皇帝**（15.12.12～16.3.22）**の転身の様に，古今の最高実力者には「称帝（帝を称す）欲」が可く見られた。漢の光武帝と魏武帝の「得隴望蜀」は共通の拡張志向**であるが，秦皇島の地名が含む**中国初の皇帝にその祖形が有る**。

毛沢東は「8大」第2次会議（1958.5.5～23）で，秦の始皇帝の「厚今薄古」（今を重んじ古を軽んじる）を讃えた時，林彪が口を挟んで秦の始皇帝の焚書坑儒を取り上げると，彼は460人の儒者を生き埋めにしたに過ぎず，我々は4万6千人の儒者（知識人）を生き埋めにしたと反論し，**我々は秦の始皇帝の100倍を超す独裁者だという民主派識者に対する開き直り**を繰り返した。林立果等が政変構想「“五七一工程”紀要」（1971.3.22～24）で毛を**「当代的（の）秦始皇」**と断罪したが，彼はこの**悪名を勲章と見做す感覚**も有ったろう。

毛沢東は1973年7月4日，「文革派」寵臣の張春橋（1917～2005）・姚文元（1931～2005）に対し，盛唐（713～65）の詩人李白（701～62）の「古風五十九首・其三」の「秦王掃六合，虎視何雄哉！」（秦王六合を掃うて，虎視何ぞ雄たる哉）を引いて，秦の始皇帝を否定する見方に反対した。秦の始皇帝（名は政，前259～前210，前221～前210在位）は，第31代秦王（前247～前221）からの昇格で成ったが，**秦王就位の2 200周年は中共政権の頂上政争元年**に当り，**中国統一・始皇帝即位の2 200周年は改革・開放元年**である。

中国・中共の道程は歴史の回廊や時間の連環に於いて，様々な「史縁」「時縁」（「血縁」「地縁」に因んだ造語）**が見られる。改革・開放の嚆矢と為る11期3中全会**（1978.12.18～22）**は，スターリン生誕100年周年の日に開会し，仕事の重点を階級闘争から経済建設に移す路線転換が宣言された。彼のソ連の独裁者の急逝（1953.3.5）後のフルシチョフ**（1894～1971）**の執政は，改革志向やスターリン批判に由って毛沢東の反撥を招き，同年末に始まった建国後の頂上政争では，屡々「赫魯暁夫式的野心家・陰謀家」への警戒が語られた。**

スターリンの死後No.2のマレンコフ（1902～88）が順当に党首・元首に推されたが，後ろ盾の内務人民委員部長官ベリヤ（1899～1953）の大権掌握を恐れる指導部の抵抗で，僅か9日で書記局第1書記の座を序列が自分に次ぐフルシチョフに明け渡し，第2代閣僚会議議長の職も55年2月8日に辞した。フルシチョフは党中央第1書記就任（9.7）の前後に権力基盤を強化す可く，新任第1副首相のベリヤを逮捕・解任し（6.26）裁判を経て処刑した（12.23）が，**毛沢東が指導部会議で高崗批判の口火を切ったのはその死の翌日**である。

出身地のウクライナの首長から中央入りしたフルシチョフは領袖の信頼を得て重用され，「19大」（1952.10.5～14）で党規約改正の報告を行いNo.3の地位を示したが，「20大」（56.2.14～25）の最終日に秘密報告で**スターリンの恐怖政治を糾弾した**。9月の**中共「8大」では個人崇拝を廃するソ共の是正に合せて，党規約から毛沢東思想を指導理念とする文言が削除されたが，毛はソ連の転向や米ソ平和共存路線を容認せず，建国10周年の頃に政治・経済両面の中ソ決裂に踏み切り，ソ共・ソ軍に近いと疑う彭徳懐・張聞天等を粛清した。**

1957年6月18日の中央幹部会緊急会議で反対派がフルシチョフ解任の動議を出し，7対4の賛成多数で可決された。当人は選出者の中央委員会のみ解任を決定できるという真（ま）っ当な理由で抵抗し，支持者が多い総会（6.22～29）で政変を粉砕した。毛沢東死後の極左「4人組」（江青・王洪文［1935～92，副主席］・張春橋・姚文元）逮捕（76.10.6）でも，毛の後継者華国鋒（ほう）（1921～2008，第1副主席・総理）・葉剣英（軍委副主席・国防部長）等はその**逆転劇を反面教師とし，中央全会の表決に勝算が無いと見て超法規的な措置を決断した。**

班固（32～92，後漢の歴史家）撰『漢書（じょ）』の「賈誼伝」に，「前車覆（くつがえ），後車戒」（前車の覆るは後車の戒め）と有る。**中共政権は『漢書』成立（82年頃）の1 900年後の「歴史教科書検定騒動」以来，「以史為鑑（かがみ）」（史を以て鑑と為す）等の唱えで過去の侵略戦争に対する正しい認識を日本に求めて来たが，自身の歴史には古今・内外の前車の轍（てつ）を踏んで了（しま）う事や，是非はともかく前例を踏襲（とう）する事も少なくない。例えばスターリンの大粛清（1930年代後半）やフルシチョフの政敵追放は，毛沢東時代にも類似の鎮圧や処罰が演じられた。**

「反党集団（グループ）」のマレンコフはカザフスタンの発電所所長に左遷され，閣僚会議第1副議長ガガノービチ（1893～1991）もウラルの加里（カリウム）工場の工場長に成り下がったが，彼等の党籍剥奪の翌年に失脚した**習仲勳の地方工場への都（みやこ）落ちもソ共流**である。フルシチョフは国防相ジューコフ元帥（1896～1974）の支援で逆襲できたが，幹部会候補から委員に昇格させた論功行賞の後，10月28～29日の中央会議で党・軍の要職を解いた。**翌年以降の粟裕・彭徳懐から林彪・黄永勝の失脚は，総参謀長経験者の彼が受けた仕打ちを思い起させる。**

フルシチョフは1958年3月に首相も兼任し名実倶に最高指導者と成ったが，集団指導体制への軽視や農業生産の停滞，機構改革の失敗等に由って，64年10月13～14日の臨時中央総会で**主観主義・独断専行**を批判され辞任に追い込まれた。**決定公表の16日に中国は原子爆弾の初実験の成功で二重の狂喜を味わったが，侘（わび）しい年金生活の末に失意の死を遂げた1971年9月11日は又，毛沢東が危険を察して上海から急遽列車を北京への帰途に直行させ，林立果の領袖「暗殺」企図の頓挫（とんざ）で林彪が翌日の逃亡に迫られたとされる日**である。

毛沢東は長征中の張国燾と闘う頃を生涯の最も暗黒な時としたが，**最も輝かしい日は「文革」初頭の1966年8月18日**であろう。当日に彼は**天安門楼上で広場を埋めた紅衛兵100万人の決起大会に参加し，熱狂的な歓呼・祝福で頂点に達する個人崇拝を存分に享受した。**11月25～26日の第8回まで**延べ1 100万人に施した「天覧」は，時が経つに連れて長時間の消耗が苦になり紅衛兵も秩序が乱れた**ので，やはり**初回が一番完美な至福**と見て可（よ）いが，**歴史の転換点の林彪事変は正にその日と毛時代終焉（えん）の「4人組」逮捕の真ん中に在る。**

鄧小平は「文革」中「資本主義主義の道を歩む実権派」のNo.2として打倒され，1969年11月から73年2月に江西省新建県の牽引車（トラクター）修理工場で労働をさせられた。党籍が留保と為った儘1971年11月6日に初めて中央の文書の伝達を聞き，それで知った「9.13事変」

に就いては帰宅後に珍しく興奮し，「林彪不亡，天理不容」（林彪亡びざれば，天理許さず）と言った。「8大」で党規約改正に関する報告を行った彼は，新規約で林の次期領袖の地位が明記された事には当然不服であろうが，**天理・天意の働きに帰着する**感想は興味深い。

彭徳懐は逆に林彪の**非正常死亡**が腑に落ちず，周恩来・董必武両副主席に直訴したいと叫んだ。前党副主席・国家副主席の2人しか頼れない事は周・董の人望の厚さの証と共に，**長年の政争・粛清に由る人間不信**の現れとも見られる。韓信は自分を兵卒から大将軍に引き上げた蕭何だけは信用する為に油断して命を落し，蕭もこの功績に由り最高位の重臣に任命されながら劉邦に危険視された。彼はわざと悪行で自らの評価を下げ一時の投獄にも甘んじ粛清を逃れたが，**他界の2 100年後に生れた林は虎の様な君主の尾を踏んで咬まれた。**

『三国志演義』第79回の題「兄逼弟曹植賦詩　姪陥叔劉封伏法」（兄弟に逼って曹植詩を賦し　姪叔を陥れて劉封法に伏す）の様に，**仁義無き闘いに満ちた乱世では骨肉の争いも**常態化したりする。曹操の正嫡の3男植（192～232）は建安七子（建安年間［196～220］に輩出した7人の詩文家）中最も優れた為，父親の寵愛と長兄丕の嫉妬を受け父の死後に冷遇され，側近を次々と殺された上で各地を転々とさせられた。小説では王位に就いた曹丕から**存亡に関る苛酷な試練**を強要され，必死の対応と母親の庇護で辛うじて無事に済んだ。

曹丕は**兄弟の情と次元が異なる君臣の義**を以て，才を頼んで礼を蔑ろにする曹植を叱り，文才の証明として今7歩歩く間に詩を1首吟じ得れば死罪を許す，出来ない時は厳罰し容赦しないと言い，壁に掛った絵に即して，牛が2頭土塀の下で争い1頭が井戸に落ち込んで死ぬ場面を，「一牛墻下闘，一牛墜井死」（一牛墻の下に闘い，一牛井に墜ちて死す）等の言葉を使わずに表せ，という難題を出した。植は条件通り忽ち出来上がり家臣も含む一座を驚嘆させたが，今度は声に応じて即座に作ってみろと丕は意地悪な要求を追加した。

「兄弟」を題としこの2字を用いてはならぬと言われて，曹植は直ちに1首を口遊んだ。「煮豆燃豆萁，豆在箕中泣。本是同根生，相煎何太急！」（豆を煮るに豆箕を燃やし，豆は釜中に在りて泣く。本是同じき根より生ぜしに，相煎る何ぞ太だ急なる。）これを聞いて曹丕も覚えず涙した処へ，母卞氏（160～230）が奥から出て来て弟に酷く当る彼を宥めたが，丕は慌てて席を降りて「国法を蔑ろに出来ませぬ」と答えた。親の嘆願に拘らず同母兄弟を安郷候に落す決定は，**古来の「忠孝不能両全」（忠・孝の両全は不可能）の原理**にも合う。

蔣介石の長男経国（1909～88，78～88年台湾国民党政権「総統」）は，故郷の浙江省奉化県で日本軍の空爆に死んだ生母毛梅福（1882～1939）を悼み，被弾した台所の外の通路に**「以血洗血」（血を以て血を洗う）**と刻む石碑を建てた。**復讐を誓う4文字は国共内戦の死闘の有様にも適用し，同胞の争いは「血濃於水」（血は水より濃い）を否定する事が多い。**周恩来の「江南一葉，千古奇冤。同室操戈，相煎何急?!」（江南の一葉，千古の奇冤。同室戈を操り，相煎る何ぞ急なる!?）は，正に**同根性を持つ両党の怨念の深さ**を現す悲嘆である。

1941年1月4～14日，黄河以北へ移る新4軍の一部が安徽省南部の涇県茂林で政府軍に攻撃され，9千人中8千人が脱出できず談判に赴く葉挺軍長も虜と為った。重慶に居る周恩来は皖南事変後の18日に当局に抗議す可く，国民党統治区で発行する中共主催の『新華日報』の検閲で開いた1面の空白部分に，上記の16字と「為江南死国難者志哀」（江南で国難に死す者の為に哀悼を志す）の揮毫を載せた。葉の姓に引っ掛けた「一葉」は1枚の葉や1隻の小舟の形象を含み，暴風に飛ばされた**孤軍の悲愴な消滅**を巧みに表現している。

「豈有豪情似旧時，花開花落両由之。何期涙洒江南雨，又為斯民哭健児。」（豈豪情の旧時に似たる有らん，花開き花落つる両つながら之に由る。何ぞ期わん涙江南の雨に洒ぎ，又斯民の為に健児を哭せんとは。）魯迅は「度尽劫波兄弟在，相逢一笑泯恩讐」と同日の七絶「悼楊銓」（楊銓を悼む）で，2日前（1933.6.18）に暗殺された民主保障同盟（前年設立）総幹事への哀悼を表した。上海の仏蘭西租界で工作員に発砲させた**国民党の民主派弾圧は同じ江南に起き，7年後の期せぬ惨事で又民の為に健児を哭す周恩来の悲憤はこの詩と通じる。**

楊銓の即死と息子2人・運転手の負傷をさせた白昼の凶行の24年後，同じ6月18日のソ共中央幹部会でフルシチョフが**政治的な謀殺**に遭った。**即刻解任を回避させたジューコフは「功臣亡」の暗転を経て，フルシチョフ失脚後に名誉が回復されたが事件の17年後の「6.18」に死去した。中国の筆頭元帥朱徳の恰度10年後（1896.12.1）に生れた彼の悲劇は，同年齢（96.3.22生）の賀龍元帥（5位）の末路を連想させる。**賀は**元帥10人の中で林彪・彭徳懐よりも早く非業の死を遂げ，「文革」中の政治局委員の迫害死の第1号**でもある。

賀龍は彭徳懐の失脚後に林彪に次ぐ軍委副主席（1965年末まで2人のみ）と為ったが，**「両雄不並立」の法則の通り林に排除され毛沢東に見放された。**1966年暮れに造反派の付き纏いから逃れる為に夫人を携えて中南海の周公邸兼私邸を訪ね，「総理，賀龍は今日難に遭い，今貴方に助けを求めに来ました！」と懇願した。倶に余命2年半の頃の彭徳懐の頼みと同じく縋られた周は，翌年1月に「私が君を守る」「秋になったら迎えに行く」と約束し，北京郊外の西山象鼻子溝の軍委前線指揮所に送ったが，賀の病死まで遂に実行しなかった。

賀龍は国共合作が破綻した後の中共の最も困難な時期に，周恩来の要請に応えて部隊を率いて1927年8月1日の南昌（江西省都）蜂起に参加し，非党員ながら中共を救い中共軍創設の元勲と為ったが，40年後には「保護」の名目で監禁され，終いに適切な治療を受けられず黄泉へ下りた。**1976年の周恩来・朱徳・毛沢東3偉人逝去（1.8，7.6，9.8）と対を為す様に，69年に賀龍・劉少奇・陶鑄（1908年生）3「罪人」が相継いで逝った（6.9，11.12，11.30）が，「9大」開催年に続発した大物の迫害死には「千古奇冤」級も有る。**

「文革」発動の中央決議（1966.5.16）を審議・採択する政治局拡大会議の決定に由り，彭真（政治局委員・中央書記処常務書記・北京市委第1書記兼市長）・陸定一・羅瑞卿・楊尚昆（1907～98，前中央辦公庁主任［事務総長］）「反党集団」の失脚が確定した。7年前の「彭

（徳懐）黄（克誠）張（聞天）周（小舟［1912～66，湖南省委第1書記］）」と**同じ4人，同じ彭姓の要人が「頭目」を為した事は，後の「4人組」と共に毛沢東時代の「反党集団」の多発を思わせる**が，彭真・陸定一の後釜に据わる形で抜擢されたのが陶鋳である。

陶鋳は広東省委第1書記･中南局第1書記を経て，1965年1月4日に副総理（文教等主管）に栄転し，66年5月28日に「中央文革」顧問，6月4日に中央書記処常務書記・宣伝部長に任命され，8期11中全会（8.1～12）の指導部改造で序列4位の政治局常委と為った。第4野戦軍時代の首長林彪が彼に警告した通り，**首都の政界は測り知れない程の危険性に満ちている**。彼は1967年1月4日に前触れも無く江青等に公の場で批判され，毛沢東の首肯で6日後に全職務を解任され，後に自由を奪われ監禁先の安徽省都合肥に病没した。

26年前の同じ日に安徽で起きた**皖南事変は国共両党の「同根相煎」だけでなく，中共内部の「同室操戈」の一面をも露呈させた**。項英副軍長・周子昆副参謀長（1901～41）は敵の包囲を突破した後，3月14日の深夜に潜伏先の山の洞穴（ほらあな）で副官劉厚総（1904?～?）に射殺された。財物を攫（さら）う為に就眠中の首長の命を奪う卑劣（ひれつ）な犯罪は防ぎ様が無いが，「**我々の身辺に眠るフルシチョフ」に対する毛沢東の警戒は理解できなくもない。現に「親密な戦友」林彪に裏切られた**が，劉少奇を「中国のフルシチョフ」として倒したのは誤りである。

劉少奇は**領袖との路線の対立が災いして**，8期11中全会で序列が2位から8位に落ち，国家主席の職務履行も外賓との会見も周恩来経由の毛沢東指令で停止された。**憲法・党規約で定めた罷免･解任の手続きも無い儘**，翌年から幽閉（ゆうへい）（夫人王光美［1921～2006］は投獄）の身と為った。8期拡大12中全会（1968.10.13～30）で「叛徒（うらぎりもの）・敵の廻し者・労働者運動の叛逆者」と断罪された後，69年10月17日に対ソ戦備の緊急疎開の一環として河南省開封市に移送され，賀龍・彭徳懐と同じいい加減な処置の所為で病状が悪化し死に至った。

劉少奇の死後18日目に陶鋳が亡くなり，陶の命日は5年後の彭徳懐の他界と隣り合うが，党史上この類（たぐい）の負の連鎖は幾らでも有る。劉の誕生日も多事の秋の11月に在る（24日）が，**当局はわざと彼が70歳になる日を選んで党籍剥奪・公職追放の中央全会決定を知らせ，「文革」で極端に増した政争の底意地の汚さを見せた。古稀の珍しさも無くなった70歳までしか生きられなかったのは夭折とも言え**，弁明や反論の機会も与えず全会後の公表から24日後に始めて開示したのは，**生誕の記念を海外並みに重んじる文化**が根底を為す。

暗号――「史縁」連環の偶然の一致，人為の多発と内在の関連

連合国軍占領下（1945.9.2～52.4.28）の日本で極東国際軍事裁判が行われ（46.5.3～48.11.12），東条英機（1884年生）等7人のA級戦犯が終了の翌月の23日に絞（こう）首刑に処された。**5年後の同じ日のベリヤ裁判･処刑と結び付ければ，激動の時代や国際政治の生臭（なまぐさ）さ･**

血腥さを改めて感じるが，昭和天皇（1901～89，26～89 在位）の第 1 皇子明仁（あきひと）の 15 歳の誕生日に当るから，0 時 1 分～35 分の処刑は作家猪瀬直樹（1947～　）の推断の通り，米国が次期天皇に敗戦の事実を常に思い起させる為に仕込んだ**「死の暗号」**と見て可（よ）い。

日本の成人年齢は 1876 年の太政官布告で初めて 20 歳と定められ，2018 年の民法改正で 22 年 4 月 1 日から 18 歳に引き下げることと為った。一方，皇室典範（旧＝ 1889.2.11～1947.5.2，新＝ 47.5.3～現在）の規定に由り，天皇・皇太子・皇太子孫は 18 歳で成人と為る。18 歳は中国・米国（除（のぞく）2 州）・露西亜（ロシア）・仏蘭西（フランス）・独逸（ドイツ）等で用いられる世界の主流であるが，極少数の国（インドネシア等）で成人の基準とされる **15 歳は，儒教文化圏では昔から心理的な成人年齢**と見られ，**A 級戦犯の処刑時機はそれを意識して設けたもの**と思われる。

「子曰：“吾十有五而志於学，三十而立，四十而不惑，五十而知天命，六十而耳順，七十而従心所欲不踰矩。”」（子曰（いわ）く，「吾（われ）十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑（まど）わず。五十にして天命を知る。六十にして耳順（したが）う。七十にして心の欲（ほっ）する所に従って矩（のり）を踰（こ）えず。」）『論語』「為政」に見える**孔子の人生回顧は 15 歳を起点としており，学問に志す事が全（まった）く出来ない「文革」中の習近平の自称「人生の第 1 歩」も，貧農・下層中農の所謂（いわゆる）「再教育」を受ける「知識青年」として，15 歳で北京から陝西省延川県へ赴いた事**である。

A 級戦犯処刑第 1 号の東条英機は陸軍大将（最高階級，1941 年 10 月昇進）で，太平洋戦争（41.12.8～45.9.2）中に首相（40.10～44.7）兼陸軍大臣（40.7～同）・内務大臣（41.10～42.2）・外務大臣（42.9）・文部大臣（43.4）・商工大臣（43.10～11）・軍需大臣（43.11～44.7）・参謀総長（44.2～7）を務めた。当然ながら真珠湾（じゅ）攻撃で「大東亜戦争」を起した責任が追究されたが，市ヶ谷の旧陸軍士官学校の講堂を舞台とした東京裁判に限らず，**戦争や政争の敗者に対する勝者の裁きは，正義の行使とは別の次元の懲罰や復讐の要素が多い**。

連合国軍最高司令官（1945.8.15～51.4.11）として日本を君臨したマッカーサー米国陸軍元帥（1880～1964）は，国際法廷の組成を待たず終戦早々の 46 年 2 月 23 日・4 月 3 日に，山下奉文陸軍大将（1885 年生）・本間雅晴陸軍中将（同 87 年）を極刑に処した。異名「マレーの虎」の山下は比律賓（フィリピン）に於ける残虐行為の責任を問われ，本間はバターンで捕虜を炎天下に徒歩 90㌔移動させた「死の行進」の責任で起訴されたが，同国の戦場で常勝将軍のマッカーサーに苦杯を喫させた 2 人の死は，**公憤と私怨が混じった雪辱の結果**と見られる。

マニラで米軍法廷が山下奉文に死刑判決を下した 1945 年 12 月 7 日は，真珠湾攻撃の現地（布哇（ハワイ））時間での 4 周年に当り，米連邦最高裁への不服上訴が却下されたのは**被害者の心情にも合う帰着**である。本間雅晴に対する銃殺刑の 4 月 3 日 0 時 53 分も**仕返しの意図を明確に示す**様に，4 年前に彼が第 14 軍司令官として第 2 次バターン半島攻略戦の総攻撃命令を下した月日・時刻に他ならない。死刑判決の 2 月 11 日は 57 年前の大日本帝国憲法発布とは無関係であろうが，**東京裁判開始の 5 月 3 日は 1 年後に日本国憲法の実施日と為った**。

日本は天皇の 51 歳の誕生日に晴れて被占領状態から脱出し，立太子の礼と皇太子成年式も満を持して 1952 年 11 月 10 日に挙行された。**皇太子の 25 歳の誕生日に東京タワーの完工式が行われ正式公開と為ったが，16 日前（12.7）の公開開始と合せれば 10 年前の米国の仕業への意趣返しの様に思える。1964 年東京五輪開会式（10.10）の聖火中継最終走者**として，予定を変更して **1945 年 8 月 6 日に広島県三次市で生れた**坂井義則が起用された事は，**米軍が広島で行った人類史上初の原子爆弾に由る大規模無差別殺傷への遺恨**を感じさせる。

1980 年 11 月 20 日～81 年 1 月 25 日，最高人民検察院特別検察庁・最高人民法院特別法廷に由る林彪・江青両「反革命集団」の特別裁判が行われた。開始の「11.20」は毛沢東・江の結婚（1938，延安）記念日と，「文革」否定の急先鋒で胡耀邦の 65 歳の誕生日に巡り合せる。結審の「1.25」は 1974 年に江が中央直属機関・国務院部門の林彪・孔子批判動員大会を主導し，本当の標的と為る周恩来に不意打ちを掛けた日である。2 つの日付は**意図の有無に関らず，「文革」を清算し極左路線と訣別し毛の呪縛から解放する主旨に暗合する。**

特別法廷が案件を受理した 11 月 10 日も，15 年前に毛沢東が「文革」の前哨戦を仕掛けた日である。当日に**上海では**江青・張春橋（市委書記処書記・宣伝部長）の画策で，『文滙報』に姚文元（市委機関紙『解放日報』編集委員･文芸部主任）の**「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」が発表され，非毛派粛清の突破口として彭徳懐の罷免に不平を抱く論調への非難が為された。北京では毛の意思に由って楊尚昆の中央辦公庁主任が解任され，後任に長年の腹心汪東興**（1916～2015，公安部副部長［次官］･中央警備局局長，少将）**が当てられた。**

毛沢東は 8 期 10 中全会の劈頭に，政権の転覆を狙う場合は先ず輿論を作り，意識形態の工作を先行せねばならぬ，革命の側も然り，反革命の側も然りだ，と**上部構造に於ける硝煙無き戦闘の重要性**を説いた。独逸語の Überbau に由来し中国語で「上層建築」と訳す上部構造は，下部構造と為る社会の経済構造の上に形成された政治的・法的・道徳的・哲学的・宗教的・美的な観念形態や，それに対応する制度・組織（国家・政党等）を指す。マルクスの史的唯物論のこの概念の意味は，**毛の権力争奪戦の「上層占領」で二重に体現された。**

小説の創作を利用して反党活動を行うのは一大発明だ，と毛沢東はその断言の前に述べた。康生（政治局委員候補･中央文教小組副組長）が渡した私見筆記を読み上げたこの件は，**「最高指示」と化して「反体制」的な文芸作品を取り締まる依拠に為った。**発端の李建彤（1919～2005，中国地質科学院党委副書記）著長篇『劉志丹』は，同年の夏『光明日報』『工人日報』『中国青年報』に連載が始まったが，原型に高崗が居り高崗の名誉回復を企む意図が有るとの誹りで打ち切りと為り，**康に利用されて支持者の習仲勳の失脚に発展した。**

劉志丹は高崗と並ぶ陝西・甘粛根拠地の創設者・首長で，1935 年 10 月に高・習仲勳と共に党・軍内の「粛反」（反革命分子粛清）で逮捕され，中央紅軍に救われた後に紅 28 軍軍長に任命され，翌年の東征中の 4 月 14 日に山西省中陽県で戦死した。毛沢東は 24 日の

党中央主催の追悼大会の為に「群衆領袖，民族英雄」と賛辞を認（したた）め，中央は6月に生地の陝西省保安県を志丹県に改名した。以後1度も公式評価で否定された事が無い英雄であるが，劉の義妹（弟の妻）が書いた伝記小説は**劉・高と不仲だった高官の不興で筆禍（ひっか）を惹起（じゃっき）した。**

雲南省委第1書記閻紅彦（えんげん）（1909～67）が中央に告発した『劉志丹』の誤りは，**高崗粛清に対する懐疑を許さない禁忌に触れた**ので厳しく対処された。其々中央宣伝部・中華全国総工会（労働組合）・中国共産主義青年団中央が主管する3紙は連載を中止し，習仲勳は10中全会前の予備会議（8.26～9.23）で重点議題として批判された。全会では鄧小平が告げた政治局常委会の決定に由り，毛沢東が「罪悪が余りにも重い」とした5人の査問対象は出席の資格を奪われたが，彭徳懐に次ぎ張聞天・黄克誠・周小舟の前に出る習への敵視は強かった。

高崗自殺の5年後（1959.8.17）に周小舟は湖南省委第1書記を解任され，中央委員候補（前年「8大」2次会議で追加選出）・省委委員に留まりながら，瀏陽県大瑶人民公社（農村の生産・政治一体化組織）党委副書記に左遷された。1962年6月に中国科学院（国務院直属の国家学士院（アカデミー））中南分院（広州）に異動され，副院長中の末席に置かれ党組（行政を凌ぐ陰の指導部）に入らない様に冷遇された。抗日戦争初期に毛沢東の秘書を務めた彼は「文革」中の毛の最初の誕生日（12.26）に，**君主や時弊への恨み**を抱いてのか睡眠薬で自殺した。

「文革」中の中央委員の自殺第1号は他ならぬ，図らずも習仲勳失脚の疑獄を誘発した閻紅彦である。彼は陶鋳失脚の1967年1月4日に造反派の批判大会への出頭を拒否し，自ら第1政治委員を務める昆明（雲南・貴州省）軍区の部隊駐屯地に身を隠した。8日に「中央文革」の陳伯達からの電話で大衆の前に出て叛徒の問題を自白せよと迫られ，「私は陳伯達・江青に追い詰められて死ぬ」と紙切れに書いて致死量の睡眠薬を呑んだ。**9年後の周恩来逝去と同じ日の悲劇は，上将57人の内の「文革」中唯一の自殺**として特筆す可（べ）きである。

「習賈劉反党集団」の賈（か）拓夫（1912～67）も陝西籍の故に高崗事件後は重用されず，軽工業相の任期（54.9～59.4）満了後「右傾」を批判され，『劉志丹』事件後は遼寧撫順発電所所長から北京石景山製鉄所の労働者に落され，67年5月7日に郊外の林に変死体と為って発見された。**打撲傷が付いた儘の変死は同年1月21日の海軍副司令・東海艦隊司令陶勇中将の例も有り，彼は満54歳に為るその日に艦隊司令部の構内の浅い井戸に逆立ちの体勢で突っ込んでおり，自殺と見せ掛けた他殺の疑いが強い事件は遂（つい）に迷宮入りして了（しま）った。**

牛の争いで1頭が井戸に落ちて死ぬという曹丕が弟に作らせた7歩詩の題を想起するが，**「同室操戈」の内争の中の1967年1月21日は，43年前に死去したレーニンの暴力統治を「紅色恐怖（あかいテロ）」に発展させた時流を体現して，石炭工業相・中央委員候補張霖之**（1908年生）**が夜に造反派の激しい殴打で倒れ，日が変った5時間後に「文革」中の閣僚迫害死第1号と為った。**毛沢東は1965年12月20日の政治局常委拡大会議で張を「資本主義の道を歩む実権派」としたが，**打倒す可（べ）きだと言う彼の断罪は張の末路を決めた**と言って構わない。

李建彤の夫劉景範（1910～90，地質部次官）は「反党」3人組にされた後，「反革命現行犯」として68年から7年間も投獄された。共に失脚後の停職反省を経て夫人も同年に監禁され，70年に党から除名され労働改造の身と為った。賈拓夫の死後**「4人組」にする習性**からか「習賈劉馬反党集団」の称が現れ，李の取材を受けた労働相・中央委員候補馬文瑞（1912～2004）が巻き添いを食い，66年冬～73年夏に「監護」審査を受けた。彼等は生き抜いて名誉回復を迎え得たが，**一大冤罪の『劉志丹』事件の被害者は5桁にも上った。**

中国の王朝では初代の秦の焚書坑儒から末代の清の文字獄まで言論弾圧を絶やさず，特に異民族統治の康熙・雍正・乾隆年間（1662～1795）の数多い筆禍事件で，政治・君主に就いて批判的な言辞を書いた漢人に対する大量な迫害・処刑が行われた。**「胡風反革命集団」摘発は数千人に害を及ぼす20世紀中国の最大の文字獄と言え，「盛清」**（「盛唐」に擬えて清の最盛期を表す造語）**3帝時代の始まりの300年後の『劉志丹』事件は，党中央が特定の文学作品を審査し関係者を処罰する点で，政争の具にされた新型の文字獄と見られよう。**

極刑又は政治的な処刑・社会的な抹殺を招きかねない筆禍に対して，「寸鉄殺人」の威力で人に危害を与える筆の禍も有る。「10年浩劫（大災難）」の導火線を為した「新編歴史劇『海瑞罷官』を評す」は，文芸評論を政敵打倒の武器とする手口で「一大発明」に値する。劇中の明の悪代官が没収した土地の農民への返却と冤罪を蒙った民衆への救済の故事は，今の集団化された土地の農民への再分配と反体制分子の名誉回復の為に用いられたとされるが，海瑞免官（1570）への同情は彭徳懐解任への不満と断じるのは**牽強付会も甚だしい。**

毛沢東は「大躍進」失敗が顕在化し国家主席を劉少奇に譲る1959年4月に，**各地の幹部が水増しの業績で手柄を立てようとする不正の風潮を憂慮して**，「清官」（清廉な官吏）海瑞（1514～87）の**剛正・諫言の気骨を見倣う**よう唱えた。共産党員でもある歴史学者・北京市副市長呉晗（1909～69）は領袖の意向に沿って，専門外ながら京劇『海瑞罷官』の脚本を書いた（61年1月初演）が，彭徳懐が失政批判の直諫（59.7）で毛の逆鱗に触れて粛清された事を彷彿させて，**呉は毛の変心・乱心で掌を返す様に政争に翻弄され犠牲と為った。**

呉晗は中国民主同盟（1939.11.23前身成立，44.9.19改称）に在籍中，57年3月に秘密裡に中共に入党（後に公表）し，「反右派闘争」（民主党派や文化・教育界を中心に起きた体制批判を資産階級右派思想と見做し，異端分子を追放する思想弾圧）で体制側に立った。彼が批判した羅隆基（1896～1965）は「反右」開始の57年6月に「右派」とされ，後に民盟副主席・森林工業相を解任されたが，**主な罪状**は他ならぬ**建国初期の「反革命粛清」等の冤罪を指摘し，与党・民主党派・無党派人士から成る審議機構の設置を提言した事**である。

羅隆基と10年間同棲した報道人・民盟中央委員候補の浦修熙（1910～70）も当局に同調し，羅の私的な言動を暴露し「羊の皮を被った狼」等と罵り袂を分ったが，『文滙報』副編集長として右派の言論を広げたという毛沢東の糾弾で「右派」に認定された。妹の修安（1918

～91）も北京師範大学党委副書記在任中の62年10月に夫の彭徳懐に離婚を要求し，上層部の批准が下りない故に去って行き面会を頑（かたく）なに断り続けたが，「文革」中その**非情な決着（けじめ）を付けたにも関らず迫害を受け**，入水自殺を試みる（67.8.31，未遂）程に苦しめられた。

浦氏姉妹や彭徳懐の様に毛沢東時代の知識人・党員は極めて従順で，民主党派の翼賛政党化に貢献した呉晗も彭の冤罪に対する不服が有り得ない。ところが**「反右派闘争」「彭黄張周反党集団打倒」を上回る「文革」の残酷**を現す様に，その**「良狗亨」の結末は此等（これら）4人よりも悲惨**である。彼は1968年3月に康生・謝富治の指示で投獄され，翌年10月11日に原因不明の死を遂げた。共に迫害された夫人袁震（1907年生）はその前の3月18日に没し，公安局の拘留・虐待を受けた養女小彦（54）も76年9月23日に精神病院で自殺した。

海瑞の最大の壮挙は最晩年の嘉靖（せい）帝（明世宗朱厚熜（そう），1507～67，31～67在位）への直言で，道教に熱中して土木工事や祈祷に**国費を濫用する君主の乱脈・失政を諫める**為に，彼は棺を買って妻子に別れを告げ牢獄に繋がれる罰を甘受した。**翌年（1567）1月23日の天子崩御後その遺言に由り諫言の諸臣は特赦されたが，400年後の当日は陶勇・張霖之の変死の直後に当り，『海瑞罷官』批判から既に諫臣は滅絶していた**。陶勇の妻朱嵐（1918年生）も呉晗夫妻の悲劇と重なる様に，査問・殴打に耐え切れず同年9月に跳び下り自殺をした。

北朝鮮の世襲3代目領袖金正恩（ウン）（1984～　）の治下（2011.12.17～　）で，**スターリン・毛沢東も顔負けする非情な高官粛清が繰り返されて来た**。最初の2年中の人民武装力部長・同部第1副部長・朝鮮人民軍総参謀長・人民保安部長・国家安全保衛部第1副部長の更迭は，**軍・公安系統の上層部に対する毛の度重なる解任と二重写しに為る**が，張成沢（チャンテク）国防委員会副委員長（1946年生）・玄永哲（ヒョンヨンチョル）人民武装力部長（同49年）に対する処刑（2013.12.12，15.4.30?）は，**中共政権では有り得ない極刑**であり，内外の人々を心底（しんそこ）戦慄させて了（しま）った。

金正日の「先軍政治」に由り1998年9月5日から国防委員会委員長が国家の最高職責と為り，3男の権力継承後は故父君を「永遠の国防委員長」に祭り上げる（2012.4.13，第12期最高人民会議［国会］第5回会議決議）一方，新職名の第1委員長は機構の廃止（16.6.29）まで相変らず国家元首に当る。張成哲は国家の最高指導機関の実質的なNo.2で，労働党中央（第1書記＝金正恩）政治局委員・行政部長の要職も兼ね，政治局委員候補・党中央軍事委員会副委員長玄永哲と同じ大将だから，**林彪副党首・副統帥の失墜・変死を連想させる**。

日本語の「真珠湾攻撃」と英語の“Attack on Pearl Harbor”に対し，中国語の「偸襲珍珠港」は中性的な「攻撃」「奇襲」でなく，「偸」（偸（ぬす）む。こっそり）で騙し撃ちを表す。宣戦布告の前に攻撃を始めた事が卑怯（きょう）に映る米国と同じ感覚であるが，春秋末の兵法家孫武（生歿年不詳）著『孫子兵法』「計篇」の「兵者，詭道也」（兵たる者は，詭道也（なり））の通り，**軍事及び戦争の要素を持つ政治・外交では欺瞞も必要悪に為る。中共の政争も「突然襲撃」（不意打ち）が少なくないが，部下に対する金正恩の「電撃斬首」の意外性はこの上無い**。

真珠湾攻撃と同じ12月8日の政治局拡大会議で張成沢が撮み出される場面は，60年前のソ共政治局会議（6.26）でジューコフ等がベリヤを逮捕した事と似通うが，**中共の党・国では大物が会議中に拘束される事は無い**。「4人組」の王洪文･張春橋･姚文元の拘束も「誘捕」（誘い込んで捕まえること）で，『毛沢東選集』第5巻の編集に関する議題で政治局常委拡大会議を招集したのは，到着時に個別で秘（ひそ）かに捕らえる為の罠（わな）である。**大勢の出席者の前で張を連行するのは前近代的な感じがするが，映像報道の見せしめの威力が絶大である。**

金正日の国葬（死後11日目の12.28）の際に霊柩（きゅう）車に寄り添って行進した8要人の内，葬儀委員会序列4位の李英鎬（イヨンホ）次帥（1942～?）は翌年7月15日に政治局常委･軍委副委員長･総参謀長を解任され，5位の金永春（チュン）次帥（1936～2018）は4月に人民武装力部長を退任し，24位の金正覚（ガク）次帥（1941～　）はその後任の人民武装力部長を11月に解かれ，国家安全保衛部第1副部長として彼と共に**新君集権の為の粛清**を推進した25位の禹東測（ウドンチュク）大将（1939～　）は4月に失脚し，19位の張成沢の処刑で**5人の軍人は全て中枢から離れた**。

金正日死去の当日に組成し朝鮮中央通信が19日に発表した国家葬儀委員会の名簿では，後継者の君臨を明示する様に「金正恩同志」が冒頭に単独で掲げられ，下の231人との間に1行を空ける形で**衆人と隔絶し追随を許さぬ至高の地位**が表される。2位の金永南（ナム）最高人民会議常任委員長（1928～　）と3位の崔永林（チェリム）首相（1929～　）は，28日の永訣（告別）式出席者名簿でも同じ順位であるが，14位の金慶姫（ギョンヒ）（1946～　，故人の唯一の同母妹，政治局委員･大将）は葬儀では5番目と位置付けられ，夫張成沢の順位も16番目に上昇した。

霊柩車の付き添い位置では進行方向の右側の先頭が金正恩で，次に張成沢･金己（ギ）男（1929～　，政治局委員・書記局書記・中央宣伝煽動部長）・崔泰福（テボク）（1930～　，書記局書記・最高人民議会議長）が従った。後ろの古参党･政高官の序列は金慶姫の食い込みで各1つ下がって9・10位と為ったが，金永南・崔永林と共に後も安寧でいられるのは**高齢文官の低危険性**（ローリスク）も要因と思える。逆に左側の李英鎬・金永春・金正覚・禹東測は**軍の要職者だから翌年に退場を余儀無くされた**が，**毛沢東時代の董必武等と彭徳懐等の運命の分れとは妙に一致する。**

金正日の死去（午前8時半）から翌々日正午の公表までに51時間半も掛り，金日成の場合の34時間（1994年7月8日未明2時～翌日正午）の1.5倍に当る長さは，金正恩の**「領導者」（指導者）の地位の初明記を含む権力強化の必要**にも由ろう。1976年9月9日0時10分に逝った**毛沢東の訃報**は早くも午後4時に放送されたが，**「告全党全軍全国各族人民書」（全党・全軍・全国各民族人民に告ぐる書）の題は，金正日訃報の「全ての党員・人民軍将兵・人民に告げる」と同様に，党が頂点に据わり軍が民より優位に立つ構図を示す。**

金正日の訃報は朝鮮労働党中央委員会・党中央軍事委員会・朝鮮民主主義人民共和国国防委員会・最高人民会議常任委員会・内閣の連名で，毛沢東訃報の中国共産党中央委員会・中華人民共和国全国人民代表大会常務委員会・中華人民共和国国務院・中国共産党中央軍事委

員会と比べて，**軍委・国防委が国会・内閣の上位に在る「軍先」序列**が特徴と為る。**北朝鮮と中国は今や１党独裁期間の世界１・２位に並べてあるが，北朝鮮の最長記録保持は建国が中共より１年余り早い事と共に，中国の比でない徹底的な軍事独裁に最大の理由が在ろう。**

国民党の１党独裁は大陸（1928.12.29～49.9.30）**・台湾**（～96.3.24）**の両方を加算すれば，ソ連**（1922.12.30～91.12.25）**に次ぐ元世界２位**である。**台湾全域に敷いた世界最長の戒厳令**（1949.5.20～87.7.15）**の様に，超長期の１党独裁は超絶の鉄腕統治に負う事が多い**。蒋介石の元旦や抗日戦争勝利の際の「告全国軍民（同胞）書」や，死去翌日（1975.4.6）の「総統令」の「志哀辦法」（哀悼方法）中の「軍・公・教人員」（軍人・公務員・教員），「部隊・機関・学校」も，**国共の「双胞胎」（一卵性双生児）の関係を示す「先軍」の順**と為る。

国民党の大陸支配の政治・経済の枢軸は「蒋宋孔陳４大家族」であり，前の御三家の蒋介石・宋美齢（1897～2003）夫妻，宋子文（1894～1971，宋美齢の兄，財政相・中央銀行総裁・外相・行政院長［首相］等歴任），孔祥熙（1880～1961，財政相・行政院長等歴任）・宋藹齢（あい）（1889～1973，宋美齢の姉）夫妻は**血縁で繋がり**，後の陳果夫（1892～1951，中央組織部長・江蘇省主席等歴任）・陳立夫（1900～2001，中央組織部長・教育相等歴任）兄弟も，蒋の恩人陳其美（1878～1916，政治家）の甥（おい）だから，**４族は全て義理で結ばれている。**

国民党の敗退は中共に負ける前に自滅した結果と言え，**引金（ひきがね）の１つが蒋経国の経済整頓の頓挫**である。彼は政府発令（1946.8.19）の経済管制・幣（へい）制改革を推進する為に，経済督導員として上海で悪徳商人摘発の運動を展開したが，孔祥熙の長男令侃（かん）（1916～92）の会社の不正を追及する際に，甥に泣き付かれた宋美齢の干渉で断念せざるを得なかった。それで物価制御・金元券改革は破綻し，11 月 1 日の政府の敗北宣言・6 日の蒋経国辞任は，2 日の遼瀋戦役終結･6 日の淮海戦役開始（～翌年 1.10）と重なって**「党国」の弔鐘（しょう）が鳴った。**

中共史観では国民党治下の中国は「半封建・半植民地社会」とされ，林立果一味の政変構想では毛沢東時代の「社会封建主義」が指摘されたが，共通の「封建的」は「蒋家王朝」と北朝鮮の「金家王朝」の世襲に見られる。ソ連留学・滞在（1925～37）中にソ共の候補党員と為り露西亜（ロシア）人と結婚した蒋経国は，**最晩年の台湾民主化の道を開いた半面その最高指導者の地位は父親を継ぐもの**である。**北朝鮮の世襲は先ず共産圏では社会主義の理念と相容れない（あいい）故に他に例が無く，３代世襲に至っては清王朝崩壊後100年来の奇観と言えよう。**

金正日は 2010 年 9 月 28 日に金正恩・金慶姫に大将を授与したが，**「血は水より濃い」**と言う様に妹婿（むこ）の張成沢には同様の待遇を与えなかった。霊柩車に付き添う金正恩の後ろの張が初めて大将の制服を着た姿は，**一族で固める「先軍王朝」と新首領の後見人に相応しい。**反対側の金正覚軍総政治局第 1 副局長・禹東測国家安全保衛部第 1 副部長は，趙慶喆（チョ チョル）軍保衛司令官（19??～　，上将，葬儀委員会 61 位）と共に，**金正恩体制作りの為の粛清を仕切る「死の３人組」**を為したが，**彼等の「良弓蔵」に続く張の「良狗亨」は衝撃的過ぎる。**

金正恩以下の霊柩車付き添い７人衆中の５人更迭・失脚は，71.4％の比率が高い様であるが，**毛沢東・後毛時代の政争と比べても驚く程の事ではない**。毛沢東治喪（葬儀）委員会名簿の冒頭は政治局常委の華国鋒・王洪文・葉剣英・張春橋で，その別格を示す様に以下の 359 人は姓の筆画数で並べられた。頂上陣 4 人中の華・葉は架空の常委拡大会議の会場で部下に王・張を順次逮捕させ，当夜の政治局会議で主席に推挙された華は 4 年余り後に鄧小平等に下ろされたので，**合計 3/4 の粛清又は失脚は「文革」の常態の内に算えられる**。

ソ連の赤軍大粛清（1936～38）では元帥 5 人の内 3 人（6 割），軍司令官級 15 人の内 13 人（86.7％），軍団長級 85 人の内 62 人（72.9％），師団長級 195 中 110 人（56.4％），旅団長級 406 人中 220 人（54.2％），大佐級も 3/4 が殺害され，大佐以上の高級将校の 65％が粛清された計算に為る。ソ共「17 大」（1934.1.26～2.10）選出の中央委員・同候補 139 人の内 98 人（70.5％），代表 1 966 人の内 1 108 人（56.4％）も，主に大粛清の中で「反革命」等の冤罪で処刑されたので，**職位・生命両面の抹殺が半数を超す例は実に巨万と有る**。

ソ共「20 大」でフルシチョフが行ったスターリン批判は，**数々の惨事の暴露で 1 436 人の代表を驚愕させた**。56 の外国の共産党・労働（者）党等の代表団に対する限定的な開示として，中国・仏蘭西・伊太利・チェコスロバキア・勃牙利・アルバニア・洪牙利・羅馬尼亜・波蘭・独逸・朝鮮・蒙古・越南の団長が秘密報告・決議を閲覧できたが，異名「小スターリン」の波蘭統一労働党書記長・人民共和国首相ビェルト（1892 年生）は，**衝撃と恐怖政治を本国に敷いた後ろ目痛さからか**，直後の 3 月 12 日に心臓発作でモスクワに客死した。

彼が死まで初代書記長を務めた波蘭統一労働党はスターリンの古稀（1948.12.22）に成立したが，衛星国（臨時政府［44.7.21 発足］を経て 52.7.22 建国）の「主権有限」が現れる様に，新党首選びの会議（3.20）にフルシチョフが出席しスターリン批判の意義を力説した。**毛沢東の党首就任 13 周年に当る日の人事介入で歴史清算の動きは波蘭経由で拡散され，同年 10 月 23 日に洪牙利でソ連の支配に楯突く暴動が起った。ソ軍の鎮圧で動乱は 11 月 10 日に収まったが，強権統治の意を強めた毛は恰度 9 年後「10 年動乱」の幕を開けた。**

ソ共が「20 大」秘密報告を提供した 13 代表団の中で，重要度序列が 1 位である中共の朱徳団長は，建国後初の軍階級授与（1955.9.27）で筆頭元帥と為ったが，元帥 10 人の内 3 人が「文革」中非業の死を遂げた。7 位の羅栄桓（1902～63，政治局委員・総政治部主任）を除く 9 人中，**粛清・失脚・迫害を免れたのは朱しか無く**，劉伯承・陳毅と 8～10 位の徐向前（1901～90，初代総参謀長［50～54］）・聶栄臻（副総理・国防科学技術委員会主任）・葉剣英（最後の 4 人は 66 年 1 月 8 日に軍委副主席に就任）は，何れも政争で傷付けられた。

ソ共「17 大」代表数の 1 966 は奇しくも「文革」初年と同じであるが，**30 年前のソ連の大粛清に由る党中央成員の同時多発的な失脚は，「文革」高潮期の 8 期 12 中全会で異様さが露呈した**。「8 大」選出の中央委員 97 人の内 57 人（58.8％）が打倒・追放された故，成

立要件の過半数を超える様に委員候補から10人を昇格させて物故者の穴を埋め，その結果73人の委員候補の内の参加は9人だけと為った。「文革」初期の11中全会で出来上がった改造政治局の委員21人・同候補5人も，共に**半数以上が生前か死後に粛清か抹殺された**。

彭徳懐等5人の出席を認めない8期10中全会より10倍も失格者が増えた12中全会を経て，9期1中全会で毛沢東主席・林彪副主席を頭とする指導部が選出された。林・江青両派の暗闘で「9大」閉会後の全会開催は通常の翌日でなく4日後に為り，新政治局の委員21人･同候補4人の顔触れに**早速（さっそく）異変が現れた**。議長席の最前列の毛･林の左側の末席に坐った温玉成（1915～89，副総参謀長・北京衛戍区司令・中央文革碰頭（ほう）会［連絡会議］成員，中将）は，最前列の着席者が漏れなく政治局に入る「7大」「8大」の慣例に反して落選した。

温玉成は第40軍軍長として朝鮮で**志願軍の初戦を指揮した功臣**で，広州（広東・広西・湖南・湖北3省1自治区）軍区副司令在任中の1968年，楊成武総参謀長代理・余立金空軍政治委員（1913～78，中将）と共に逮捕された傅崇碧（へき）（1916～2003，少将）の後任として，毛沢東の指名で首都防衛の重責を担ったが，**政治音痴の所為**で林彪・江青の両方から信頼されず見捨てられた。翌年6月4日に林から成都（四川省・西蔵（チベット）自治区）軍区第1副司令への降格を命じられ，「9.13」後5年間も林の私党として監禁された事は**不条理極まり無い**。

第9期政治局の内2中全会（1971.8.23～9.6，廬山）で，常委陳伯達・委員候補李雪峰（1907～2003）が失脚し監禁された。李は河北省革命委員会主任（「文革」中の行政首長）と為る前，華北局第1書記として彭真に替る北京市委第1書記を数ヵ月兼ねたが，**首都長官の「高危（ハイ・リスク）」の第2の例**の様に排除された。温玉成の後任衛戍区司令（～1977.9）呉忠（1921～90，第9～11期中央委員候補，少将）も，広州軍区副司令として対越南（ベトナム）戦争（79.2.17～3.16）に参戦した直後，在京中の林彪・江青との関係に就いて8年間も審査を受けた。

「9大」開会（4.1）後の第2次全体会議（14）で政治報告・党規約が採択されたが，**権力配分の争奪戦は中央委員会選挙の前段階で異様に激化し**，最終日の第3次全会は予定の21日より3日遅れた。**中委の組成・得票は概ね（おおむ）毛沢東の意向に沿ったが，9期1中全会の政治局選挙では派閥の自己主張が前面に出た**。毛・林彪・周恩来・康生の満票（277）と陳伯達の275票に次いで，黄永勝は江青より4票多い274票を取り，林派の呉法憲（1915～2004，空軍司令兼政治委員・副総参謀長，中将）・葉群の得票も張春橋・姚文元を上回った。

常委会選挙でも当選の5人以外は江青150票，黄永勝130票と続き，他の11人は全て35票以下で**毛･林両派の競合･拮抗（きっ）**を浮彫にした。黄は軍委辨事組（事務局）の組長として，同じ林派「4大金剛」の副組長呉法憲，成員李作鵬（ほう）（1914～2009，海軍第1政治委員・副総参謀長，中将）・邱会作（1914～2002，総後勤部部長・副総参謀長，中将），及び林の分身を為す成員葉群と共に，**軍委の実質的な執行部を牛耳（ぎゅうじ）っていた。政治局委員に占める軍人（含（ふくむ）出身者）の71.4%の異常値と合せて，軍事独裁体制と林派の権勢の強さを物語る。**

9 期 2 中全会で江派に敗れた林派は翌年の林彪・葉群の死，11 日後の黄永勝等「4 大金剛」の逮捕で全滅し，第 9 期政治局･同常委会はこれで 25 人中 8 人（32%），5 人中 2 人（4 割）が消えた。10 期 1 中全会で選出された政治局は同じ委員 21 人・委員候補 4 人で，副主席と常委会は其々 5 人・9 人に増員したが，第 9 期委員候補から常委・副主席に特進した李徳生（1916～2011，総政治部主任・北京［北京・天津直轄市，河北・山西省，内蒙古自治区］軍区司令，少将）は，2 中全会（75.1.8～10）で両職の辞任を余儀無くされた。

北京軍区司令は初代（1955.4～58.9）**の楊成武，次の楊勇**（1912～83，上将），**3 代目**（63.6～71.1）**の鄭維山**（1915～2000，中将）**とも，「文革」中失脚・幽閉を強いられた。**楊成武は 1968 年「3.24」の電撃逮捕・解任から 6 年余り，楊勇は 67 年 1 月から 3 年間，鄭は 8 年（～79.2）も自由を失った。9 期 2 中全会の政争に巻き込まれて降ろされた鄭の後任李徳生は，毛から軍の政治工作・首都圏を含む華北の統括が委（ゆだ）ねられ林彪事変の平定でも功労を立てたが，**天子の膝下（ひざもと）の党･政･軍重鎮に付き纏う失墜の危険から身を守り切れなかった。**

2 中全会で政治局・常委会に入り副主席に推された鄧小平も「宮廷派」に負け，翌年 4 月 7 日の政治局会議で毛沢東の提議に由り党内外の全職を解除された。2 日前の清明節（4.5）に 2 中全会初日の 1 年後に逝った周恩来を追悼する大衆運動が起り，反「4 人組」の気勢の高まりに慄（おのの）いた当局は首都民兵を使って鎮圧した。鄧は第 1 次天安門事件の黒幕として追及されたが，**周の他界を中間点に董必武（1975.4.2）・康生（同年 12.16）と朱徳・毛沢東が相継いで世を去り，当初の常委 9 人と主席･副主席計 6 人は共に 1/3 しか残らなかった。**

鄧小平は「文革」否定の態度の所為で毛沢東を失望させ，第 1 副総理から総理への昇任が出来なかった。毛の指名で政治局委員･副総理兼公安部長の華国鋒が総理代理に起用され，鄧は **1953 年の閣僚職責異動の際の周と似て外交のみ分担する様に為った。**1976 年 2 月 2 日の政治局決議は同時に葉剣英に対する権限削減として，軍委の日常業務の統率はその「病気療養」期間中，北京軍区司令陳錫（しゃく）聯（1915～99，上将）に委ねるとした。これで実権を持つ副主席は王洪文だけで，**常委会の実権派も毛・王・張春橋の「左派」ばかりと為った。**

1978 年 11 月 14 日に「革命運動」として名誉が回復された**「4.5 天安門事件」は，実務派の鄧小平・葉剣英の半失脚と「4 人組」の優位に対する不満・恐懼が根底を為した。**毛沢東は均衡を図る様に「4.7」決定で華国鋒を党史上初の第 1 副主席に昇進させたが，**華は「強制冬眠」中の葉，第 9 期政治局委員候補から第 10 期委員に昇格した汪東興と手を組んで，現存の委員 16 人中 1/4 を占める「4 人組」を一網打尽にした。毛沢東時代の終焉を意味するこの「宮廷政変」に由り，当初の政治局委員は 10 人の物故・失脚で 47.6%減と為った。**

林彪事変の打撃で相当応（こた）えた毛沢東は「4.5 運動」鎮圧･鄧小平解任で更に寿命が縮まり，新西蘭（ニュー･ジーランド）首相マルドゥーン（1921～92）・新嘉坡（シンガポール）首相李光耀（リークアンユー）（1923～2015）・巴基斯坦（パキスタン）首相ブットー（1928～79）との会見（4.30，5.12・27）は，体力低下の深刻化で 30 分→ 20 分

→10分と次第に短くなり，**肘掛け椅子の背に頭を靠せ掛け散り紙で口を拭う憐れな姿は報道映画で国民に不吉な予感を与えた**。6月初めに心筋梗塞で倒れた後15日に中央は今後外賓と会見しないと通告し，**本人と党に由る人生の終りの為の活動が本格化・加速化した**。

毛沢東は「中央文革」成立10周年の前日の会見が最後と為ったが，相手国はキッシンジャー秘密訪中（1971.7.9～11）の隠蔽工作に協力し，直後の林彪墜落死の特別機を提供した国で，その**終止符には地政学的な因縁が感じられる**。巴基斯坦が1970年に英国製の三叉戟4機を中国に渡したのは，同年の水害で受けた無利息借款に対する実物償還の一部である。時の大統領ヤヒヤー・ハーン（1917～80, 69.3.25～71.12.20在任）は，陸軍総司令官（上将）・戒厳軍司令官として政権を握り，**同時期の中国の準軍事管制体制と体質が合っていた**。

ヤヒヤー・ハーンは孟加拉独立（1971.3.26）に対する弾圧の失敗後に辞任し，彼を軟禁した新大統領兼戒厳軍司令官ブットーは印度との和解を進めつつ，中国の協力を取り付けて印度に次ぐ世界7番目の核実験成功（98.5.28）を導いた。戒厳令解除・新憲法実施を遂げた彼は首相に転任し（1972.8.10），後に軍事政変で逮捕され（77.7.5），政敵暗殺の罪名で死刑判決を受け（78.3.18），**国際社会の死刑回避の圧力に関らず**79年4月4日に絞首刑に処されたが，**毛沢東と最後に会った外賓の末路は「文革」の結末と重なる死臭が漂った**。

そのズルフィカール・アリー・ブットーの娘ベーナズィール・ブットー（1953～2007）は，彼の入獄中の自宅軟禁と後の英国での亡命を経て，父親が創設した巴基斯坦人民党（67.11.30結成）の党首を継いだ。ハク大統領（1924～88，78.9.16～88.8.17在任，陸軍大将）の飛行機事故死後，10年ぶりの選挙で単独与党の座を勝ち取り，イスラム諸国に於ける最年少且つ初の女性の政府首脳と為ったが，汚職に由る首相解任を2度受け，政界復帰を目指す帰国遊説中の12月27日に，2回目の暗殺で命を落し**父親並みの悲運を辿った**。

毛沢東が「4.5事件」後に会った4人の外賓の最初（4.20）は埃及副大統領ムバーラク（1928～　）で，中国の援助に就いて話し合った事は**同じ途上国に対する援助への執念**を窺わせる。相手は後に埃及亜拉伯共和国（1971.9.1発足）第2代大統領（81.10.14～2011.2.11）と為り，30年の強権統治の末に亜拉伯世界の初の自由選挙の実現に至る革命で辞任し，6月2日に示威行進隊への鎮圧と不正蓄財で終身刑を宣告された（裁判の行り直しで17年3月2日に無罪判決が確定）が，**中共の専制は「亜拉伯の春」の10倍の反抗力でも覆るまい**。

巴基斯坦イスラム共和国（1956.2.29成立）第6代大統領ハクは，閲兵式へ赴く際に米大使等と共に遭難したが，埃及共和国（53.6.18建国）第3代大統領・亜拉伯連合共和国（58.2.1樹立）第2代大統領・埃及亜拉伯共和国初代大統領のサダト（1918～81）は，第4次中東戦争（73.10.6～23）開戦8周年の戦勝記念日の閲兵式で，イスラム復興主義過激派の砲兵中尉（26）に射殺された。玖馬大使を含む11人の死亡と副大統領等38人の負傷を齎した惨禍は，巴基斯坦の要人変死と共に**毛沢東が積極的に関った国の「高危」**を体現した。

巴基斯坦イスラム共和国発足の年に独立した突尼斯の「茉莉花革命」（2010.12.18～11.1.14）に次いで，埃及で「1.25示威」に端を発した民主化運動も18日間で勝利を収めた。30年前の1月25日の林彪・江青集団裁判の結審は同じ歴史の清算でも関係が無いが，第4次中東戦争勃発とサダト暗殺の「10.6」は両者の間の1976年の「4人組」逮捕の日である。**中国の重要な出来事は可く海外と様々な「時縁」を持つ**が，小ブットー生誕の6日前と埃及共和国成立の3日前の**習近平出生の日は，**23歳と為る**「文革」末年の隠れた節目**である。

孫文逝去（1925.3.12）の16日前に遺言が作成され，政治関係の第1部分は汪精衛か戴季陶（1891～1949，中執委常委・中宣部長）が起草し（呉稚暉［1865～1953，開国元老］説も有る），前日に本人と立会人9名が署名した。蒋介石は広東軍に在籍中の1920年から遺書を9回認め，76年3月29日に秦孝儀（1921～2007，党副秘書長・中央文宣組副組長等歴任）代筆の口述遺言を用意し，自署が無い儘4月5日に逝った。**形式や死への直面を忌み嫌う毛沢東は遺書も遺言も無いが，「終活」の点睛と為る「6.15遺訓」がそれに当る。**

蒋介石は1969年9月16日に某師団長の乗用車の無謀運転に遭って緊急回避の際に負傷し，後遺症で弱って行く中で71年12月23日に最後の自筆遺書を書き，「今後の政府組織：一，家淦を以て総統を継がせる。二，経国を以て行政院長兼三軍の総指揮に任ずる。三，党務は集団指導をす可し」と**後任人事を定めた**。「副総統」厳家淦（1905～93）を補佐する形で翌年6月1日に息子を行政院（最高行政機関）院長に指名し，**「蒋家王朝」の継承の布石の結果，死後に厳の昇格と経国の党首・軍統帥就任を経て3年後の経国総統誕生に至った。**

蒋介石の遺書に署名した7人の証明者は蒋宋美齢・厳家淦・蒋経国を始め，中央政府5院の行政院以下の立法・司法・考試（人事）・監察院の院長が続く。**毛沢東が人生最後の総括を行う時に招集した8人**にも，妻江青（政治局委員）と党中央第1副主席兼総理華国鋒が居たが，王洪文（副主席）・張春橋（同常委）・姚文元（同委員）・汪東興（同）・非中央委員の毛遠新（1941～　，瀋陽軍区政治委員・遼寧省委書記・省革委副主任）・王海容（1938～2017，外交部次官）と合せて，**「宮廷派」に偏る「親信」（側近）重用の傾向が鮮明過ぎる。**

「親信」の字面・語義の通りの親縁や親密な関係に由る信任は，妻及び彼女が頭と為る「4人組」，甥の毛遠新，親戚の王海容に対する毛沢東の態度に可く現れた。毛の上の弟沢民（1896～1943）は新疆省民政庁長の在任中に，42年9月17日に陳潭秋等と一緒に盛世才に逮捕され翌年9月27日に処刑され，4男（第5子）遠新は**毛の愛護で年齢・経歴に不相応の軍・政要職を得た。**王海容は**毛の従兄**（母親の姉の息子）**に当る祖父季範**（1885～72）**の縁故**で，70年に外交部礼賓司（儀典局）の責任者と為り**順風満帆の出世**を始めた。

毛遠新は1960年秋に清華大学無線電学部に進み，翌年2月に哈爾濱軍事工程学院誘導弾工程学部に転入し，軍・政界の登龍門を出てから毛沢東の意向で空軍に入った。伯父が付けた愛称「小豆豆」（豆ちゃん）は林彪の次女（第2子）の幼名「豆豆」と一緒で，その林立

衡（1944～　）も清華大学電子工程学部→北京大学中文（中国言語文学）学部の転学を経て，空軍に配属され「文革」中『空軍報』副編集長に昇った。**開国元勲の子女の出世進路（コース）の高度集中**が現れる様に，長女林暁霖も1961年に同年齢の毛遠新と同じ学部に転入した。

毛沢東の長男岸英（1922～1950）は志願軍総司令部の参謀兼露西亜（ロシア）語通訳として朝鮮に行き，参戦1ヵ月後の11月25日に米軍の空爆で散った。次男岸青（1923～2007）の精神病で蔣介石や金日成の様な男児の後継が出来ない彼は，息子を軍内で「天才」として持ち上げた林彪に苛立（いらだ）ち，息子代りの甥に全幅の信頼を寄せて1975年10月10日から政治局との間の非公式連絡係にした。彼は「任人唯賢」（任命は唯才覚に由る）を唱え「任人唯親」（任用は唯縁故に由る）を戒めたが，最晩年の同連絡係の1人は縁故者の王海容である。

華国鋒は毛沢東の隠し子だから後任に選ばれたという根拠の乏しい風説も有るが，**奇異な大抜擢を血縁に理由を求める事は封建王朝の世襲制度や，親縁等の「親信（そっきん）」で周囲を固めた毛の末期（まつご）の在り方にも由来する**。彼が後事を託した8人衆の頭の華は建国初期の湘潭県委・地委書記で，「文革」中の湖南省委第1書記も務めたので毛の故郷の首長に当る。毛は末年の夏に故郷の韶山（しょう）での静養を望んだが，**「葉落帰根」（葉は落ちて根に帰る）という伝統に基づく気持**と通じて，華に**郷愁（きょうしゅう）じみた地縁的な懐かしさ**を覚えていた可能性が有ろう。

「8大」選出の中央委員97人の内に湖南出身者は30人（30.9%）も居り，毛沢東・劉少奇・彭徳懐の故郷が其々数十㌔だけ離れている密集ぶりが示す様に，**党・軍の草創期の元勲輩出・蜂起多発・根拠地遍在に由る空前絶後の突出**を呈した。**元帥・大将各10人の全員と上将56人中11人の当選で将帥は32%も占め，期末に至る13年中の追加当選者18人の内8人が上将，3人が中将**である。**「先軍党国」の性質を端的に現した平時の高い比率**と対照的に，**「6.15」会合の出席者は「文革・宮廷派」の文官が殆ど**で軍人は汪東興しか居ない。

軍委辨事組の成立時（1967.8.17）の呉法憲（組長）と葉群・邱会作・張秀川（1917～2005，海軍副政治委員，少将）は，全て林彪が率いた第4野戦軍の出身者である。2代目組長楊成武の失脚後に黄永勝組長・呉副組長＋葉・李作鵬・邱の改組案が上がり，毛沢東が劉賢権（1914～92，青海省軍区司令・省革委主任，少将）を追加したが，全員「4野」系列に属する。9期1中全会で決った新体制の10人の内，「4野」閥は新入りの温玉成・李天祐（1914～70，副総参謀長，上将）も含めて8人と為り，**軍でも顕著な1極集中の傾向**を顕にした。

呉法憲は軍委辨事組第1回会議で有（う）頂天の余り，皆（みんな）4野の仲間だから門（ドア）を閉めて言い放題だと軽口を叩いた。林彪は後に聞いて「君は死にたいのか」と叱ったが，**特定の小集団の集権に対する毛沢東の警戒は本当に彼等を死地に追い詰めた**。毛も9期2中全会で一方的に「宮廷派」の肩を持ち，**「文革」末期に排他的な私党を結んだ観が有る**。「6.15」の招集対象から非「宮廷派」の要人は大体外れたが，皮肉な事に**8人は一枚岩ではなく内の2人が103日後に宮廷政変を起し，毛の遺訓は欠席の葉剣英の政変後の講話に由って公表された**。

中共中央文献研究室編，逄先知・馮蕙主編『毛沢東年譜（一九四九――一九七六）』（6巻，中央文献出版社，2013）の「1976年　八十二歳」の部に，「**6月**　中南海の遊泳池居所で華国鋒・王洪文・張春橋・汪東興等と談話。毛沢東曰く，私は一生で2つの事をした；1つは蔣介石を打倒し，蔣介石を台湾に追い遣り，日本帝国主義との戦争に勝ち，日本帝国主義を中国から追い払った事だ；もう1つは勝利の内に無産階級文化大革命を行った事だ」と有るが，葉剣英の講話（中央工作会議，77.3.22）に拠る記述は**官製史書の修飾**を感じさせる。

毛沢東は1955年に専用の水泳用蓄水池を作り，初訪中のフルシチョフとの会談（58.8.1）もその傍と中で行った。「文革」初期の帰京（1966.7.18）後10年住み続けた居宅は通称「遊泳池」で，官製年譜に出た其処での初会合はソ連首領に遊泳力を誇示した8年後の8月1日，8期10中全会開会の夜に周恩来等を呼んで清華大学「文革」の方向転換を指示した事である。全会での劉少奇への「砲撃」（8.5）に向けた作戦会議は歴史を動かしたが，10年後の**「6.15」会合は毛が出る最後の集い**と為り，**影響力の無い「生前お別れ会」**と言えよう。

上記の毛沢東回顧の中の「戦勝了日本帝国主義，把日本帝国主義赶出中国」は，非公式の言論で通常「日本人」と言う処を2回も「日本帝国主義」と記すのが**作為的**である。「文革」の全称を使う「勝利地進行了無産階級文化大革命」も**『人民日報』社説調**で，**「勝利」の評価も含めて華国鋒時代初期の「文革」肯定に合せた粉飾**と見て可い。但し脚注では**公式発表の不足**を補うかの様に，「一生做了両件事情」の件に就いて「曾て一部の書物で流行った説」として，**毛の風格が生き生きとし迫力が犇々と伝わる長い述懐**（233字）を掲載している。

> 人生七十古来稀と言うが，儂は80余りと為った。人は歳を取ると，後の事を考えたくなる。中国の古い言葉に「棺を覆いて論定まる」と有る。儂は未だ棺を覆われていないが，もう直ぐになるから，評価を定めても可かろう！儂は一生で2つの事をした。1つは蔣介石と数十年戦って，奴を幾つかの島に追い遣った。抗日戦争8年で，日本人に国に帰って貰った。北京に攻め込み，やっと紫禁城に入った。此等の事に異論が有る人は多くなく，精々何人かが儂の耳元でクチャクチャ言い，早くあの島々を取り戻すよう急かしているだけだ。もう1つは君たちが知っている通り，「文化大革命」を発動した事だ。この事を擁護する人は多くなく，反対する人は少なくない。この2つの事は終っていないし，この遺産は次の世代に引き渡さなければならない。どう渡すのか。平和的な引き渡しが出来なければ，動乱の中で引き渡す事に為る。下手をすれば，後世はどう為るか。血の雨が降り腥い風が吹く様に為って了う。君たちはどうするのか。天のみぞ知るだ，と。

上述の説に関する本書編者の調査では「档案」（公文書）の依拠や，他の権威有る第1次資料は見当らない，と断った上での引用は**信憑性や意義**を示唆する。「6.15」講話は馬斉彬

編著『中国共産党執政四十年（1949―1989）』（中共党史資料出版社，1989）が早期出処と為り，当該部分の執筆者王年一（1932～2007，解放軍国防大学教員［中共党史］）は「文革」史の権威者で，当局の検閲を経て中央党史研究室所轄（かつ）の出版社から刊行されたので，出処の未記載に関らず長らく信じられて来たが，習近平時代に内外から懐疑･否定の声が上がった。

その主な論点として，①会合は公式記録に無く日付も特定できない，②王海容はその前に毛沢東の信頼を失い，政治局との連絡係も毛遠新に取って代えられたので，出席する立場には無かった，③言語障害に陥って久しい毛が心筋梗塞の後に言葉を沢山発したとは信じ難い，④「文革」に対する悲観的な見方は公表済みの数ヵ月前の見解とは異なる，等と有る。華国鋒は1993年にその話を否定したという李海文（1943～　，中央文献研究室研究員）証言も出たので，**専門家の著書でも流布して来た遺訓の真偽に疑念が付くのは当然**である。

逐日記録を基とする年譜では最晩年の活動減少で空白も多いが，同月の例外的な会合の日の未記載は確かに腑に落ちない。但し中共党史研究室主任・中国社会科学院院長・全国政協会議副主席を歴任した胡縄（じょう）（1918～2000）の「6.13」説（93年発言）も有り，記載された以上には創作とは思えない。疎遠中の王海容の出席は事実誤認かも知れないが，脇役の出欠は会合の有無とは別問題である。公式見解との乖離は内輪で吐露した弱気と解釈でき，華国鋒の生前の否定も傍証が無く決め手に為らないので，**発語困難の状況こそ吟味に値する**。

毛沢東は難病の筋萎縮性側索硬化症（A L S）等に侵されて最晩年に明瞭（りょう）な発声が出来ず，**意思疎通は筆談か生活秘書張玉鳳（ほう）（1945～　）の通訳を介して行うしか無かった**。官製年譜の1976年6月の日付付きの最後の記述は25日の華国鋒との話し合いで，その際に紙に書いた「国内問題要注意」は**存命中の最後の自筆の言葉**と為った。26年前の「6.25」朝鮮戦争勃発後の気力充実と比べて年波（としなみ）の非情を感じるが，**最後の公務**と為る「唐山・豊南一帯の震災救助に関する中央通達」の閲覧･許可は，**第1回紅衛兵接見10周年の「8.18」に巡り合せた**。

王年一は『大動乱の年代』（河南人民出版社，1988）で始めて「政治遺嘱」を記し，時期を1月13日か6月15日とした。華国鋒の最高指導部入り前の「1.13」は明らかな誤謬（びゅう）で，中宣部許可の1996年版では「6.15」の可能性が大きいと説明され，歿後の国家新聞出版総署許可の人民出版社2009年版で削除された。師団長級・教授格の彼の**命日「9.13」は林彪事変36周年**に当り，10年後に**王海容は毛沢東生誕123周年の日に逝き**，別の「史縁」として**中央文献研究室・中央文献出版社は林の旧居**（西四北大街前毛家湾1号）**に在る**。

官製年譜で葉剣英を除く政治局常委と汪東興の出席が挙げられたのは，「4人組」と毛遠新･王海容（？）の同席を隠す意図も有ろう。その**不都合な真実と並ぶ不格好（ぶ）な事実**として，張玉鳳も居ないと毛の放談は有り得なかった。胡縄は『人民日報』1993年12月17日所載の追悼文でその病床（しょう）談話は恐らく8～9割の信憑性が有るとし，9日後の生誕100周年の毛沢東思想・生涯研討会（シンポジウム）で文中の「4.30」を「6.13」に改め，更に詳細な引用・論説を展開

した。翻(ひるがえ)って思えば，**毛の頭脳が尚明晰(なおせき)だったので張の助力で全く不可能とも断じ得ない。**

香港の「文革」史学者余汝(じょ)信（195?～　）等はその胡縄の歴史学者らしくない態度や，中央文献研究室編『毛沢東伝（1949―1976）』の出処不備の引用を鋭く指摘したが，「假作真時真亦假，無為有時処還無」（仮(か)の真に作(な)る時真も亦(また)假，無の有と為る処(ところ)有も還(また)無）という，毛沢東が愛読した長篇小説『紅楼夢』（曹雪芹(きん)［1715 頃～63 頃］著・高鶚(がく)［1738～1815 頃］続か，乾隆年間［1736～96］成立）の中の対聯を思い起す。**真偽を見分ける確証が無い場合の通説・俗説は仮(かり)に真理や示唆を含むなら，真実を発見・思索する手掛りには為れよう。**

官製年譜の脚注引用中の「打進北京，総算進了紫禁城」は『大動乱の年代』に見え，『中国共産党執政四十年』で消えたのは紫禁城入りを念願していたとの誤解を避ける為か。**北京攻略後の毛沢東は多くの帝王や袁世凱が住んだ中南海に居を構(かま)える事に抵抗し，滅亡の歴史を忌避する心理からか紫禁城の故宮に行きたがらなかった。紫禁城の部屋数 9 371 は奇しくも毛の生年と林彪事変の西暦年の下 2 桁の組み合せ**であるが，**北京建都の 500 年後に北京大学教授を党首とする中共が成立したのも，古都と現代を繋げる「史縁・時縁」**である。

『大動乱の年代』『中国共産党執政四十年』共通の「6.15」開催説は裏付けが無いが，この文脈では**建国後「頂上政争元年」に生れた習近平の誕生日と重なって天意を感じさせる。**胡縄の「6.13」説より 2 日遅い故**「4 人組」逮捕の「10.6」までは 103 日**と為り，俗称**「百日維新」の戊戌(ぼじゅつ)変法（1898.6.1～9.21）の日数と一致する。清末の改革派の急激な変革が守旧派の武力弾圧で失敗した悲劇と違って，毛沢東死後の「宮廷派」失脚は停滞・後退から脱却する進歩**であるが，**中南海で政変が起き制覇を夢見る敗者が短命に終った処は似通う。**

「文革」を擁護する者は多くなく反対する者は少なくないという毛沢東の洞察の通り，「文革」主力の「4 人組」は彼の死後 1 ヵ月も持たなかった。毛遠新は一味として同日に逮捕され 10 年後の軍事法廷裁判で懲役 17 年を言い渡され，王海容は「宮廷派」の属性に由って直ぐ停職謹慎と為り査問を 2 年間受けた。**毛が将来を託した 8 人の内 6 人（3/4）が一遍に吹っ飛んで了(しま)ったが，即日に党中央・軍委主席に推戴され 3 中全会（1977.7.16～21）で追認された華国鋒も，同じ功臣の汪東興と共に毛時代の負の遺産として後に失脚した。**

毛沢東が 1965 年 11 月 10 日に中央辦公庁主任を更迭したのは，全党に対する制御・指令の枢要を一手に掌握する為である。都市・農村の社会主義教育運動を討議する中央工作会議（12.15～28）の期間中，彼は見解の相違で劉少奇と対立し両者の不和を初めて公にした。閉会日に劉派の見方を反映した中央名義の 17 条方針が採択されたが，31 日に中央辦公庁が突如各地に文書の破棄と会議の再招集を通達した。**毛の意の儘に動く中辦の指図で中央の決定も覆され**，1 月 6～14 日に続行した会議で毛主導の「23 条」文書が生み出された。

毛沢東に忠誠を尽した汪東興が江青等を逮捕したのは**旧主に背く行動**であるが，**党・国を救う功績**で次期副主席と為ったのも想定外に違い無い。毛が指名した後継者の華国鋒と

毛の最側近の彼は**毛の路線の堅持に固執した**為，11 期 2 中全会で全職が復帰した鄧小平と 3 中総会で副主席に就任した陳云等の批判を招き，5 中全会（1980.2.23～29）で華派の汪・紀登奎（副総理）・呉徳（1913～95，全人代副委員長）・陳錫聯と共に要職辞任に追い込まれ，9 回に亘る政治局拡大会議（11.10～12.5）で問責された華は辞意を表し実権を失った。

華国鋒に先立って落馬した「新 4 人組」は，共に**首都の要職が与えられた毛の寵臣**である。汪東興は江西省副省長への左遷（1958～60）を除いて中央警備の責任者であり続け，紀登奎は 28 歳時の河南省許昌地区党委副書記の在任中に毛の知遇を得て，第 9 期政治局委員候補・第 10 期委員へと出世し，林彪事変の前後に軍委指導部成員と北京軍区第 1 政治委員を務めた。第 10 期で政治局入りした呉徳も北京市委第 1 書記・市革委主任・北京軍区第 1 政委と為ったが，同軍区司令の陳錫聯の結末も**「京官」（在京高官）の危険性**を体現した。

同期政治局委員の陳永貴（1915～86）は毛沢東が**労農連盟の理想郷（ユートピア）を夢見て**，山西省昔陽県大寨村生産大隊党支部書記から抜擢し副総理に任命した男である。陝西省咸陽市の紡績女工から第 10 期政治局委員候補に選ばれた呉桂賢（1938～　）も，同じ第 4 期全人代第 1 次会議（75.1.13～17）で副総理と為った。**荒唐無稽の人事の重責に耐えられず**呉は次期中央委員当選の翌月（1977.9）に辞任し，陳も 80 年 9 月に同職を辞した。第 11 期政治局委員の初代 23 人は結局 6 人（26.1％）が権力を手放したが，**粛清でない点は新時代らしい**。

11 期 3 中全会では政治局委員に陳雲・鄧穎超（えい）（1904～92，全人代副委員長，周恩来夫人）・胡耀邦（中央組織部長）・王震（1908～93，副総理，上将）が追加選出され，陳・鄧・胡は中央紀律検査委員会の初代第 1・第 2・第 3 書記と為った。5 中全会では胡と華国鋒の後任総理（1980.9～87.11）・政治局委員候補趙紫陽（1919～2005）が中常委入りし，胡は復活した書記処の総書記に就任した。6 中全会（1981.6.27～29）では華国鋒は中央・軍委の両主席を正式に辞任し党副主席に降格し，胡・鄧小平が其々継ぎ**華時代に終止符を打った**。

変種――「民主生活会」の表裏と「中央文革」の畸（き）形

「12 大」（1982.9.1～11）の直後の 1 中全会（12～13）で，胡耀邦は主席制の廃止に伴って党首と為る中央総書記に選出された。胡・葉剣英（第 11 期副主席，以下同じ）・鄧小平・趙紫陽・李先念・陳雲から成る政治局常委会は，葉の死去（1986.10.22）後**6 年ぶりに政争に由る「非正常辞任」劇が起きた。鄧は胡の「資産階級自由化」に対する「軟弱」な態度を容認せず更迭を決断し，胡は翌年 1 月 10～15 日の指導部「生活会」（批判・自己批判を行う党の責任者の会合）で糾弾され，総書記の辞任をさせられ政治局拡大会議で決定された。**

「党内民主生活会」は 1962 年の中央拡大工作会議（1.11～2.7）の後，鄧小平の首唱と劉少奇の賛同，毛沢東の了解で発足した制度である。1959 年春からの**「3 年国民経済困難時期」**

に農業の不振に由る餓死者が千万人単位で出た中，党史上最大規模の「7千人大会」で各地・各部門の党責任者から経済失政への不満が噴出し，毛は珍しく自らの誤りを謝り党内民主の不足を反省した。その背景の下で生れた定例「生活会」の仕組みは，各級（クラス）の党委の成員の相互監督を促すのが宗旨であるが，「批判会」「闘争会」に変形して了（しま）う事も有る。

農業の低迷はフルシチョフ失脚の引金と為った様に深刻な問題で，建国後の毛沢東の威信が1度だけ低下したのも「3年困難」の末期である。「7千人大会」で彭真は毛の誤りを指摘し，主席の百分，千分の1の誤りも反省しないなら，党に劣悪な影響を与える事に為ると直言した。劉少奇も初夏に毛に対し，こんなに沢山の人が餓死し，人が人を食う事態まで起きたから，歴史に貴方と私（の失政）は書かれるよと詰（なじ）った。**毛が秋の8期10中全会で階級闘争を強調し習仲勳を粛清したのは，権力失墜を防ぐ梃（てこ）入れと巻き返しに他ならない。**

毛沢東は2年後の11月10日に輿論・人事の両面で劉少奇打倒の「偸襲（ふいうち）」を仕掛け，北京市副市長呉晗に対する上海発の非難は首都長官をも標的とし，彭真は半年後「反党集団」の首領にされ「7千人大会」での諫言の代償を払わされた。中央辦公庁主任の更迭で実務運営の司令塔を掌握した後に中央工作会議を行（や）り直し，1月6〜14日の短期間で劉派を劣位に抑え毛に対する劉の謝罪を引き出した。朱徳・賀龍等から毛への尊重を要請された劉は，13日の「党内生活会」で自己批判を行い，工作会議終了後に毛の処に出向いて謝（あやま）った。

「生活会」に参加した王任重（1917〜92，中南局第1書記兼湖北省党委第1書記・中央委員候補）は，「忘れ難い一日」と題する日記に，「党の領袖が彼等の指導下の幹部たちと一緒に生活会を開き，批判と自己批判を行うのは，全世界の（革命）党の歴史上でも稀に見る事だ」と書いた。宣伝工作に長ける彼は建国前「華北第一才子」と毛沢東に褒められ，後に中央宣伝部長（1980.3〜82.4）を務めたが，**劉少奇を複数の領袖の1人と表す処は「中共文法・表現」の規範から外れており，自分を厚く信頼する毛に近いだけ劉の威勢を窺わせる。**

金正日訃報の「全ての党員・人民軍将兵・人民に告げる」と毛沢東訃報の「告全党・全軍・全国各族人民書」の題に，**単一民族国家と56の民族から成る国家の違い**が現れている。**多民族の坩堝（るつぼ）の故に「合衆」統治の求心力が求められる事も多く**，国民党は抗日戦争の初期から共産党の擡頭を警戒して，「一個政党，一個主義，一個領袖，一個軍隊」と唱えた。その**独裁体制を倒した中共も執政・思想・領袖・軍隊の専制へと傾（かたむ）き**，国家主席と為った劉少奇は毛と並び立つ印象を避ける為に，身辺の係員（スタッフ）から「主席」と呼ばれる事さえ憚（はばか）った。

劉少奇が招集した「生活会」の出席者は，中央の周恩来・鄧小平・彭真・賀龍・陳毅・羅瑞卿・陳伯達・謝富治の他，李井泉（1909〜89，西南局第1書記）・李雪峰・劉瀾涛（1910〜97，西北局第1書記・全国政協副主席）・宋任窮（1909〜2005，東北局第1書記，上将）・王任重・魏文伯（1905〜87，華東局書記）・李葆華（1909〜2005，安徽省委第1書記）・譚啓龍（1913〜2003，山東省委第1書記）も居た。周・謝を除く15人は「文革」中失脚し，

謝は「文革」推進の罪で死後の1980年に処罰されたので，**無傷率は僅か5.9%**に過ぎない。

2年後の1月13日に劉少奇は懇願が通って漸く毛沢東との面会が出来，その席で多くの幹部・大衆を保護し「文革」を早く終結する為に，党中央副主席・国家主席・毛沢東著作編輯委員会主任等の職を辞して，一家で延安に行って農耕生活を送りたいと申し出た。毛は諾否をせず左右を顧みて他を言い最後に健康を祈ったが，安堵（と）した劉はこれが**両者の永訣**である事を夢にも思わなかった。**昔の中共軍の雌伏（しふく）・再起の地を終（つい）の棲（す）み処（か）にしたい考えは毛の警戒を招く恐れが有るが，未だ身の危険を察知しなかったから言い出したのであろう。**

20年後の同じ時期の「民主生活会」は初心（うぶ）な胡耀邦の予想を超えて，彼を追い落す決定打の吊（つる）し上げと「元老院裁判」に為った。中央顧問委員会（第12期中央と共に発足，主任＝鄧小平）が主催する会合で，筆頭副主任薄一波が数時間に及ぶ胡への批判を喋（しゃべ）り捲（まく）り，大多数の参加者は各々の動機で附合又は便乗し，**「文革」的な「批（判）闘（争）」の白熱**で胡は参った。鄧は華国鋒時代に胡の熱意・能力を利用して「文革」・華を否定し，薄は胡の尽力で自由・名誉が回復されたのに，**公私倶に理不尽な仕打ち**は胡には到底承服し難い。

王鶴寿（1909～99，元重工業相・冶金工業相，中紀委第2書記）は胡耀邦の親友で，『三国志演義』の故事に因んで「桃園三結義」の仲と言われたが，その場で胡は眼中に中央無し，鄧小平・陳雲を蔑ろしている等と誹った。**習仲勳は唯1人「逼宮」（君主に対する権力譲渡の強要）に抗議したが，無防備に攻撃・裏切りに打ちのめされた胡は傷心の余り，散会後に外の階段に坐り込んで号泣した。**1月2日に書かされた辞表が承認された後，長らく自宅に籠（こも）って憂鬱（ゆううつ）に陥り，1989年4月8日の政治局会議で心臓発作が起り15日に生涯を閉じた。

胡耀邦は毛沢東讃歌「瀏陽河」の舞台の湖南省瀏陽県で生れ育ち，鄧小平院政の「八老」群の中の王震・宋任窮も同県の出身である。胡が香港の報道人に王との対立を吐露した事は怒りを買い，王がその無邪気な談話を鄧に告げ**失脚の導火線**と為った。胡の同郷・従兄（胡の母親の姉妹の子［年長］）・学友の楊勇は「文革」中，造反派から何日も眠らせない尋問を受けた時に，憤然と紙に「煮豆燃豆箕，豆在釜中泣。本是同根生，相煎何太急！」と書いて抗議したが，**「民主生活」の名を冠した党内闘争での「同県生」の「相煎」は真（まこと）に悲しい。**

「生活会」で最も激しく胡耀邦を非難した薄一波と鄧力群（1915～2015，書記処書記）は，**恩知らず又は理に反する輩（やから）**として遺族から追悼会（4.22）への出席を拒否された。異名「左王」の理論家鄧を後任総書記に推す動きが出た中で，李鋭（1917～2019，中央委員，毛沢東の秘書・中央組織部副部長歴任）が鄧小平に投書し，延安整風の時に自分の妻を寝取った彼の品性不良を告発した。最高実力者の裁断に由り鄧力群は解職され，13期1中全会（1987.11.2）で趙紫陽が順当に総書記と為ったが，趙はその座に1年半しか坐れなかった。

周恩来死後の大衆の痛惜・鬱憤（うっぷん）の爆発をなぞる様に，胡耀邦の死を悼む学生・民衆が民主化運動を起した。当局に矛先を向け小規模の衝突が生じる中で，朝鮮人民革命軍創建57

周年（4.25）に巡り合せた趙紫陽訪朝（24～29）の隙に，保守派は『人民日報』の「4.26」社説で「動乱に反対せよ」と呼び掛けた。そこで激化した群衆の反撥は天安門広場の占拠・断食示威（ハンガー・ストライキ）に発展し，ソ連の最高指導者ゴルバチョフ（1931～　）の和解の為の訪中（5.15～17）に至っても収まらず，**指導部内の改革派・保守派の対立と絡（から）んで事態が深刻化した。**

5 月 16 日夜の政治局常委会で「4.26 社説」の修正の必要性に関する意見は物別れと為り，翌日に 5 常委は鄧小平邸に呼び付けられ**鄧の主導で戒厳令の当否を審議した。**趙紫陽・胡啓立（1929～　，書記処常務書記）が反対，李鵬（1928～　，総理）・姚依林（1917～94，常務副総理）が賛成，喬石（1924～2015，書記処書記・中央政法委員会書記）が中立の状況下，同席の楊尚昆（国家主席・趙に次ぐ軍委副主席）が賛意を表し，**13 期 1 中全会の秘密決議に由り最終決定権を持つ鄧の判断で，首都の一部地区に於ける戒厳が決められた。**

「文革」発動「5.16」決議の 23 年後に決定された建国後 2 回目の戒厳令は，38 年余りに亘る台湾戒厳令の実施 40 周年（5.20）に敷かれた。趙紫陽は戒厳令を発表する中央・北京市党政軍幹部大会（前夜）に欠席し，代りに楊尚昆が中央を代表して講話を行った。楊は 24 年半前の中央辦公庁主任罷免の後に広東省委書記処書記に左遷され，5 月 22・28 日に同省肇（ちょう）慶地区委員会副書記・山西省臨汾（ふん）地委副書記に降格・転出され，7 月 3 日から 12 年に及ぶ「監護審査」を受けたが，**「文革」被害者の復権後の体制維持の意志は建国元勲らしい。**

中央委員を退（しりぞ）いた鄧小平は 17 日に私邸で政治局常委会を招集し，楊尚昆（政治局委員）・薄一波の参加・態度表明を加えて圧力を掛けた。党規約の枠外の内規を用いて裁定した事は，「8 老治国」の超法規性と鉄砲に由って政権が生れ且つ保つ「先軍政治」の証である。鄧は 20 日に自宅で非公式会合を開き趙紫陽の解任を事実上決めたが，中顧委主導の胡耀邦辞任に続いて名目上の党首が立て続けに斬られた。劉少奇・林彪に対する毛沢東の粛清はまだ No.2 に対する党首の処置なので，中央指導部への横槍の結果は流石に常軌を逸した。

趙紫陽に同調した胡啓立の同時失脚に由り常委会の 4 割が崩れ，書記処書記の 4 人は筆頭の彼を始め，3 位の芮杏文（ぜいきょう）（1927～2005）・4 位の閻明復（1931～　，中央統一戦線工作部長）も翌月に解任された。2 位の喬石は常委会の序列では胡より 1 つ上であるが，胡の常務書記は**後任総書記の含みが有るから，その退場は次世代の人事への影響が大きい。**彼の中央辦公庁主任（1982.4～83.6）の後任（～84.4）の喬も，汪東興に次ぐ前任の姚依林（78.12 就任）も中常委に為ったので，**楊尚昆が 45 年 10 月に初代と為った同職の重要性**が分る。

喬石の次（1984.4～86.6）の中辦主任王兆国（1941～　）は，**鄧小平時代の最高指導部への登龍門と為る団中央**の第 1 書記（82.11～84.12）を務めた。2 期前の「団首」（「党首」に擬えた造語）胡耀邦（新民主主義青年団中央書記処筆頭書記［53.7～57.5］・共産主義青年団中央第 1 書記［57.5～66］），後任（～85.11）の胡錦涛（きん）（1942～　）の総書記就任（2002.11～12.11）と対照的に，87 年に福建省委副書記・副省長（翌年省長）に左遷されたが，**「生**

活会」で胡耀邦を裏切った不義理で鄧小平・陳雲の不信を買った失点が大きいと言われる。

「一朝天子一朝臣」（一代毎（ごと）の天子に一代毎の臣下）という熟語の通り，**権力者が交代すれば部下も総替りする事が多い。胡錦涌・習近平の総書記初就任の 47 年前・57 年前の同日（1955.11.15）に，後に 38 年近く単独政権を続ける事に為った日本の自由民主党が結成された。**中共「総書記＝党首」制発足の 1982 年に首相（第 71～73 代，11.27～87.11.6）に就任した中曽根康弘（1918～　）は，自派閥から内閣官房長官を選ぶ慣例を破って政界を驚かせたが，**党幹事長や内閣官房長官に近い中央辦公庁主任も通常は党首の腹心**である。

中辦主任の要と為る位置を端的に示す出来事は楊尚昆解任・汪東興起用の他，47 年後の「18 大」開催の 67 日前の 2012 年 9 月 1 日に，現党首と同じ共青団系列の令計劃（かく）（1956～　，書記処書記）が中央統戦部長に転出（降格）し，次期党首の側近 No.1 栗（りつ）戦書（1950～　，貴州省委書記）が継ぐ異動である。**新党首誕生を伴う中辦主任の交代は党大会の業務を仕切る役目上でも前倒しが変則に為るが，毛沢東の「文革」発動の布石から学んだ手法であるとすれば，令を含む先代「奸臣」の「新 4 人組」に対する習近平の粛清と辻褄（つじつま）が合う。**

栗戦書は第 18 期政治局委員・書記処書記を経て，中辦主任を習近平の長年の秘書長丁薛祥（せつ）（1962～　，第 19 期政治局委員・書記処書記）に継がせると共に，第 19 期政治局常委（李克強総理［1955～　，2013.3.15 就任］に次ぐ序列 3 位）と為り，翌年 3 月 17 日に全人代委員長に選出された。第 18 期から党内序列 2 位と為った李は胡錦涌の次の次の「団首」（1993.5～98.6）で，前任（第 6 代）総理温家宝（1942～　，2003.3.16 就任）は第 16・17 期の党内序列 3 位に在り，王兆国に継ぐ**中辦主任**（～93.3）**が大出世への礎**であった。

趙紫陽の後任総書記は常委の内の 2 位李鵬・3 位喬石・5 位姚依林から選ばれず，政治局委員歴が 1 年半しか無い上海市委書記江沢民（1926～　）が引き上げられた。**鄧小平は毛沢東が政治局委員歴 3 年未満の華国鋒を後継者にしたのと似通って，優れた能力や抜群の実績より現体制への忠誠や無派閥の中性を重んじた様である。**江は懐刀（ふところがたな）の市委副書記曾（そう）慶紅（1939～　）を連れて中央入りし，曾は温家宝の後任中辦主任（～99.3）を経て，第 16 期政治局常委（5 位）・書記処常務書記，国家副主席（2003.3.15 より 5 年）にまで成った。

前任・後任の国家副主席胡錦涌（1998.3.15 就任）・習近平は，1 期で予定通り総書記と成り主席に昇格した。曾慶紅は「17 大」で秘書長を務めながら当該職位の慣例と為る次期最高指導部入りが無く，**5 年前の政争で出来た 68 歳定年の不文律内規**に従って引退した。江沢民系列の彼は**年齢に関らず「脱江」の胡以後の新体制に残り得なかったが，中辦主任は党首に成れないという因縁（ジンクス）の経験則**が感じ取れる。**江・曾時代の政争には権謀術数の暗躍が見られたが，温家宝の中辦主任は胡耀邦・趙紫陽・江沢民 3 代に渡った特異性が目を引く。**

中辦副主任時代の曾慶紅は他者に隙を与えないよう，「14 大」での中央委員会入りを固辞し，其故翌年「13 大」の前年の温家宝と同じ平党員の中辦主任に為った。商務相・内政相

を歴任した父親の曾山（1899～1972）は「文革」の過酷な迫害を余り受けず，胡耀邦等の非主流派が中央から脱落した「9大」で3期目の中央委員に当選した。**毛沢東の保護を得て無傷で済んだ晩節の保全は何らかの形で長男に啓発を与えたのか，敵を作る危険性に対する曾慶紅の回避は功を奏し，国内の政界に於ける「韜光養晦，決不当頭」の好例を作った。**

曾慶紅は初の中央入りで第15期政治局委員候補・書記処書記に選出され，胡耀邦・喬石が1977年12月～翌年同月に務めた中央組織部長（99.3～2002.10）として，**党の人事権を握り肩書以上の支配・影響力を発揮した。**前任の中辦主任温家宝は第13期中央委員・書記処書記候補と為ったが，**7年に亘る「3朝元老」の勤続奉仕は頻繁な党首交代の所為でもある。**唯一の書記候補を為す**書記処書記は戒厳令決定に棄権した喬石を除いて成員が全滅したが，2年半で2人の党首が倒れたのは党史上の異常事態で正に動乱の現れ**と言えよう。

党史上1989年の「政治風波」を上回る書記処書記の失脚率は第8期初代7人の100%で，鄧小平・彭真・王稼祥（中央対外連絡部部長・外交部次官）・譚震林（1902～83，中央副秘書長・副総理）・譚政（1906～88，総政治部第1副主任・国防部次官，大将［5位］）・黄克誠（副総参謀長・総後勤部部長）・李雪峰（中央副秘書長）は，60～70年の間に相継いで打倒された。書記候補の楊尚昆・胡喬木（1912～92，中央宣伝部副部長・中央副秘書長）も，**毛沢東の長年の政治秘書**（41～66）**胡が唯一「文革」中に穏やかな閑居が許された。**

第8期書記処成員は5中全会（1958.5.25）で李富春（1900～75，副総理兼国家計画委員会主任）・李先念（副総理兼財政相）が増補され，8中全会で陸定一・康生・羅瑞卿の増補と黄克誠の解任が決定され，11中全会で彭真・羅瑞卿・陸定一の書記と楊尚昆の書記候補が解除され，謝富治・劉寧一（1907～94，中央対外連絡部部長代行・中華全国総工会（ろうどうくみあい）主席）が書記に充（あ）てられた。11中全会で政治局常委に選ばれた鄧小平・李富春が居る書記処は，僅か半年後に両者及び李先念・劉寧一の失脚で**謝富治だけが権力を保つ**結果と為った。

1967年2月16日の政治局常委「碰頭会（れんらくかいぎ）」で，「文革」中初めての指導部内抗争が勃発した。「4帥3老」の譚震林・陳毅・葉剣英・李富春・李先念・徐向前・聶栄臻と余秋里（1914～99，石油工業相・国家計委第1副主任，中将）等が，中央文革碰（ほう）頭会の陳伯達・康生・張春橋・姚文元・王力（1922～96，中央宣伝組組長）・謝富治等に対して，古参幹部を縦（ほしいまま）に批判闘争に掛ける**過激な迫害に激憤をぶつけた。**会場名に因んだ「大閙懐仁堂」（大いに［中南海］懐仁堂を騒がす）事件は，忽ち「2月逆流」と断罪され**「文革派」の圧勝に終った。**

怒りが収まらない譚震林は張春橋等に詰め寄り，君等の目的は老幹部を全て葬り去る事なのかと糾し，今回の闘争は党史上のどの闘争にも増して最も残酷だと言い切った。自分は共産党に加わる可（べ）きじゃなかった，毛沢東に随（つ）いて革命を行（や）る可（べ）きじゃなかった，65歳まで生きる可（べ）きじゃなかった，と激情に任せて口走った。首を斬られようが，投獄されようが，党から除名されようか，徹底的に戦うぞ，と言う決意には**被害妄想は無い。入党・革命・**

領袖への服従に対する自己否定の明言は，当時は党籍剥奪や監禁にされる程の反逆であった。

張春橋等から大荒れの模様を直訴された毛沢東は，「文革」を延安整風の「左」の誤りの繰り返しとする陳毅の批判に激怒し，19 日に政治局会議を招集して古参組を叱責した。陳毅に中央文革組長に行（や）らせろ！陳伯達・江青は銃殺すれば可（よ）い！王明を呼んで主席に為って貰（もら）え！等と怒鳴り，「文革」が失敗したら林彪と再び井崗山（江西省に在る赤軍の根拠地）に登って遊撃戦を行（や）ると脅かした。**毛に公然と矛を向ける最大の乱は武力を盾とする咆哮（ほうこう）で鎮まり**，譚等は以後 7 回に亘る「政治生活会」（2.25～3.18）で自己批判をさせられた。

毛沢東は多数を握り切れていない政治局・書記処の職能を停止し，「中央文革碰頭（ほう）会」を代替の最高権力機構にした。時の政治局は失脚者と病気休養中の劉伯承を除いて，委員は毛・林彪・周恩来，委員候補は陳伯達・康生しか居なかった。次期政治局常委会を構成する 5 人では党務・国政を担（にな）えないが，周が世話人と為る連絡会議の面々（陳・康・江青・張春橋・王力・関鋒［1918～2005］・戚本禹（う）［1931～2016］・姚文元，列席者＝謝富治・黄永勝・呉法憲・葉群・汪東興・温玉成）は，**「文革派」一色で実務能力が乏しい欠陥**を否めない。

中央文革は「5.16 通知」で政治局常委会直属の「文革」指導機構と規定され，当該決議の起草小組を基に同月 28 日に成立した時 18 人居た。雲南省長・南京大学学長等を歴任した北京市委書記（文教主管）・中国人民大学党委書記兼副学長郭影秋（1909～85）の失脚（7 月末）で 1 人減り，8 月 2 日に顧問として増補された陶鋳を含めて更に 8 人が翌年初めまでに失脚した。副組長 4 人中の王任重・劉志堅（1912～2006，総政治部第 1 副主任・全軍文革小組組長，中将）も倒れたので，**政治闘争を仕切る機関の内部粛清も半端ではない。**

残りの 10 人は 1967 年 5 月の謝鏜（とう）忠（1916～89，総政治部文化部長，少将）失脚に続いて，王力・関鋒が外交部での権力奪取等の過激行為の責任を取る形で 8 月 26 日に拘束され，中央文革辦公室主任（事務長）穆欣（ぼく）（1920～2010，『光明日報』編集長）が 9 月 6 日に拘束され，王・関一味の戚本禹も 68 年 1 月 12 日深夜に拘束された。戚は評論「愛国主義か売国主義か」（『人民日報』1967.4.1）で劉少奇批判の先陣を切ったが，皮肉にも**劉と毛沢東の最後の面会の 1 周年の直前に，王・関と同じ「替罪羊」（贖罪山羊（スケープゴート））に為る結末を迎えた。**

「文革」前の王力は中央対外連絡部副部長・『紅旗』（党中央理論誌）副編集長，関鋒は『紅旗』編集委員・中国哲学組組長，戚本禹は中央辦公庁秘書局副局長で，**思想・哲学・歴史分野の論説で毛沢東に称賛された事が大出世の要因**である。『紅旗』（1958.5.1 創刊）編集長の陳伯達が組長と為る**「中央文革」は，意識形態（イデオロギー）・輿論を重んじる毛の意向に沿う秀才集団の観か強い。毛が 3 人の急先鋒の投獄を命じたのは**「揮涙斬馬謖」（涙を揮（ふる）って馬謖（しょく）を斬る）の様に映るが，蜀の名臣・軍師諸葛亮（かつりょう）（181～234）の故事と違って実は**血も涙も無い。**

戚本禹の妊娠中の妻（中央秘書室勤務）も投獄され，其処で生れ育った息子に「秦城之嬰」（秦城の嬰児）の異名が付いた。共に独房に入れられた関鋒は神経錯乱の末に自分の糞を食

べたが，彼等が受けた虐待は**軍事管制下の特殊牢獄の常態**である。鉄道部副部長劉建章（1910～2008）の同監獄に禁錮中（68.2～72.6）の非道な扱いに就いて，夫人劉淑清（1911～87）が72年7月20日に手紙で毛沢東に訴え，毛は12月中旬の書面訓示で「法西斯」的な尋問方式の廃止を命じたが，**「文革」で頂点に達した独裁体制の恐怖統治に根源が在る。**

公安部の唯一の直属刑務所・拘置所と為る秦城監獄（北京市昌平県）は，第1次国民経済5ヵ年計画の**ソ連援助項目で1960年3月15日に落成した。胡錦涛の国家主席当選・再選（2003・08）の日も「3.15」で，江沢民再選と習近平初就任（1998.3.16，13.3.14）はこれと隣り合う。胡･習時代の交の2012年3月14日に温家宝が「文革」再来の危険を警告し，15日に薄熙来（1949～　）の重慶市委書記が解職された。革命歌推奨・大衆運動推進に見る「文革」思考・志向が強い薄は，皮肉にも翌年から秦城監獄で無期懲役を服している。**

建設責任者の1人である北京市副市長・公安局長馮基平（1911～83）は，罪人を懲らしめる為1室6平方㍍，日光が入らない造りにした。陝西省委常務書記在任中の55歳の誕生日（6.1）に，『人民日報』社説「横掃一切牛鬼蛇神」（全ての妖怪変化を一掃せよ）で造反の狂瀾が起き，彼は同月から**9年間も自縄自縛の如く此処で囚人生活を送った。**彼は1932～35年に国民党の監獄に長らく重い枷を掛けてあったが，今度は獄中で毛沢東・「文革」批判を隠さなかった為，時に両手を後ろに回した儘に手錠を掛ける虐めが4年も施された。

北京市委第2書記・第8期中央委員候補劉仁（1909～73）も30～32年に国民党の監獄に囚われたが，「文革」初期の失脚後68年1月に囚人番号「6803」で秦城監獄に入れられ，**虚偽の供述を断る抵抗への懲罰として数年も手錠を嵌められ続けた。**林彪事変後初めて面会が許され虐待死を見届けた妻甘英（経歴未詳）は，1980年12月23日に江青の誣告・迫害行為を審理する裁判で首席裁判官を務めた。東京裁判後のA級戦犯処刑と同じ日付の巡り合せであるが，テレビに映った彼女の涙は**職務柄を超える精神の創傷の深さ**を示した。

「文革」前の潘漢年・揚帆の囚人番号64・65が示す様に，初期の服役者は2桁で収まる程に少なかったらしい。饒漱石の変則的な0105は元中央要人の特殊性を物語るが，北京衛戍区への移管（1967.11.7）後の呼称番号は変更し，戚本禹・王力・関鋒の6821・6822・6823の様に，西暦年の下2桁＋同年の収監順番の4桁と為った。3人は春節（1.30）後の一斉移送なので年頭以降の高い収監頻度は一目瞭然であるが，「5.1」前後収監の陸定一の68164の1は第1級の重要度を示し，**饒の別格扱いの1･潘の64と重なる符号は如何にも忌々しい。**

陸定一の妻厳慰氷（1918～86）は延安時代から抱いた葉群への不満と，51年12月～52年6月の「三反」（［党員・役人の］汚職・浪費・官僚主義の取締）・「五反」（［資本家の］贈賄・脱税・国有資材の横領・手抜き仕事と材料の誤魔化し・国家経済情報の窃取の取締）運動で誤って追及された事で罹った精神病に由って，60～66年に林彪一家に数十通の匿名手紙を送って人身攻撃と離間を行った。発覚後1966年4月28日に拘束され翌年2月に秦

城監獄に移り78年12月に釈放されたが，**命日の「3.15」には長い投獄の陰影が尾を引く**。

陸定一は「文革」発動を審議する政治局拡大会議で**夫人の怪文書の件で林彪に面罵され**，5月23日に彭真・羅瑞卿・楊尚昆と共に解任された。楊は前日と「中央文革」組成の28日に広東・山西の地委書記に左遷・異動されたが，陸は「厳慰氷反革命事件」と関った嫌疑も有って9月30日に「隔離反省」が発表された。拘置所で「専案組」（特捜班）の査問を受ける間の12月16日に，本日より「無産階級専政（プロレタリア）」の対象と為り，党幹部の待遇を取り消し犯人扱いに変る，と「中央首長」関鋒から宣告され，更に10ヵ月経って正式に逮捕された。

「今天是他的座上賓，明日就成了他階下囚」（今日は彼に招かれて上座に坐る賓客で，明日は彼の［法廷の］階下［で裁かれる立場］の囚人に為る），と林立果等の政変構想は**「迫害狂」毛沢東の豹変ぶり**を表した。彼の71歳の誕生日（1964.12.26）の祝宴に出た劉少奇・羅瑞卿・陶鋳・薄一波等は間も無く打倒され，66年の同じ小宴で「中央文革」の陳伯達・江青・張春橋・王力・関鋒・戚本禹・姚文元を招待したが，**妻を除く6人中の半分に当る王・関・戚を後に投獄し，王・関拘束の命令を受けた楊成武も戚逮捕の翌々月に斬られた。**

「中央文革」は第9期中央指導部の選出に由って自然消滅と為ったが，その時点で生き残った5人（当初成員の27.8%）の内，陳伯達は「9大」政治報告の起草が滞（とどこお）って日程を半月も狂わせた不手際（ふてぎわ）と，2中全会で林彪と結託して張春橋降ろしの主力を担った挙動で，旧主の不興・不信を決定的にし前任No.4の陶鋳の二の舞（まい）を演じた。「9大」開会の予定日は秦城監獄完工日の「3.15」であるが，2中全会の終盤でこっそり拘束され閉会式に出られなかった彼は，奇しくも林彪事変の9月13日に秦城監獄に移送され其処に10年間過した。

残りの4人の内「4人組」逮捕で江青・張春橋・姚文元は抹殺され，康生も11期3中全会で謝富治と共に生前の「文革」罪業を糾弾され，1980年10月16日の中央決定で党籍剥奪・弔辞（中央の公式評価）取消の処分が下された。「中央文革」成員と周恩来を除く「中央文革碰頭（ほう）会」の参加者は，これで全て失脚の経歴が付く事に為る。翌月からの林彪・「4人組」集団裁判と共に「文革」清算の象徴的な出来事であるが，「中国のベリヤ」康と毛沢東の「良犬」謝は冤罪や無辜（こ）の犠牲を作り出したから，否定しなければ天理が許すまい。

毛沢東は第7期中央の組成に就いて張聴天の意見を求める時，前党首夫人で中央秘書処秘書長を務めた劉英（1905～2002）に対し，貴女も「3朝元老」だから考えが有れば言ってくれと訊ねた。劉は沢山の人を殺した鄧発だけは駄目だと物を申し，**粛清で多くの死者を出し衆人の怨念を買った鄧は結局落選した**。翻って，康生は陳伯達の失脚に由って第10期中央で序列が4位に上がったが，**副主席5人の内に周恩来と彼は顧順章一族・関係者殺害の現場で指揮した**ので，**建党50年後も草創期の暴力革命の遺伝子が基本的に変らなかった。**

第5・6位の副主席葉剣英・李徳生は上位の毛沢東・周恩来と同じ軍の出身者で，3位の王洪文も16歳で入隊し朝鮮戦争に従軍した。毛が彼を後継者に育てようと考えたのは貧農

家庭の出身と軍歴，退役後に上海綿紡績工場で労働者・保安係を務めた経歴が要因である。**中共が好む労働者・農民・兵隊の要素を揃えた若い「文革派」に対する期待は毛らしい**が，王は「上海工人革命造反総司令部」（1966.11.9 成立）の議長団成員（後に司令）として，**姚文元の『海瑞罷官』批判論文発表 1 周年の 11 月 10 日に秩序破壊の蛮行の先頭に立った。**

件の集団は市委から得られぬ承認を中央に求める可く北上し，足止めをされた郊外の安亭駅で列車を乗っ取ろうと線路に坐り込んだ。未曾有の京滬（北京―上海）線運行中断 30 時間の事態を収拾する為に，「中央文革」代表の張春橋が談判に臨んだが，自ら書記処書記を務める市委に逆らって相手の要求を呑み，当該組織は合法的，請願は革命的とし，混乱の責任は市委に帰す，という旨の合意書に署名した。**毛沢東の意思を忖度する博打は怪我どころか大当りし，毛は業界に跨る造反組織を認める第 1 号を肯定し張・王を刮目して見た。**

「9 大」第 2 次全体会議（4.14）で政治報告と党規約改正案の採択の他に 9 人が発言し，王洪文は周恩来・陳伯達・康生・黄永勝に次いで登壇し**新星のお披露目を果した**。中央委員に当選した彼は毛沢東の抜擢で「10 大」選挙準備委員会主任と為り，副主任の周・康・葉剣英と共に議長団副主席の人選にも上がった。中央副主席に就任する含みなので核心層への急上昇が反撥を呼び，開会の 3 日前と前日の政治局会議で，許世友（1906～85，南京［江蘇・浙江・上海・安徽・江西］軍区司令・江蘇省革委主任，上将）が公然と異論を唱えた。

毛沢東に「愚忠」（愚直な忠誠）を抱く猛将が敢えて領袖の顔を立てない事は，造反以外に能が無い輩と的外れな後継者選びが余程人心を得ない状況の証である。毛はそれでも王に党規約改正の報告をさせ No.3 の印象を植え付けようとしたが，**僅か 1 年で見込みが無いと悟って育成を断念した**。王は「中央文革」残留組と派閥を結んだ為に毛の死後に逮捕され，4 人とも秦城監獄で不自由な余生を送った。**「筆は剣よりも強し」という西洋の名言は「文革」の現実に適う時も間々有るが，毛時代の頂上政争は全て剣を握る強者の勝ちであった。**

「超限」――「6.4」武力鎮圧と趙紫陽軟禁の「黒白鳥」

「文革」中の古参実権派・林彪集団・「4 人組」の大量失脚や全滅は，何度も党指導部の相当部分の空白や更新を齎したが，胡耀邦・趙紫陽辞任と第 13 期政治局常委・書記処書記の大幅な変動は，平和期の党首の連続更迭と選出後 1 年半での退場の点で「文革」以上の異常さが有る。「第 2 の毛沢東」の感も有る鄧小平が非情に作った非常事態であるが，前任軍委主席に由る「4 人組」逮捕の無血の宮廷政変と対照的に，最高指導者の座に恋々として正常・穏便な禅譲をしなかった故，毛が予言した「血雨腥風」の中の権力譲渡と為った。

胡耀邦追悼会の 13 年前の 1976 年 4 月 22 日，毛沢東は身辺の世話係に新聞記事を読み上げさせ，3 月 8 日に吉林市に世界最大規模の隕石雨が落下したのを聞くと興奮し，諸葛

亮等の故事の様にこれは人が逝く事の前兆で自分は**天人感応を信じる**と言った。石質として史上最高の1 770キロを含む100キロ超の3個の破片は，後に**毛沢東・周恩来・朱徳の死に対応する**と言われ，138の大きな破片と約3千の小さい破片の群れは，唐山（河北省）大地震（7.28，M（マグニチュード）7.5）の**20世紀最多の遭難者**（24万人死亡，16万人負傷）を連想させる。

吉林省に降り注いだ隕石雨は「1.8」「7.6」「9.9」の「巨星墜（お）つ」の暗示と共に，省都長春に生れた「虚星」王洪文の失墜とも暗合する。王洪文は無期懲役服役中の1992年8月3日に肝臓疾患で獄死した（歿年56）が，**自ら指揮した上海最大の「67.8.4武闘」の25周年の前日に当るのは因果応報**の様に思える。**毛沢東の命日も1927年に湖南・江西省界で秋収蜂起を発動し，35年に張国燾の「武力解決」から逃れた日**である。**「3.8」特大隕石雨の不吉は日付にも現れ，1989年のこの日に西藏（チベット）自治区首府拉薩（ラサ）で建国後初の戒厳令が布告された。**

唐山大地震は毛沢東時代末期の悲惨を際立たせた天変地動で，鉱工業が発達する唐山の北緯39度台の位置と人口密集に発生・規模の事由が有る。東日本大震災（2011.3.11，M9）の震源地も38度辺りで，人類史上の死者最多の華県（陝西省）大地震（1556.1.23）の震央は，関東大震災（1923.9.1，M7.9）・阪神大地震（95.1.17，M7.3）と同じ北緯35度一帯だから，北緯35～40度の地震「高危（ハイ・リスク）」が実感させられる。華県大震災の死者数は氏名が確認できた分で83万人に上るが，世紀最多の唐山大地震と共に中国の多難の宿命を物語る。

古都の西安（陝西省都）と洛陽・開封（河南）の北緯34度台は，奈良・京都・東京の34度台・35度・35度台と奇妙に一致する。毛沢東は建国前に首都選びに就いて王稼祥と相談した時，都としての歴史が長くソ連に近い北京が良いという意見に賛同した。**国民党政権の首都南京は短命王朝の都でしかなかった事も忌避の理由に有るが，39度台の北京は震災の危険性が高い。**四川大地震（2008.5.12，M8）の震源の31度は南京の31度と余り変らないが，南京に近い南宋の首都杭州（30度）を含む浙江は20世紀にM6以上の強震が無い。

唐山大地震の8年前の7月28日に毛沢東が首都紅衛兵の「5大領袖」を呼び寄せ，4月23日以来の清華大学での武闘を即刻停止せよと厳命した。理工科の最高学府の2派の造反組織の「百日戦争」で数十人の死傷者が出た後，7月27日に3万人の「労働者・農民毛沢東思想宣伝隊」が校園に入り，動乱制止の為の中央「7.3」「7.24」布告の実行を督（とく）促したが，槍や小銃・手榴（りゅう）弾での抵抗に遭い5人が死亡し731人が怪我した。**徒手空拳の儘に進駐を試みた別働隊の流血で派遣者の毛は激怒し，自ら煽動した紅衛兵運動の終息を決意した。**

清華大学「井崗山兵団」総責任者蒯（かい）大富（1945～　）は**悔恨の余り毛沢東の懐に飛び込んで慟（どう）哭したが**，直ちに停戦指令を下した彼は寧夏の軽銀（アルミ）工場で技術者と為った後70年11月に母校に連れ戻され，毛が「反革命組織」とした「首都紅衛兵5.16兵団」との関りに就いて隔離審査を2年受けた。後の監督労働を経て1978年4月に逮捕され83年3月に懲役17年に処された。**殺人罪以外の反革命宣伝煽動罪・誣告「陥害」（陥れ）罪は，副組長**

を務めた首都大学・高等専門学校紅衛兵代表大会核心組の他の大物の裁判でも適用された。

組長の聶元梓（1921～　）は66年5月25日に北京大学哲学学部党総支部書記として，他の6人と連名で大学・市党委を非難する大字報（壁新聞）を貼り出した。杭州滞在中の毛沢東は康生の報告で知ると6月1日に即日放送を命じ，「全国初のマルクス＝レーニン主義の大字報」「20世紀60年代の巴里公社・北京公社の宣言」と激賞した。彼女は翌年の市革委副主任就任に続いて第9期中央委員候補に当選したが，間も無く江西の北大分校農場に下放され，1971～73年の隔離審査を経て蒯大富と**同じ時期・量刑の逮捕・重罰**を受けた。

「5大領袖」中の北京航空学院「紅旗戦闘隊」責任者韓愛晶（1946～　）は，69年に湖南株洲の工場に配属され71～75年に隔離審査を受け，78年に逮捕され83年に懲役15年と為った。北京地質学院「東方紅公社」責任者王大賓（1944～　）は成都の工場に就職した後，71年に隔離審査・党籍剥奪をされ，78年逮捕の5年後に懲役9年を言い渡された。北京師範大学「井崗山公社」責任者譚厚蘭（1940～82）は北京軍区の農場に行かされ，70年に「5.16」疑獄で隔離審査を受け，78年の逮捕後は子宮頸癌の悪化で起訴が免除された。

毛沢東讃歌「瀏陽河」に有る湖南湘潭から出た譚厚蘭は，1966年11月に山東曲阜の孔子所縁の旧跡・文物に対する大破壊を指揮し，韓愛晶は翌月に彭徳懐を四川から北京に連行し翌年に王大賓の加担で迫害した。「核心組」正・副組長5人の内に最長の懲役を食った聶元梓と蒯大富は，其々**造反の第一声を上げた影響度と武闘で死者を出した「血債」（血の負債）が要因**と為る。**毛が5時間の面談で彼等と訣別したのは「狡兎死，良狗亨」の予定行動でもあろうが，丸腰の毛沢東思想宣伝隊員が殺された事で堪忍袋が切れた経緯も示唆に富む。**

王洪水が指揮した「8.4武闘」は上海柴油機工場の異端造反派組織を潰す為であり，自ら率いる十数万人の10時間に亘る猛攻で相手の死守を粉砕した。張春橋の指示に由り翌日から地元のテレビで異例の長い記録映像が3回放映され，上海滞在中の毛沢東は興味津々に観て勝者の敢闘を褒めた。その**宣揚・称賛は攻め落す際に殺害を避ける鉄則が守られた結果**であり，死者が1人でも出たら王の出世にも影響しかねない。彼と華国鋒が連帯責任を負う第1次天安門事件の鎮圧でも，労働者民兵は**命を奪わない方針で実力排除を行った。**

更迭された前任者に継ぐ党首と多くの指導部成員が失脚した1989年の非常事態と比べて，突然変異的な「超限戦」（限界を超える戦）の様な「6.4」武力弾圧は遥かに驚天動地である。「動乱平定」の大義名分が有るとは言え戦車付きの野戦部隊で丸腰の学生・市民を駆除し，民衆に対する「人民の子弟兵」の乱射等で300人以上の死亡と大勢の負傷を招いた事は，共和国の史上「文革」勃発・林彪事変と並ぶ最大級の「黒白鳥」であり，林彪事変並みに体制への幻滅を呼ぶ破天荒な凶変は，「文革」中でも犯罪として弾劾されたのである。

清華大学「百日戦争」を鎮める為に毛沢東思想宣伝隊が持ち出した中央「7.3布告」は，広西の「無産階級革命派聯合指揮部」対「4.22革命行動指揮部」の武闘を制止する主旨で

あるが，広西軍区は2大造反組織中の前者を支持し，同月16日～8月5日に南寧（自治区首府）で後者の拠点を攻撃し1 470人の死者を出した。各地に広がる「4.22」弾圧は賓陽県だけでも3 681人が殺され，「7.3布告」は図らずも**派閥抗争の犯罪に利用された。殺人事件に関与した軍の指揮官に対して，軍委は1983年に国法・軍法・党紀に依（よ）る処分を下した。**

武闘・虐殺の熾烈・残忍が全国一の広西に及ばない青海では，翌年2月の各地の造反派に対する軍隊の鎮圧で大惨事が起きた。23日に省軍区の部隊が趙永夫副司令（1915～87，大佐）の指揮下で，省都西寧の青海日報社を「8.18紅衛兵」から奪還する作戦を展開し169人を射殺した。**武器を持たぬ民間人に対する蛮行は中央から追及され，逮捕された趙は危うく林彪・康生の命令で処刑されそうに為った。「文革」後は林・江青集団の妨害で誤りを犯したと結論が変えられたが，問答無用の発砲が公式評価で正当化される事は1度も無い。**

国民党の「白色恐怖（しろいテロ）」でも民衆への大規模な無差別発砲は散見され，最も犠牲者を多く出した蛮行は「2.28事件」である。1947年2月27日に台北で官憲が闇煙草（やみタバコ）を売る女性を殴打し，周りの人々への威嚇発砲で無関係の市民を殺した事で，翌日に市庁舎前で大衆の示威（デモ）行進が起き，憲兵隊の掃射で数十人の死傷者が出た。後に各地で無差別発砲や処刑が行われ，1992年の行政院推計に拠ると死者は1.8万～2.8万人に上る。**翌々年から38年余り続いた戒厳令はこの事件に根源が在り，弾圧を否定する公式評価の出現は民主化の現れである。**

台湾民主化の本格的な胎動と為る戒厳令解除1987年7月15日は，昆明（雲南省都）**で国民党に暗殺された詩人・学者聞一多**（1899～1946）**の命日**である。彼は北京・清華・［天津］南開3大学が抗日戦争中の疎開先で組成した西南連合大学の文学部長を務め，同大学に由って**「民主の砦（とりで）」と呼ばれる昆明で腐敗政治を糾弾した。**当日は4日前に同市で当局の手先の凶弾に倒れた教育家・中国民主同盟の創設成員李公朴（歿年44）の追悼会で，「最後の講演」の題で当局批判の弔辞を述べたが，**決死の覚悟が現実と為り**午後に命を落した。

同行の長男聞立鶴（1927～81）は父親を庇う為5発の被弾で重傷を負い，**親子が国民党の暗殺で死傷と為った惨劇は14年前の楊銓父子遭難くの再演**である。**楊を悼む魯迅の「何期涙洒江南雨，又為斯民哭健児」の中の固有名詞は，奇（く）しくも「江南事件」（1984.10.15）の越境暗殺と繋がる。**被害者の華人作家劉宜良（筆名（ペン・ネーム）江南，1932年生）は帰化先の米国で『蔣経国伝』を書き，既刊版（75，香港）の増補に着手した処，台湾「国防部」情報局首脳の「鋤奸」（裏切り者粛清）計画に由って，極道組織「竹聯幇」の幇主等が渡米し射殺した。

民主主義国家への挑戦とも取れる行動は国際世論の指弾を受け，当局は翌年の1月13日に情報局幹部の関与を認め，後の裁判で汪希苓（れい）局長（1929～　，海軍中将）と竹聯幇の総堂主陳啓礼（1941～2007）・成員（下手人（げしゅにん））呉敦（1949～　）を殺人罪に由り無期懲役に処した（共に2回の減刑を経て91年仮釈放）。聞一多暗殺の犯人（昆明警備司令部の2人の下級将校）も公開軍法裁判で死刑と為った（別の死刑囚を身替りに執行されたと見られる）

が，**厳罰される犯行が自明なのに止められないのは，「劣根性」（下劣な根性）を感じさせる。**

第2次国共内戦勃発の19日後の聞一多暗殺は，蒋介石の1党独裁・恐怖統治が民心の離反を起す転換点である。**四半世紀後の同じ日にニクソン米大統領の訪中意向が発表され，「7.15」は後の台湾戒厳令解除と共に歴史に刻まれたが，国民党当局が「江南事件」の関与を認めた「1.13」は3年後に蒋経国死去の日と為った。隣り合う1月14日は民国成立の2週間後の陶成章**（1878～1912）**暗殺の日であり，陳其美の命で彼の革命家・光復会**（04.11.20成立）**の創設者を上海の病院で射殺した人は，他ならぬ蒋介石**（共犯等の異説有り）である。

国民党が大陸で民衆に向けた大量無差別殺害は暴政の常態化の割には少なく，有名な1945年「12.1惨事」は西南聯大で起きた。6日前の6千人参加の講演会で数人の教授が当局を批判し中共を擁護した処，第5軍の部隊が会場外で威嚇射撃を行った。これに抗議する同盟休校が続く中で，12月1日に「軍官総隊」の者が複数の大学等で暴行を働き4人を殺した。世論の譴責が沸騰する事態に政府は狼狽して，雲南警備司令関麟徴（1905～80，陸軍2級上将）と省主席代理兼省党部主任委員李宗黄（1888～1978）を解任して凌いだ。

次の1947年「6.1惨事」は軍・警察・憲兵等2千人が武漢大学を包囲し，学生運動の煽動者である中共党員を逮捕する時，学生の抵抗を制圧する為に銃・手榴弾・迫撃砲で乱射し3人を死なせた事である。**「中国人は中国人を撃つな」等の哀願を顧みず，国際法で禁じられる残酷兵器のダムダム弾の使用まで為出かした虐殺は，全国の義憤を惹起し蒋介石を追い詰めた。**政府は軍・警の校園への進入の不適切を認めた上で，武漢警備司令彭善（1901～2000，陸軍中将）を解任し，更に中共治下の51年4月22日に実行犯11人が処刑された。

周恩来が1947年2月に対敵闘争の標語として編み出した「反飢餓・反内戦・反迫害」は，中共が操った5月4日と20日の上海と南京・天津の学生運動で叫ばれたが，天津の示威行進は軍・警の殴打で50人余りが負傷した。**「5.20」は翌年から中華民国総統の通例の就任日と為ったが，初代の2年目の「5.20戒厳令」実施と結び付ければ乱世の遺伝子を感じる。**死者が無くても「5.20血案」（流血事件）と呼ばれるのは，**非武装の民間人への武力鎮圧で怪我だけでも大変**だからであるが，「6.1」以降に無差別発砲が無くなった事に注目したい。

台湾情報局首脳の主謀に由る劉宜良暗殺の目的には，4ヵ月前に死去した呉国楨（1903～84）の評伝の執筆を阻止する事も有った。呉は台湾省主席在任中に**独裁への不満から蒋介石と訣別し**，辞任（1953）後に**移住先の米国で民主化志向の言論を発した為，翌年に党籍剥奪・公職追放と為った。**彼は上海市長時代の1948年に同済大学「1.29」学生運動の代表と談判した際，相手に突き倒され眼鏡・煙管が破れたが，警備司令・警察局長の弾圧命令を制して，示威行進の参加者に銃を向けている兵隊・警察に対し「発砲するな」と連呼した。

大陸時代の末期に陸軍総司令まで務めた関麟徴は「12.1惨事」の前に，発砲の自由が有り，武力で制圧し流血を惜しまないと言って憚らなかった。対照的に呉国楨は「学潮」（学生運

動）に就いて，自分は若（も）し軍閥や共産主義者なら疾（と）っくに発砲を命じたが，民主主義者なので自らの両手を縛り付けている，と述懐した。同済大学党総支部書記として陰で「1.29」示威（デモ）を指揮した喬石は，40年後に政治局常委・治安工作総責任者と為ったが，**民主化運動に対する強硬路線に同調しなかった態度は，その経験に照らせば節操・良識を感じさせる。**

軍閥も共産主義者も発砲に踏み切るという呉国楨の断言は，1926年の「3.18惨事」と89年の「6.4弾圧」に由って証明された。前者は列強に屈した不平等条約を要求する国民大会が天安門広場で開かれた後，李大釗が率いる請願群衆が民国臨時執政（元首）段祺瑞（1865～1932）の執政府の前に進んだ時，警備隊の発砲で47人の学生・市民が殺された事である。政府は国務総理賈徳耀（1880～1940，歿後陸軍上将追贈）の引責辞任等で不当防衛を認め，北京師範大学の教え子劉和珍（1904年生）を失った魯迅は**民国以来最も暗黒な1日**とした。

発砲の命令者は段祺瑞，賈徳耀或（ある）いは鹿仲麟（1884～1966）等の諸説が有るが，国民軍前敵総司令の鹿（最終階級＝陸軍2級上将）の部隊が4月9日に国務院を包囲し，段は仏蘭西（フランス）大使館に逃げ込み執政府が倒れた。17日に張学良（1901～2001，同1級上将）の率いた奉（天，今の瀋陽）系軍が北京を占領したが，**東北軍閥の「少帥」（若（わか）総帥）にとって生涯の最も暗黒な日は，父親の張作霖が没した日**に違いない。彼の**27歳の誕生日の翌日に当る1928年6月4日，列車で奉天近郊を走行中の「大帥」（総帥）は関東軍に爆殺された。**

蔣経国と同じく日本軍に親を爆殺された張学良は東北軍総帥と為った後，**国の恨・家の仇（あだ）**から東北の失地奪回の意欲が強く，1936年12月12日に西安で西北軍総帥楊虎城（1893～1949）と共に，中共軍討伐の督戦に来た蔣介石を監禁して内戦停止・団結抗日を要求した。周恩来の斡旋（あっせん）も有って蔣は承諾し国共合作に由る抗日統一戦線の結成に繋がったが，蔣を護送して南京に行った張は軍法会議に掛けられ懲役10年に処された。**蔣は特赦令で軍委委員長の厳重な監督の下に置くと決め，張は1991年の釈放まで50年以上も軟禁され続けた。**

懲役判決の5倍強も有る年月で拘束された張学良は，強（したた）かに生き延び釈放後の定住先布哇（ハワイ）で100歳超の天寿を全うした。17年前の江南事件と同じ「10.15」の命日は，監視が緩やかに為っても鳥の籠から出られぬ蔣経国時代の過渡期の性質を思わせる。台湾の報道人に近況・心境を語った**1981年の時点で既に自由の身に為りつつあった**が，蔣経国死後「総統」を継いだ李登輝（1923～　）の**民主化推進の結果**，漸く李の再任（90.5.20）の年に日本放送協会（NHK）の取材にも応じられ，**民主化元年（92）の前に無期軟禁の終了を迎えた。**

蔣介石の処罰付きの特赦令は1937年1月4日に下されたが，恰度（ちょうど）30年後に「中国最大の保皇派」として失脚した陶鋳も監禁され翌々年に逝った。更に20年後の1月4日に鄧小平は自宅で秘密会合を招集し，陳雲・趙紫陽・薄一波・楊尚昆・王震・彭真・万里（1916～2015，政治局委員・書記処常務書記・常務副総理）に対し，胡耀邦の辞表を回覧させた上で受理す可（す）きだと唱えた。**軍委主席主導の長老集団の密室協議で総書記の更迭が恣意に決**

定されたが，異議を挟まなかった趙も翌々年に同じ目に遭い，胡に増して軟禁下に置かれた。

趙紫陽の政治秘書で中央委員・中央政治体制改革研究室主任の鮑彤（1932～　）は，武力弾圧に反対する言動に由り「中央文革」成立23周年の5月28日に逮捕され，秦城監獄に拘禁中の92年3月に中央委員失格・党籍剥奪と為り，7月に国家機密漏洩罪・反革命宣伝煽動罪で懲役7年に処され，96年5月の釈放後は軟禁され今だに解除の見込みが無い。張学良の様に90歳と為る機に自由が回復する可能性は皆無とは限らないが，**趙紫陽は85歳時の病没の時まで軟禁が解除されておらず**，内外の報道媒体との接触も禁じられていた。

趙紫陽が「半百」（50歳）と為る1969年10月17日に，林彪の蘇州行きを始め対ソ戦備の為の要人緊急疎開が始まった。激動の時代に生きた彼は受難後の張学良・李鋭並みに100歳まで生きられず，**命日も18年前の胡耀邦辞任の「1.16」の翌日に巡り合せた**。18日の『人民日報』では第4版（全16版）の下の隅を使って，明日の全国天気予報図の上に載る3行・54字の報道で死去を伝えた。主語の「趙紫陽同志」の次に病名・治療経過と命日・「終年」（歿年）が綴ってあるが，**職務・経歴は抹殺の徹底さを反映して一切出て来ない**。

第4版の元政治局委員の死亡記事には，「江青自殺身亡」（1991.6.5，7行・110字），「張春橋病亡」（2005.5.11，6行・125字），「姚文元病亡」（06.1.7，5行・89字）も有る。江の自裁死（5.14）と張・姚の病没（4.21，12.23）から可也時を置いた「冷却処理」は，「林彪・江青反革命集団主犯」の属性と判決や減刑・自決の経緯で字数が多く要るが，**趙紫陽に対する質的な「冷却処理」**を際立たせる。「王洪文病亡」（1992.8.5，10行・92字）は第2版を使ったので，**改革・開放時代の党首は最高職が副主席の「文革」罪人よりも格下にされた**。

同じ元政治局委員で趙紫陽の9日前に享年96で逝った宋任窮の死亡記事は，翌日（1.9）の『人民日報』第1版に遺影付きで掲げられ，題に「中国共産党の優秀党員　偉大な無産階級の革命戦士　傑出した無産階級の革命家　我が党の政治工作の卓越した指導者」の賛辞が冠された。15日に行われた追悼会代りの告別式には政治局常委全員等の要人が多く参列し，翌日の第1版に報道及び胡錦涛・江沢民が遺族と握手する写真が載り，第4版一面に写真8枚付きの事跡が報じられたが，**「8大元老」の一員が享受した礼遇は趙には皆無であった**。

2日前の第4版に遺影付きで訃報が出た徐恵滋（5日没，72歳）は，宋任窮と同じ上将（1994年昇進）で，83～95年に第39軍軍長・副総参謀長・軍事科学院院長を歴任し，第12期中央委員に追加選出後13・14期も務めた。階級制は撤廃（1965.6.1）後88年9月14日に復活し，徐が初取得で中将に為った際の軍委第1副主席趙紫陽は時の総書記・総理でもあるのに，記事は徐の45行・693字の1割弱に過ぎず，その貢献の詳述と比べて**有益な事を全然しなかった様な印象**を与え，**侮蔑の意図が無いにせよ故人に鞭を打ち顔を潰した**。

趙紫陽は失脚の直後に北京最大の繁華街王府井の近くの富強胡同6号に移住し，「胡同」（旧市街内の伝統的な民家が立ち並ぶ路地）の字面と合う様に，**1952年から29年間此処に**

住んでいた胡耀邦と同じ凄惨な余生を送った。陳雲は1982年12月に集権計画の制御下の市場調節・経済活性化を唱え，その**「鳥籠（とりかご）経済」と並行して思想規制の中で社会を前進させる「鳥籠政治」**（造語）**も見られた**が，鉄条網（もう）付きの高い塀の内外の数十人の軍人・私服警察に日夜見張られた趙は，言わば**最大の「政治犯」**につき**籠の中の鳥よりも窮屈**であった。

趙紫陽の死亡時刻（7時1分）は建党記念日の「7.1」を連想させ，元党首張聚天の命日も「党慶」55周年に当る。彼は廬山会議で失脚後1960年11月に中国科学院哲学社会科学部特約研究員と為り，「文革」中「監護審査」（68.5.17～69.10.20）を経て広東肇慶に疎開され，後に北京へ戻る要請が毛沢東に却下された為75年8月に江蘇無錫に転居した。翌年7月13日の『新華日報』（中共江蘇省委機関紙）第3版の右下隅に死亡記事が出たが，74字中に現職と25年入党の経歴が記してあるから，地方紙限定ながら内容は趙より益（ま）しである。

張聚天も趙紫陽も「死於非命」（非業の死を遂げる）とは違うから，**高崗事件に始まった建国後の頂上政争では時代の進歩を現す様に，林彪事変を最後に指導部成員の非正常死亡は無くなったが，死ぬまで軟禁解除も再評価も無かった趙の待遇は張学良と比べても惨（みじ）めである。**国民党の陸軍総司令兼台湾防衛司令孫立人（1900～90，2級上将）は，55年に軍事政変疑獄で解任・拘禁に処されたが，33年に及ぶ軟禁も88年に終止符が打たれた。**台湾の上層部政争はその後類似の厳罰が見られないので，同時代の中共の方が数段も厳しい。**

共産主義者なら反対派鎮圧に躊躇（ちゅうちょ）無く発砲すると呉国楨は断言したが，**国民党より中共やソ連・北朝鮮の異端排除は確（たし）かに容赦しない傾向が有る。**ソ連の大粛清は前の「17大」の代表の3％だけが後の「18大」（1939.3.10～21）に参加でき，37～38年に68万人余りが死刑判決を受け63万人余りが刑務所や収容所に送られた事は，**世界共産主義運動の史上最悪**である。処刑された要人の中で屈指の理論家ブハーリン（1888～1938，元政治局委員）が目を引くが，半世紀後に名誉回復と為った彼の**命日「3.15」は秦城監獄の落成と繋がる。**

林彪・江青集団裁判の結果，既に死亡し不起訴と為った林彪・康生・謝富治・葉群・林立果・周宇馳（1935～71，空軍司令部辦公室司令部副主任）以外の主犯は，江青・張春橋が執行猶予付き2年の死刑，王洪文が無期懲役，姚文元が懲役20年，陳伯達・黄永勝・江騰蛟（こう）（1919～2009，南京部隊空軍政治委員，少将）が同18年，呉法憲・李作鵬が17年，邱会作が16年，江・張・王は政治権利終身剥奪，他の7人は同5年に処された。**要人を処刑しない建国後の政争の掟（おきて）**に従って，江・張は執行猶予期間満了時に無期懲役に減刑された。

英国の哲学者・政治思想家ロック（1632～1704）と仏蘭西（フランス）の政治思想家・法家者モンテスキュー（1689～1755）は，権力の濫用を防ぎ国民の政治的な自由を保障する為に，国家権力を相互に独立する立法・司法・行政に委ねる原理を唱え，亜米利加（アメリカ）合衆国憲法（1787.9.17作成，88.6.21発効）と仏蘭西（フランス）革命（89.7.14～99.11.9）に大きな影響を与えた。モンテスキューの『法の精神』（1748）の100年後に『共産党宣言』（マルクス＝エンゲルス［独逸（ドイツ）

の思想家・革命家，1820～95］）が発表され，その系譜で生れた**共産圏では別の秩序が有る**。

中国の最も権威有る中型国語辞典『現代漢語詞典』（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編，商務印書館）には，改革・開放元年（1979）の初版から最新の第7版（2016）まで，同じ国情に合わぬ「両院制」の項が有る半面**「三権分立」は無い。2013年以来の「七不講」（7つの「語るな」）規制でも「司法独立」は大学の授業で禁句とされ，全て党に服従する中共治下の司法の有り形は変り様が無い。毛沢東時代に逆戻りした改正憲法**（第13期全人代第1次会議2018.3.11採択）の通り，**3権も軍事・財政・文教等の大権も党に独占される**。

林彪・江青集団裁判の「特別」は政治局会議で重要事項が決る点も有るが，異例の頂上（トップ）審議では猶予無き死刑に傾く向きが有った。党内闘争では殺害は行けないと言う陳雲・徐向前に説得されて，党史上1度も無い中央指導部成員に対する処刑は回避された。仏蘭西（フランス）革命勃発の200年後に起きた東欧社会主義陣営の崩壊で，羅馬尼亜（ルーマニア）の独裁領袖チャウシェスク（1918年生）が夫人（同16年）と共に大量虐殺・不正蓄（ちく）財に由り，特別軍事法廷の判決で銃殺されたが，**中共政権では盤石の統治と最後の良識に由って左様な荒業（あらわざ）は有り得ない**。

モンテスキュー逝去200年後の饒漱石・潘漢年・胡風疑獄は，毛沢東が直（じき）に公安部長に命じ中央・地方の要人や全人代代表の文化人を逮捕させた等の事で，**公安・検察・法廷とも党が司る現実**を端的に顕にした。一方，毛は1956年4月26の政治局拡大会議でこの3人に就いて，俘虜（ふりょ）と為った戦犯の宣統皇帝（愛新覚羅・溥（ふ）儀，1906～67，清の末代皇帝［08.12.2～12.2.12］，「満州国」執政・皇帝［32.3.9～34.3.1/～45.8.18］）・康沢（1904～67，第15綏靖区司令，陸軍中将）と同じく，処刑に値する罪は有るが殺すのは不利である，と語った。

毛沢東は1962年「7千人大会」でも潘漢年を取り上げて，過去に秘密裡に国民党に投降し，CC派（陳果夫・立夫が率いる「中央倶楽部（クラブ）」派閥）の者で，今は獄中に居るが，我々が彼を殺さないのは，「開殺戒」（「人」殺しの戒律を解く）と為れば，類似の人たちは皆殺さなければならなくなるからだ，と言った。**毛は延安整風の2年目に迫害に由る死傷が増えた混乱の中で，「一個不殺，大部不抓」（1人も殺さず，大半は捉えない）の方針を打ち出した。彼は「文革」中も自ら定めた鉄則を守ったが，全国の「開殺戒」を止められなかった。**

中央の劉少奇・王光美（1921～2003，劉夫人）特捜班は劉死後の1970年6月に，王に関する審査報告で米国（O）戦略（S）情報（S）局の間諜と断定し，党籍の剥奪と法に依る処罰を建議した。主管の江青と林彪は賛意を表し周恩来は刑罰に処す可（べ）きだと付言したが，毛沢東は全ての特捜対象に対する刑罰を否定し，犯罪者を寛大に処分し保護するのが可（よ）い，生きた証拠を残す事は将来に有利だ，と指示した。王に死刑を下そうと彼に秘かに話した江の主張はこの様に却下されたが，**処刑の提案が政治局委員の領袖夫人から出た事自体は狂気の沙汰（た）**である。

王光美は1967年9月13日に秦城監獄に送られ，11期3中全会の閉会日まで拘禁された。1959・63年に特赦された溥儀・康沢は迫害と病気で67年10月17日・12月23日に61・

63歳で没し，溥儀と共に特赦された王耀武（第2綏靖区司令，陸軍中将）は，同年齢の康が紅衛兵に殴られるのを見て心臓発作を起し68年7月3日に逝った。「文革」勃発の「5.16」に還暦を迎えた廖耀湘（第9兵団司令，同）も1961年に出獄した後，68年12月2日に糾弾会で心臓発作に由る急死をしたから，**立派な寛大政策も乱世では無効化された。**

狂乱――「造反有理」熱（フィーバー）の災厄と「無頼国家（ならずもの）」化の危険

1969年7月20日に米国の有人宇宙飛行船「アポロ11号」が月面に着陸した時，**人類史上初の壮挙の情報は中国・北朝鮮・越南（ベトナム）・玖馬（キューバ）で遮断された。1党独裁を堅持し曾て米国と交戦し又は交戦中の4ヵ国の内，中国は9年半後に改革・開放を始め越南（ベトナム）に社会主義国家間の唯一の戦争を挑（いど）み，8年遅行して市場経済を導入した越南（ベトナム）は「小中国（ミニ）」の観が有り，北朝鮮と同じ氏名の漢字表記の様に地縁・文化縁で繋がる。中朝・中越の結盟→反目→和解は東亜共産圏「三国志演義」の展開に見える**が，大洋の彼岸の玖馬（キューバ）と合せて見れば興味深い。

1990年代末以降の米国で**世界平和に脅威を画策する「無頼国家（ならずもの）」**として，北朝鮮・イラン・イラク・アフガニスタン・リビア・委内瑞拉（ベネズエラ）が相継いで指定され，北朝鮮・イラン・イラク・シリア・リビア・玖馬（キューバ）は又**「悪の枢軸」**と位置付けられた。**前者は恐怖主義（テロリズム）支援・大量破壊兵器拡散等が特徴で，後者は他に人権抑制・独裁維持の傾向も強い。**後者に入る**玖馬（キューバ）の共産党初代中央第1書記フィデル・カストロ**（1926～2016，65.10.3～11.4.19在任）**から弟ラウル・カストロ**（1931～　）**への禅譲は，両方に入る北朝鮮の世襲より益し**である。

英語のrogue stateの和訳は「ごろつき国家」「悪漢国家」「悪党国家」を経て「成らす者」に定着し，他に「違法国家」「無責任国家」「無法国家」等も有る。「破落戸（ごろつき）」は放浪して強請（ゆす）り等をする住所不定・無職の成らず者を指し，卑語・中立でない嫌いで報道用語に向かないとされるが，「成らず者」の「暮しが思う様に成らない者」「悪い事ばかりして手の付けられない者。道楽者」「ごろつき。無頼漢。やくざ」の多義も碌（ろく）な事が無い。**北朝鮮の経済の窮状・外交の博打流・恐怖統治の非道は，3重の悪い意味を持つこの和語で妙に表し得る。**

「成らず者国家」は中国の定訳「無頼国家」と通じるが，外務省訳「無責任～・違法～」の合成の様な『産経新聞』訳「無法～」も，**毛沢東自称の「無法無天」（法も天も無い［無法の限りを尽す］）と重なる**妙味を持つ。rogueの名詞・形容詞としての「悪戯（いたずら）っ子。腕白者」「悪漢。無頼漢。不正直者。詐欺師」「群れを離れた（凶暴な）動物」「（劣等な）変異（体），不良生物」，「（群れを離れた動物）凶暴な，危険な」「統制から外れた。集団の方針に従わない。食（は）み出し者。手に負えぬ」の多義は，**「文革」の悪質な欺瞞や狂猛な造反に当て嵌る。**

「やくざ」は博打の3枚歌留多（がるた）で8（や）・9（く）・3（さ）の目が出ると最悪の手に為る事から，「役立たないこと。真面（まとも）でないこと。又そのもの」「博奕打ち。やくざ者」を表す。奇しくも**西暦年**

の下 3 桁が 893 である毛沢東が投げた骰に由って，20 世紀後半の中国の最悪の厄災が惹起され，「骰」の字形と暗合する様に遺骨と化す非正常死没が無数に発生した。「悪漢 / 悪党国家」に因んで言えば，**「中央文革」は党指導部内の「悪の枢軸」の一部を為す「紅色恐怖支援機構」で，北朝鮮・玖馬と歩調を共にした頃の中国は内外で大量破壊利器を拡散した。**

rogue の「群れを離れた（凶暴な）動物」は特に逸れ象を指すが，現生最大の陸生哺乳類動物の象の棲息地に有る柬埔寨では，**康生が「毛沢東思想の最も忠実な実践者」と称えたポル・ボト（1928～98）の首相在任（76.5.13～79.1.7）中，「大躍進」「文革」的な原始共産主義建設・異端分子粛清で 100 万人前後の死者が出た。**民主柬埔寨（1976.4.17 成立）は越南の侵攻（78.12.25）の 13 日後に瓦解したが，**毛の生誕 85 周年の前日に起った戦争は「不良変異体」を抹消し，直前の中共 11 期 3 中全会は中国の「無頼国家」化を阻止した。**

毛沢東は「党慶」37 周年（1958.7.1）に七律 2 首「送瘟神」（瘟神を送る）を書き，江西省余江県に於ける日本住血吸虫の根絶に歓喜・称賛を表したが，8 年後に**「文革」は革命の輸出で世界の疫病神と為った。実害の少ない日本でも騒ぎが大きく，1968～69 年の学園紛争では過激派の学生は東京大学の正門に毛の肖像と「造反有理」の語録を掲げ，毛の人民戦争理論の影響を受けた連合赤軍（71.7.15 結成）は「銃に由る殲滅戦」「長征」を展開し，あさま山荘**（長野県）**人質立て籠り（72.2.19～2.28）で戦後最大の暴力事件を起した。**

連合赤軍はニクソン訪中の合意発表日に発足し，訪中最終日のあさま山荘陥落で事実上崩壊した。警官 2 名・民間人 1 名の死者を出したあさま山荘事件と共に，前年の大晦日～2 月 12 日の「総括」で 12 人の赤軍兵士が私刑で死んだ事も，平和を四半世紀に亘って享受して来た日本社会に激甚の衝撃を与えた。「敗北主義」「小資産階級急進主義」「日和見主義」等の罪名は，中共・赤軍の建国前の粛清に既視感が有る。東大安田講堂封鎖解除を巡る警視庁との攻防（1969.1.18～19）も，半年前の清華大学占拠 vs. 制圧の後追いの観が有る。

「中共語」の「反面教師」「百家斉放」に継いで日本語に入った「造反有理」は，毛沢東が延安のスターリン生誕 60 周年祝賀大会（1939.12.21）**で，マルクスの入り込んだ道理を 1 言に帰着した命題**である。スターリン没の 26 年前（1927.3.5）の湖南区委機関紙『戦士』週刊と 12 日の中央機関紙『向導』週刊に，毛の「湖南農民運動の視察報告」が一部掲載された。彼は農民が地主に与えた激越な打撃を「痞子運動」（ごろつきの運動）と誹る向きに対し，多少の行き過ぎが有っても正しい事で，度を超さないと誤りは糾せないと弁護した。

各地の農民協会は地主に高い三角帽子を被せて郷を引き摺り廻し，**所謂「極悪非道の罪深い輩」を銃殺した処さえ有る。**長沙（省都）総商会会長を務める学者・著述家・資産家の葉徳輝（1864～1927）は，農民運動への不満を対聯に書いた事で怒りを買い，4 月 11 日に湖南省土豪劣紳裁判特別法廷で罪を問われて，**非合法の「土豪劣紳裁判暫定条例」に由って処刑された。翌日に蔣介石が上海で起した政変と共に国共合作の破綻の契機と為り，許克**

祥の「5.21」中共党員大虐殺の引金も本人と部下の家族が農民の吊し上げに遭った事である。

蒋介石の生誕81周年に巡り合せた8期12中全会の閉会（1968.10.31）の際，毛沢東は**名士・大知識人の葉徳輝に対する処刑の不適切**を2度指摘した。自分が1927年に湖南で書いた「高い帽子を被せて郷を引き摺り廻す」行り方は，数十年も止めたのに紅衛兵は真似して更に「昇級」したが，これは行けない行為だし効果も良くない，と語った上で，中央委員の滕代遠（1904～74，初代鉄道兵司令・鉄道部長）を名指して，葉は君が湖南某県の農民運動の委員長を務めた時に其処で殺されたのだが，その殺害は妥当ではないと断じた。

我々は曾て俘虜に対しても虐待はしなかったという文脈で，俘虜の例示の心算か北京には杜聿明（1904～81，東北保安司令長官・陸軍中将，59年特赦）と王耀武が居ると言ったが，王が紅衛兵の暴行に由る衝撃で7月に死去した事を毛沢東は知らなかったらしい。彼の講話の2日後に廖耀湘が糾弾会で命を落した事も含めて，**「文革」発動の2年半後の態度表明は已に手遅れ**であり，rogueの語義に即して言えば，**統制から外れた「悪戯っ子」等の常軌を逸脱する強暴は最早手に負えなくなったが，火に油を注いだのは他ならぬ彼**である。

毛沢東時代の「大興革命新風」（革命の新風を大いに興す）の標語の文字と重なって，1966年8月27日～9月1日に北京大興県で大量虐殺事件が起った。勝手に人を吊し上げ見境無く殺す暴行が蔓延る結果，13の人民公社で「黒4類（地主・富農・反革命分子・悪質分子）」及び家族が次々と殺害され，325人の死者の内80歳の老人から生後38日の嬰児まで居り，22戸の家族が皆殺しに遭った。市委が緊急制止に動き「中央文革」も予想外の暴走に驚愕したが，「文革」の最初の死者が3桁に上る無法集団殺人惨事として暗黒史に遺った。

中国では**6・8は「禄」・「発」と発音が近い**（liù と lù，bā と fā）**為，俸禄・「発財」（財成）の幸運を呼ぶ「吉祥数」**とされるが，**多難な歴史の宿命を物語る様に20世紀の66年8月に「文革」の狂瀾が第1の高潮に達し，88年8月に賃金・物価体系の性急な改革で建国後最大の通貨膨脹と大衆の恐慌が起きた。8期10中全会で文革に関する16条決定が採択された「8.8」は日まで「吉祥」で，毛沢東が紅衛兵大集会に臨んだ「8.18」も「発一発」（一儲けしよう）に聞えて縁起が良いが，その「紅8月」に「血雨腥風」が吹き荒れた。**

8月の上・中旬に首都で紅衛兵の家宅捜査・殴打・殺害に由って多数の死者が出たが，毛沢東は殴打を禁じる「緊急呼吁書」の発表に反対し，23日の中央工作会議で「北京は文明的過ぎる」，「北京は余り乱れていない」，「無頼漢は少数に過ぎず，今は干渉が不要だ」と言った。謝富治はその意思を受けて北京市公安局の会議で，**階級の敵に対する群衆の暴力行為を制止せず，逆に該当者の情報を紅衛兵に提供せよと呼び掛けた。大興の大虐殺は謝の示唆に起因し，根源は「文革」発動者の「湖南農民運動の視察報告」の暴力革命論に在る。**

「8.18」に北京師範大学女子附属中学の宋彬彬（1949～　）が天安門楼上で，毛沢東に「紅衛兵」の腕章を付けた。毛はその名を訊ね「文質彬彬」の「彬彬」かと確かめたが，肯定

の答えを聞くと**「要武嘛」（武が要るね）**と言った。彼の 39 年前の例の論説に曰く，「革命は客を招いて御馳走する事でもなく，文章を作る事でもなく，絵を描く事や刺繍をする事でもない。そんなに優雅で，そんなに従容として迫らず，文質彬彬で，そんなに温・良・恭・倹・譲では行けない。革命は暴動で，ある階級が別の階級を覆す“暴烈”（激烈）な行動だ。」

件の 4 字熟語の語源は，『論語』「雍也」の「質勝文則野，文勝質則史。文質彬彬，然後君子」（質，文に勝てば則ち野。文，質に勝てば則ち史。文質彬彬として，然る後君子なり）である。素朴さが装飾よりも強ければ野人であり，装飾が素朴さより強ければ文書係であるが，両方が上手く融けあってこそ始めて君子だ，という説では優雅の意味と為る。現代では温和・上品で礼儀正しい様に転義しているが，「文」「野」の対は毛沢東の「文明的」（紳士的）への不満と結び付ければ，**文明を破壊し野蛮を助長する「文革」の傾斜**に目を向かせる。

『論語』「学而」に見える「温良恭倹譲」（温和・善良・恭敬・倹約・謙譲）は，孔門十哲の 1 人である子貢（前 520～?）が語った師の美徳である。「文質彬彬」と共に**儒教の理想を否定する「文革」の特質**には，この 5 文字とは逆の**粗暴・邪悪・傲慢・浪費・尊大**が有る。**毛沢東は第 1 次国共合作の破局の直前に革命を「暴動」「暴烈的行動」と規定したが，紅衛兵の代表に語った必要な「武」は激烈な暴力行動に他ならない。「天声」に応えて宋彬彬を始め「要武」に改名する若者が続出し，全国の武闘は「文革」末年まで止まなかった。**

毛沢東の賀子珍（1910～84）が生んだ 3 女（第 8 子）李敏（1936～　），江青が生んだ 4 女（第 10 子）李訥（1940～　）の名前は，『論語』「学而」の「敏於事慎於言，就有道而正焉，可謂好学也已矣」（事に敏にして言に慎み，有道に就きて正す。学を好むと謂う可き已），「里仁」の「君子欲訥於言，而敏於行」（君子は言に訥にして，行に敏ならんと欲す）から取った。**道徳者に就いて正して貰えば好学に為るという孔子の言に沿って，2 人は北師大女附中で良い教育を受けたが，首都教育界の「文革」中の虐殺第 1 号がその名門校に出た。**

毛沢東は 8 期 11 中全会の中盤の 8 月 5 日に，「炮打司令部――我的一張大字報」（司令部を砲撃せよ――私の大字報）の題で，劉少奇・鄧小平等の「資産階級反動路線」を批判する文章を書き，全出席者への配布を命じ**政争の宣戦布告**をした。同日に周恩来経由の通告で劉は国家主席の職務執行は事実上停止され，**開戦の時点で毛の完勝が決ったが，劉の王光美との間の次女**（第 8 子）**婷婷**（1952～　）**・鄧の 3 女**（第 4 子）**榕**（1950～　）**が在学中の北師大女附中で，この日に党総支部書記兼副校長卞仲耘が紅衛兵に打ち殺された（歿年 50）。**

北京大学の「全国初のマルクス＝レーニン主義の大字報」が放送された翌日，北師大女附中の 3 人の高校生が大字報で学校の責任者を攻撃し，内の劉進（195?～　，劉仰嶠［1913～80，高等教育部副部長］の娘）と宋彬彬（宋任窮の次女［第 4 子］）は，同校の学生造反派・紅衛兵の代表に為った。2 人の様な**高官の子女は同年度新入生**（1965.9 入学）**の約半数を占め，8 月 12 日に政治局委員候補に追加選出された宋任窮の上の最高指導部成員の子**

女も彬彬と共に，母親と同世代の女性副校長に対する吊し上げ乃至撲殺（ないしぼく）に関ったとされる。

「文革」初期の北京の虐殺は「紅２代」（開国功労者の高官の２世）の紅衛兵の仕業が多く，革命の正統を以て自任する意識が政権維持の為の「過剰防衛」・先制攻撃を齎（もたら）したが，間も無く親が闘争・打倒・監禁の身に為ったので二重の悲劇が感じられる。2014年1月12日，宋彬彬・劉進は**母校で「8.5惨事」等の愚行に就いて謝罪し**，陳毅の3男陳小魯（1946～2018，元中央政治体系改革研究室社会改革局副局長・実業家）も13年8月20日に電脳網（ネット）上で，北京第8中学の元学生領袖・革委会主任として**教師・学生への迫害を懺悔（ざんげ）した。**

林彪反党集団主要成員の党籍永久剥奪決定（1973.8.20）の40年後の陳謝は，8中の教師が迫害で死んだ事は無いから「文革」清算としてより普遍性が高い。陳小魯は10月7日に同校「老3届同学会」（「老3期」同窓会）の代表として，母校に出向いて往年の批判闘争・労働改造にされた教師たちに頭を下げて詫（わび）びた。**「老3届」は1966～68年の間の中学・高校卒業予定の生徒を指し，この世代は十分な教育を受けない儘に卒業を延期され，居住地・勤務先を選ぶ自由も無い環境で下放労働や就職と為り，「文革」被害者「群体（グループ）」と言える。**

1966年から中止した大学募集は11年半経った後，文教主管の副総理鄧小平の決断で再開した。1977年末の入学試験の時「老3届」は通常の年齢制限を疾（と）うに超えたが，救済措置として77～79年度に限って出願が認められた。「文革」勃発時に15～18歳で1969年に社会人と為った彼等は，初回の競争倍率が全国平均で21倍と為る狭き関門に挑む際，相当歳を取った故「3期“高齢者”」の意で「老3届」と呼ばれた。この層の「紅２代」が習近平体制の２年目に往年の過誤を謝った事は，「文革」の教訓を汲み再演を防ぐ意義が有る。

漢の無名氏（よみびとしらず）作楽府「長歌行」に，「少壮不努力，老大徒傷悲」（少壮努力せずんば，老大徒（いたずら）に傷悲せん）と有る。**幼時からの勉学を促す警句**として古今能（よ）く言われるが，**「老3届」は努力の機会を奪われて「老大」の「傷悲」を蒙った。**南宋の武将岳飛（1103～41）の詞（うた）「満江紅」の「三十功名塵與土，八千里路雲和月。莫等閑，白了少年頭，空悲切！」（三十なれど功名は塵と土，八千里の路（みち）雲と月。等閑（なおざり）にする莫（なか）れ，少年の頭も白くなり了（おわ）り，空しく悲しみのみ切なる）も，**数千里外の遠隔地で30代に突入した「知識青年」の不遇**に合う。

11期3中全会初日の1年前に2次選抜試験（1977.12.17～18）を終えた黒龍江は，**中ソ辺境に在る最北の地域に「知識青年」が大量に送られた**事で激戦区と為った。毛沢東は風光明媚の杭州を第2の故郷とし2ヵ所の別荘に滞在する時が多かったが，杭州から3千キロ（6千里）も離れた黒龍江に行かされた「知識青年」の張抗抗（1950～　）は，66年に名門の同市第1中学を卒業後69年に黒龍江省湯原県鶴立河農場に赴き，77年に同省芸術学校の脚本創作専攻に受かり，卒業の79年に小説で出世（デビュー）し，後に同省作家協会名誉主席と為った。

朝鮮戦争勃発の8日後（1950.7.3）**に生れた彼女の本名「抗美」は，「抗撃美帝国主義」（米帝国主義に抵抗・反撃する）の略で時流を感じさせる。「抗美援朝」（米帝に抗し朝鮮を援**

助する）の「援朝」も当時の人名に用いられ，中国参戦の翌月に生れ生年月日（1950.11.20）が胡耀邦の35歳の誕生日に巡り合せた李源潮（第17・18期政治局委員・胡錦涛体制2期目の中央組織部長，習近平体制1期目の国家副主席）**の名も，「援朝」**（yuáncháo）**と発音・声調が同じ字形も一部重なる**ので，**毛沢東時代の風潮は様々な形で多くの人に付いて回る。**

晩年毛沢東の最大の誤算の1つは林彪事変後に自信過剰の余り，林立果等の政変構想「“五七一”（同音［wuqiyi］の「武起義」**［武装蜂起］を表す暗号名）工程紀要」を公開した事**である。中央の通達（1971.11.14）で**全国民に伝達された「犯罪行為の証拠」は，社会の「陰暗面」（暗部）を的確に指摘し時弊の根源を喝破し，「暴君」毛の独裁を痛烈に糾弾する主張に由って，各階層の幹部・民衆の声無き共鳴を博した。公開に反対した周恩来の懸念が的中し毛の威信は低下し，以来1度も回復せず「文革」に絶望する社会の空気の中で死んだ。**

「党内の長期に亘る闘争と文化大革命で排斥・打撃を受けた高級幹部は，怒る勇気が有っても言葉で表す勇気が無い。農民の生活は衣食が足りない。若い知識人が山村・農村に赴くのは，変形の労働改造に等しい。/紅衛兵は初期に騙され利用され，“炮灰”（戦場での犠牲を強いられる弾除け）に使われた事に已に気が付いている。後期に抑圧され“替罪羔羊”と化した」，等の譴責は**人を刺す寸鉄の威力を持ち，1句が其々数百万～数億人の心を打った。人々の鬱憤に対する代弁は燎原の火を起し，林彪等が毛沢東と刺し違える結果に為った。**

「上山下郷」＝「変相労改」の断言は1600万人の「知識青年」の多数の実感に符合し，象徴的な事に鶴立河農場は1952年の設立時から省公安系統の労働改造農場で，67年の軍事管制を経て68年冬から「知識青年」を受け入れて国営農場と為り，70年に軍事管制が撤廃され79年に他の農場に合併統合された。**「上山下郷」は貧しい農民の再教育を受ける必要が有るという毛沢東の号令に始まったが，「最高指示」の発表（1968.12.22）は11期3中全会閉会の10年前に当り，「文革」と改革・開放との正反対の方向性の表徴と見られる。**

張抗抗は1998年の随筆「無法回味的歳月」（回想し辛い歳月）の中で，**真の知識・文化を持てなかった「知識青年」の呼称の欺瞞性**を指摘し，我々は**「文革」の犠牲者だけでなく加害者も一部居り，「老3届」は極左の意識形態の影響を最も受けた世代**だが，「青春に悔いが無い」「最後の理想主義者」と恰好を付けて，**被害の歴史を怨まず過誤への自省を拒む傾向が，この世代の最大の悲哀と問題**である，と説いた。教師を打ち殺す紅衛兵の暴行・犯罪も槍玉に上げられたが，**滅多に無い当事者の謝罪**は15年後に陳小魯等の事例で現れた。

北京8中では党支部書記と1人の教師が自殺に追い込まれ，副書記が殴られて身体障害者と為った。陳小魯は此等の被害に**連帯責任**を感じ口頭で何回も詫びたが，**被害者と自分の高齢化を考えて正式な謝罪を行った。**曹操の赤壁会戦前の「短歌行」の「譬如朝露，去日苦多」（譬えば朝露の如し，去りし日は苦だ多し）を引いて，**今謝って置かなければ機会が無い**とした上で，**自分の過ちは1954年憲法の第89条**（公民の人身の自由は侵されず，公民

は裁判所の決定又は検察院の承認を得ない限り逮捕されない）**に違反した事**だと述べた。

3ヵ月後の北師大女附中「8.5惨事」に対する宋彬彬の謝罪は遺族に拒否されたが，劉進の謝罪は宋・陳小魯より踏み込んでいると評された。彼女が言うには，**暴力を振（ふる）ったのが殆ど幹部の子女である事の理由は，革命事業の後継者を自認する意識と領袖への崇拝に由る盲従に在り，階級闘争の教育で強化された血統論・等級観念が学生の分化・対立・人命軽視を招き，「8.5」の悲劇は政策・政治運動が憲法を凌駕する悲劇**で，憲法は生命の安全・人民と国家の安泰を保障する国家の根本の大法で，如何なる個人･団体も超越しては行けない。

陳小魯が謝罪を決意した契機は同窓会秘書長の「8.18」47周年の時の提言で，彼（か）の「文革」の祭典は2人の老紅衛兵が特別な日とした程の重みが有る。行動に移した日の37年前の前日に「4人組」逮捕で後（ポスト）毛沢東時代が始まったが，世人に注目された陳謝までの歳月は世界最長の台湾戒厳の38年に近い。宋彬彬・劉進の謝罪の47年前の翌日に劉少奇は毛と最後の面会をし，同年8月5日に**劉は造反派の批判闘争に対し憲法を持ち出して国家主席の尊厳を訴えたが，憲法は毛が1955年に饒漱石逮捕を命じた時から蹂躙（じゅうりん）されて来た。**

如何なる個人・団体も憲法を超えてはならないという劉進の総括の結語は，**共産党・党首をも含めるから当局に耳の痛い戒め**である。中央辦公庁発の「目下の意識形態（イデオロギー）領域の状況に関する通達」（2013.5.13）では，陳小魯等が重んじる**「公民の権利」は「7つの“語るな”」に入る。階級闘争の教育の「流毒」（悪影響）は今だに残っている**と劉は言い，陳も**反日示威（デモ）**（直近は2012.9.15～18）**で車をぶち壊し同胞を殴る若者に「文革」の「基因」（遺伝子（DNA））を感じたが，毛沢東が若者への洗脳で埋めた時限爆弾の炸（さく）裂に対する警戒**が見て取れる。

張抗抗の「無法回味的歳月」は発表の20年近く後から，何者かに由って**「醜陋的老三届」（醜（みにく）い「老3期」）**と改題され，電脳（ネット）網上で拡散されて来た。張は2017年4月の談話で原題の詩的な味わいを消した改題に困惑・不快を表し，中国作家協会副主席・国務院参事の立場から著作権保護の問題を提起した。全国政協委員でもある彼女は年会開催前の2011年2月に，「網絡（ネット）文学」の作品に対する著作権侵害を制止する為の建議を，国務院法制辨公室・工業と情報化部･国家版権局に出したが，今回の出来事は**政治的な意味を持ち次元が違う。**

原作の本意と乖離し自分の風格でないと張抗抗が声明した改題は，台湾の作家柏楊（1920～2008）著『醜陋的中国人』（林白出版社，85）に擬えたものである。本名郭興邦・河南出身の彼は国民党の大陸撤退時に台湾に行った後，翌年に中共の放送を聴いた為7ヵ月拘留され，**1961年に当局の政策への批判で党籍を剥奪され，68年に「国家元首侮辱（ぶじょく）」「国家転覆企図（きと）」の罪名で懲役12年に処され**，翌年に夫人に離婚され，75年に8年に減刑と為り，77年に釈放されたが，その後の**歴史・政治研究の一環として「醜い中国人」論を唱えた。**

柏楊は1月2日の地方紙『中華日報』の連載『ポパイ』（米国の漫画）で，**主人公の台詞（せりふ）の“Fellous”（諸君）を「全国軍民同胞們」（全国の軍民同胞たち）と訳した故，忽ち逮捕**

され３月４日に検察から死刑で起訴された。蒋介石死去の年に短縮した刑期の満了後も緑島の政治犯収容所に閉じ込められ，海外の人権団体の圧力で漸く自由が回復したが，**出獄の４月１日は三民主義力行社特務処の創設45周年**で，その**恐怖統治の核心組織**は後に国民党軍事委員会調査統計局（1938～46）等を経て，「国防部」情報局（55～85）に改編された。

柏楊は情報局上層部・極道組織に由る在米華人作家暗殺の前年・同年に，日本・米国の大学で「醜陋的中国人」と題する講演をした。彼は**汚い・乱雑・喧しい・内争が多い等の陋習の根底の国民性に手術刀を入れ，劣悪な根性を植え付けた伝統文化に「醤缸（漬物甕）文化」の悪名を付けた**。刊行の翌年に花城出版社（広州）･湖南文芸出版社より其々210万･80万部が印刷され，**「文革」動乱の深層的な原因への探求や人々の徳性・国家の品格の不足への自省を促す衝撃で，「“五七一工程”紀要」以来の最大の「精神的な爆弾」を為した。**

「人無千日好，花無百日紅」（人に千日の好み無く，花に千日の紅無し）という格言の様に，『醜陋的中国人』熱は発行の２ヵ月半後の胡耀邦失脚でいきなり撲滅された。湖南でボーボワール（1906～86，仏蘭西の作家）の評論『第２の性』（49），ローレンス（1885～1930，英国の作家）の小説『チャタレー夫人の恋人』（28）の訳本と共に発禁されたが，評論家・小説家伊藤整（1905～69）に由る後者の和訳無修正版（小山書店，51）が警視庁に摘発された事と照らせば，**日本の近代化に対する中国の30～40年の遅行の１例**に為る。

同年６月27日に『醜陋的中国人』を「非合法出版物」扱いから外したのは，皮肉にも反胡耀邦の胡喬木（意識形態工作主管の政治局委員）である。台湾と同様この本を大々的に非難すれば国民党と一緒だと見做される，という理由で彼は批判の口調を落すよう指示した。**国共の同根性は「文革」の言論弾圧と同時期の柏楊の筆禍・投獄にも現れた**が，18日後の**戒厳令解除に次ぐ翌年元日の台湾報禁（新聞の新規発行等の禁制）解除等と逆行して，胡総書記時代の建国後最も民主的な空気はぶち壊され，以来30年経っても再来が見られない**。

花城出版社副総編集長として『醜陋的中国人』の刊行を発案・推進した陳俊年は，広東省委宣伝部招集の批判会で社の代表として自己批判をさせられたが，同書は中国人・中国の優れた文化を侮辱しているという司会者の基調発言に反論し，**大国の国民は自分の不足を正視する勇気が有って然る可き**で，作中の「醜陋」の例は殆ど台湾･香港と海外の中国人･華人の不行儀だから，大陸の読者は参照して教訓にすれば可かろう，と主張した。**改革・開放の最前線だけに当事者に対する処罰は無かった**が，同社は発行の中止を余儀無くされた。

1998年に『書城』誌（同年に上海文芸出版社より同市三聯書店に移行）が「20年来最も影響の大きい20冊」，翌年に『出版広角』誌（広西出版雑誌社）が「共和国を感動させた50冊（1949～99）」の読者投票を催し，2008年に『南方都市報』（南方報業伝媒集団）で「30年の30冊」選が行われた処，『醜陋的中国人』は何れも高い得票で入選した。**根強い支持が証明された調査の範囲は建国と改革・開放の節目の位置をも印象付ける**が，**開国70年と**

「第２の開国」40 年の頃には，「醜い中国人」の類の批判は再び言論管制の対象に為った。

胡錦涌体制第１期に省新聞（報道）出版局長を務めた陳俊年は，**敢えて自身の醜さを正視する中国人こそが美しくあり得る**，という逆説を柏楊の思辨から会得した。編集担当の葉曙明（195?～　）は後に作家･近代史研究者と為ったが，自称**「歴史説書人」（歴史の語り部）**の彼は『醜陋的中国人』出版 30 周年の前に，**金持に成った一部の中国人は世界を君臨しようとする大昔の夢を見て，尊大に為り自省精神を失い，今『醜陋的中国人』を出すなら，「中国に泥を塗る」「中国の衰退を望む」「米国の走狗」等の誹りを受けるはすだ**，と述べた。

網絡媒体『好奇心日報』に語ったその話（6.6）の前の２月 20 日，**自由主義色の強い**『南方都市報』の習近平講話の記事は，題の「党和政府主辦的媒体 / 是宣伝陣地必須姓党」（党と政府が主宰する報道媒体は / 宣伝の陣地で「党」を姓とせねばならぬ）の下に，深圳経済特区（1980.8.26 成立）の功労者袁庚（1917～2016）の遺骨が海に撒かれた場面の説明文が有り，上の２行の右端の２字と繋げて「媒体 / 姓“党”/ 魂帰 / 大海」（報道媒体は「党」を姓とし，魂は大海に帰す）と読める為，**党を揶揄する「重大事故」とされ編集者が解雇された。**

習近平の党首就任の暁に，同集団の自由主義的な『南方週末』紙の新年号（2013.1.3）献辞「中国の夢　憲政の夢」は，題・内容の修正後に**当局の検閲を通ったのに省委宣伝部の指令で党賛美の内容に差し替えられ，憲法で保障される言論・出版の自由に対する抑制は同紙記者の同盟罷業を招いた。**省委書記・政治局委員胡春華（1963～　）の調停で事態は収拾されたが，是非・責任は有耶無耶と為り，省委宣伝部長庹震（1959～　）は 2015 年７月に中央宣伝部副部長，17 年 10 月に中央委員候補，翌年４月に人民日報社長へと出世した。

習近平体制誕生の半年後に下された「７不講」禁令では，「普世価値」（普遍的価値観）に次ぐのが「新聞自由」（報道の自由）である。以下の**「公民社会」・「公民権利」・「党的歴史錯誤」（党の歴史上の誤り）・「権貴資産階級」・「司法独立」と共に，７つの「語るな」は体制が最も忌み嫌う事柄や要求**と言える。数ヵ月後の陳小魯･劉進の**「文革」に関する謝罪・反省・批判は，毛沢東時代の最大の誤りに対する追及と失われた自由・権利・独立に対する追求**であり，**憲法遵守を強調する主張は実現に程遠い「憲政の夢」の発露**に他ならない。

国際連合教育科学文化機関（1946.11.4 設立）の「世界の文化遺産及び自然遺産に関する条約」（72.11.16 採択）に，**世界遺産の認定基準として顕著な普遍的価値観**が記してある。**『現代漢語詞典』第６版（2012.6）の【普世】（世の中に普く）の項**に，「❷形属性詞」が**追加され語義・用例は「世界上普遍認同的：～価値｜～倫理」（世界中で普遍的に認められている。「普遍的価値観」「普遍的倫理」）**と為るが，**第７版（2016.9）では従来の❶名「普天下；挙世：～歓騰」（満天下。世を挙げて。「満天下喜びに沸く」）と共に削除された。**

「普世価値」を忌む為に【普世】まで抹消するのは，「斬草除根」（根刮ぎにする。徹底して禍根を断つ）の様相を呈す。前近代の「満門抄斬」（一家の資財を没収し皆斬首刑に処す）

も，究極の懲罰と共に親族に由る復讐を防ぐ「斬草除根」の発想に基づく。顧順章の裏切り後の家族・関係者に対する保秘の為の集団殺害の際に，周恩来は子供には罪が無いと言って7歳・12歳の子供を放免したが，後者は後日に偶然出会った現行犯の1人を国民党に通報し当人の自供で事件が発覚したから，**草を斬るだけでなく根まで取り除くのは一理が有る。**

「悪戯っ子」「ごろつき」や群を離れた動物の「凶暴な」等を表すrogueは，動詞として「〈園芸〉（悪い苗，不良の変種）を取り除く」の意も有る。**毛沢東時代の無法「革命」も「有害作品」を「毒草」として根絶にしようとしたが，中性的な【普世】❷はともかく無害の❶まで切り捨てて了(しま)うのは，明太祖**（朱元璋，1328～98，68～98在位）**の文字獄を想起させる。**彼は和尚・反乱軍の経歴に触れられたくない故，「僧」（sēng）・「賊」（zéi）と発音が近い「生」（shēng）・「則」（zé），延(ひ)いては禿(はげ)を連想させる「光」さえ断罪の対象にした。

習近平は党首当選の2週間後（2012.11.29），政治局常委全員・書記処成員を率いて国家博物館で大型展示「復興の路」を参観する際，**中華民族の偉大な復興の実現は中華民族の近代以来の最も偉大な夢**であると語った。5日後に現行憲法公布・実施30周年を記念する首都各界大会で，**憲法の命と権威は実施に在り，憲法・法律に違反する行為は全て追及せねばならず，法に依る治国・執政を堅持す可(す)きだ**と強調した。『南方週末』新年献辞の**「中国の夢，憲政の夢」は其処から来たのに，検閲で憲政は題から削られ文中の言及も圧縮された。**

7禁句には流石に「憲政」は入らないが，**憲政貫徹の試金石と為る公民の権利や報道の自由は「黒名単(ブラック・リスト)」に有る。**件の**「不講」の「講義で語らず」の域を超えて，辞書項目の「普世価値」の削除は全社会の言語空間からの抹殺**である。**胡錦涛が退任前の「18大」政治報告で打ち出した「社会主義核心価値観」を優先する為か**も知れないが，その**「富強・民主・文明・和諧（調和）・自由・平等・公正・法治・愛国・敬業（仕事を敬う）・誠信（誠実・信頼）・友善（友好・善良）」は，世界の普遍的価値観と通じる処も多く対立軸ではあるまい。**

『南方週末』新年献辞の原稿も**民主・自由・平等を鍵詞(キー・ワード)に使って，**政治の民主化や言論の自由，個人の権利向上を唱えたが，**党・国の建前に反しないのに強制修正されたのは，憲政・法治の不徹底に由る民主・自由の不十分の現れ**である。**普遍的価値観と報道の自由が不寛容事項の1・2位に指定されたのは，人類同慶の偉業に値する「アポロ11号」月面着陸の情報を遮断する鎖国体制の名残(なごり)や，「“五七一工程”紀要」の公表で起きた威信失墜に対する学習効果の他，新領袖の権力基盤が固まった同時期の北朝鮮との同根性も感じられる。**

附記

本稿中の中国の事柄・人物の基本情報は，原則として中国の権威有る文献（主に『辞海』）に依拠し，日本の辞書・事典等の記載とは一部異なる（子貢・劉邦・呂后・劉秀の生年，曾子の歿年，司馬遷の

生歿年，中唐と晩唐の境目，清朝の最終年，『史記』の成立時期等）。筆者は「辞書に見る日・中の国柄（3）」（『立命館産業社会論集』第55巻第1号［2019.6］）で，『広辞苑』第6版（08）・『日本国語大辞典』第2版（00～02）・『岩波現代中国事典』（1999）の【江青】に於ける本名・生年・毛沢東と結婚した年・自殺の場所の誤記を指摘し，『広辞苑』最新版（18）で毛と結婚した時期が「三九年」を「三八年」と是正された事を評価する半面，「本名，李進」が旧態依然である事を瑕疵とした。中国の定説に従った同辞書の改訂には，宋美齢の生年を1901年から1897年に改め，翦伯賛の「文革で批判され窮死」の「窮死」を「自殺」に変えたのも有る。宋の記録的な享年105（2003年逝去）と，「文革」に由る迫害死の中で有名な翦夫妻の自殺を認識させて有益であるが，『岩波現代中国事典』の【宋美齢】の「1901.3.14」出生と【翦伯賛】の「夫人と共に窮死」や，『日本国語大辞典』の「反右派闘争」「四人組」の不採録から，**現代中国に対する日本各界の研究・理解の不足**が感じられる。

本稿の後出部分では毛沢東に批判された歴史家・北京大学副学長の翦の悲劇を取り上げ，毛の青年時代の勤務先と「文革」の震源地と関連付け，更にスターリン生誕90周年（1968.12.18）に巡り合せた命日に即して，スターリンの長年の公式誕生日（1879.12.21）との乖離，出生の秘密に見る虚像と実像，毛・中共及び没後の102日目に生れた習近平への政治的な影響を論じる。**毛沢東・鄧小平時代への関心が薄れ「文革」「6.4」の記憶が風化した昨今の両国の歴史認識には，微力ながら一助に為れれば幸いに思う。**

この歴史叙述は百八煩悩を除く為に108個の珠で繋げ合せる数珠にも擬え，色々な「天数」を拾い上げ稍強引に結び付けて新しい視点を導く糸口と為す。「神は細部に宿る」と和訳された独逸の格言“Der liebe gott steckt im detail”は，中国語の定訳が**「魔鬼寓於細節」**と為り，和漢折衷の「**神霊**～」も良かろうが，**「神」「魔」「鬼」（幽霊）が漂わない細部には思い切って素通りする**。例えば陸定一が秦城監獄に入れられた日は1968年の4月下旬と5月上旬の両説が有るが，本稿では筆者の既刊論文での考証を踏まえて曖昧な「5.1」前後とし，その代り林彪事変の当日に当る陳伯達の入獄日と4年前の王光美の同じ「9.13」投獄（倶に秦城へ）に光を当てる。或いは京劇『海瑞罷官』の初演は1960年12月と翌年の1月・2月の3説が有り，初演は内部試演等も有り得るので判断が難しい。本稿では重要な事項と見做さないで特に追求せず，関連の姚文元論文の発表日（1965.11.10）を「文革」の隠れた始動日として，同日の中央辦公庁主任の更迭・交代と共に大写しする。

中国古典詩文の和訳は主として日本の権威有る出版物に依拠し，文末に訳者・文献名を明記しているが，表現・表記を一部変えた事を此処にも断って置く。本筋ではなく本稿の体裁の制限も有る故に一々説明しないが，例えば杜牧の「折戟沈沙鉄未銷」は中国の『唐詩三百首』（中華書局，1959）に拠り，平凡社版の原文・訳文の「銷」ならぬ「消」は本稿で変えている。元稹の「昔日戯言身後意」も同様で，平凡社東洋文庫の「昔日戯言身後事」は中国では異説と為る（因みに，目加田誠の口語体訳の「昔は冗談に／死んだ跡のことを言いあったが」の「跡」は，本文の下の「昔日戯言す　身後の事」と照らしても「跡」の誤植は明らかである）。

本稿中の『尚書・堯典』の「詩言志，歌詠言」（詩は志を言い，歌は言を詠む）は，加藤常賢著『書経（上）』（『新釈漢文大系』第25巻，明治書院，1983）の「詩言志，歌永言」（訳＝「詩は志を言ひ，歌は永言し」，通釈＝「詩は志［人が心に思っていること］を言い表し，歌はそれを長い音にして」）と異なる。中国でも日本語版と同じ表記・解釈は有るが，現代で一般化し相応の意味が広く流布して来た「詠」を敢えて用いる。

以下の文献列挙は極力網羅するよう細心の注意を払ったが，万が一個別の疎漏や不備が刊行後に判明した場合は，次回以降の連載や単行本化の際に補足する。

本稿の下敷きと為る筆者の既刊論文

十年：世纪的冲刺――对“劫后文学”的双焦点透视（前・续），『当代作家評論』（遼寧省作家協会）1986年第5・6期，9・11月。

「文革」後の中国文学と日本の戦後文学，『文学』（岩波書店）第57巻第3号，1989年3月。

劫・劫波の数・趨：歴史の環・節と日中間の「板塊」移変・異変考，『立命館国際研究』11巻2号，1998年12月。

戦略的思考－志向を巡る現代日・中「文化溝」（観念・視野篇），『立命館国際地域研究』第14号，1999年3月。

「生於憂患，死於安楽」：当代日中指導者の緊張感の比較，『立命館国際研究』11巻3号，1999年3月。

「天降大任」「出類抜萃」「不辱君命」：指導者の歴史責任感・使命感（上・中），『立命館国際研究』12巻1・2号，1999年6・12月。

「天職・天驕」意識と「権威・虎威」志向：指導者の条件，『立命館国際研究』12巻3号，2000年3月。

「了却天下事・嬴得身後名」「只争朝夕・常懐千歳憂」：指導者の自意識と強迫観念（1），『立命館国際研究』13巻1号，2000年7月。

「王・民之大欲・大恐」：指導者の自意識・強迫観念と中国人の精神伝説の深層（序論・序論続），『立命館国際研究』13巻2・3号，2000年12月，01年3月。

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（1～3），『立命館国際研究』14巻4号，15巻1・2号，2002年3・6・10月。

現代中国の統治・祭祀の「冷眼・熱風」に対する「冷看・熱読」――「迎接新千年」を巡る首脳と「喉舌」の2重奏と其の底流の謎解き（1・2），『立命館言語文化研究』第14巻1・3号，2002年5・12月。

中国，中華民族，中国人の国家観念・民族意識・「国民自覚」，中谷猛・川上勉・高橋秀寿編『ナショナル・アイデンティティ論の現在――現代世界を読み解くために』（晃洋書房，2003年3月）所収（第7章）。

共産党中国の4世代指導者の「順時計演変（時計廻り的移行）」――理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化新論（1），『立命館国際研究』16巻1号，2003年6月。

9.11恐怖襲撃の様々な既視感（Ⅰ・Ⅱ），『立命館国際研究』16巻3号，17巻1号，2004年3・6月。

“9.11”的既视曾识别和《超限战》的曲径幽处――中共军事新潮及中华智术根基初探（之一），『立命館国際研究』17巻2号，2004年10月。

中日の政治文化・国際戦略に見る東亜共同体の可能性・方向性（上），『立命館国際研究』17巻3号，2005年3月。

对小泉首相参拜靖国神社问题的深层分析和长期展望，『立命館国際研究』18 巻 3 号，2006 年 3 月。
由中国军事新思考、霸权军国化的危险性及安全阀展望两岸关系、东北亚安保，『立命館国際地域研究』第 24 号，2006 年 3 月。
中国走向霸权军国的危险性与和平崛起的安全阀（上・中・下），『立命館国際研究』18 巻 1・2 号，19 巻 1 号，2005 年 6・10 月，2006 年 6 月。
「東アジア共同体」構築の隘路と進路――中国の政治文化と日本の企業文化を手掛り，西口清勝・夏剛編著『東アジア共同体の構築』（ミネルヴァ書房，2006 年 8 月）所収（第 7 章）。
中日社会、文化多面比较：风土、国情篇――地缘人文层次的考察（1～7），『立命館言語文化研究』第 18 巻 1・2 号，『立命館国際研究』19 巻 2 号，第 20 巻 1・2 号，第 21 巻 1・2 号，2006 年 8・10・11 月，2007 年 6・10 月，2008 年 6・10 月。
「全球（グローバル）化」時代の「発展中（途上）大国」・中国の光と影――総合的国力・社会問題の諸相と展望，『立命館国際研究』19 巻 3 号，2007 年 3 月。
从国家标志的意识―形态及权力结构的机制―特征比较中国、日本及世界的“中控・顶控”与“中空・顶空”，『立命館国際研究』22 巻 1 号，2009 年 6 月。
从红日高升到夕阳垂落：毛泽东“神坛”语迹的盛衰荣枯，『立命館文学』第 615 号，2010 年 3 月。
汶川巨震的地缘伏线：神州“龙脉”・祸根交织的杰・劫结节――汶川劫难、阪神剧震史鉴合镜对照之一，『立命館経済学』第 58 巻第 5・6 号，2010 年 3 月。
“国脐・地心”聚藏的“原震”宿命：中日多难兴邦历程的表征――汶川劫难、阪神剧震史鉴合镜对照之二，『立命館国際研究』22 巻 3 号，2010 年 3 月。
「毛沢東情結（コンプレックス）」と「北京情結（コンプレックス）」――当代中国的政治文化的根底の基本線・中軸線（上・中・下），『立命館国際研究』23 巻 2 号・3 号，24 巻 1 号，2010 年 10 月，2011 年 3 月・6 月。
从称谓“魔杖”管窥中国政要心迹及中国社会规则――《晚年周恩来》、《毛泽东私人医生回忆录》、《毛家湾纪实》、《国家的囚徒》、《大红灯笼高高挂》等禁域・深宫话语联析（上・中・下之 1・下之 2），『立命館国際研究』22 巻 2 号，23 巻 1 号，24 巻 2 号・3 号，2009 年 10 月，2010 年 6 月，2011 年 10 月，2012 年 3 月。
劫结难逃：“时环史缘”的变数・定数交织和“人环情缘”的荣辱・盛衰转换――中共双重诞辰、中国多轮演进变幻所隐现的“时环天数・劫结天机”论考之一・之二，『立命館国際研究』25 巻 3 号，26 巻 1 号，2013 年 3 月・6 月。
破底超限：薄熙来事变之“逆世流危搏”的教训（一），『立命館国際研究』26 巻 3 号，2014 年 2 月。
「新興国・老大国」の蹉跌（さてつ）と試練――2011.7.23（中共「90 歳誕生日」）高速鉄道追突・転落事故の衝撃と啓示，『立命館国際研究』27 巻 4 号，2015 年 3 月。
「新興国・老大国」の蹉跌（さてつ）と試練（続 1）――「王八蛋工程（バカヤローこうじ）」「571（武起義（クーデター））工程（けいかく）」に窺えた「先軍党国」の劣化・変質，『立命館国際研究』28 巻 1 号，2015 年 6 月。
中共上層部の暗闘・妥協と自民党派閥の抗争・融合（1），『立命館国際研究』28 巻 2 号，2015 年 10 月。
毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」――古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方（1～3），『立命館国際研究』31 巻 1・2・4 号，2018 年 6 月・10 月，2019 年 3 月。
研究筆記（ノート）　悲劇と笑劇，悲願と「笑願」，『国際関係学部 Newsletter』（立命館大学国際関係学部研究・学会委員会編集・発行）第 49 号（2018 年 7 月 10 日）。

主な参考文献（本稿第 1 部分で利用したものを中心に）

葉永烈『紅色的起点』，安徽教育出版社，2009 年。

陳暁明「中共一大時全国有多少党員？」，「中国共産党第一次全国代表大会会址記念館」網，初出時間未記載。

張士義・王祖強・沈伝宝主編『従一大到十九大：中国共産党全国代表大会史』，東方出版社，2018 年。

中共中央文献研究室編，金冲及主編『毛沢東伝（1893―1949）』，中央文献出版社，1996 年（日本語版＝村田忠禧・黄幸監訳，みすず書房，2000 年）。

中共中央文献研究室編，逄先知・金冲及主編『毛沢東伝（1949―1976）』（2 巻），中央文献出版社，2003 年。

中共中央文献研究室編，逄先知・馮蕙主編『毛沢東年譜（一九四九――一九七六）』（6 巻），中央文献出版社，2013 年。

王晁星編『毛沢東思想万歳』（5 巻），毛沢東思想紅衛兵武漢地区革命造反司令部（鋼二司）武漢大学総部発行，1968 年，「中文馬克思主義文庫」網 2005 年 11 月掲載。

葉永烈『歴史選択了毛沢東』，華夏出版社・四川人民出版社，2011 年。

高華『紅太陽是怎様昇起的――延安整風運動的来龍去脈』, 香港中文大学当代中国文化研究中心, 2011 年。

原非・張慶編著『毛沢東入主中南海』，中国文史出版社，1996 年。

李鋭「関於“毛主席万歳”這個口号」，『炎黄春秋』（中華炎黄文化研究会主宰，月刊）2010 年第 8 期。

馬燕「紅歌『瀏陽河』遡源：湘妹子為毛主席唱家郷戯」，「中国新聞網」，2011 年 5 月 6 日（『揚子晩報』より転載，掲載日未記載）。

権延赤『走下神壇的毛沢東』，中外文化出版公司，1988 年。

邸延生『歴史的真言　毛沢東和他的衛士長』，新華出版社，2006 年。

李志綏『毛沢東私人医生回憶録』，［台北］時報文化出版社，1994 年（日本語版＝新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』［2 巻］，文藝春秋，1994 年）。

汪東興『汪東興回憶――毛沢東與林彪反革命集団的闘争』，当代中国出版社，1997 年。

師哲・李海文著『在歴史巨人身辺　師哲回想録』，中央文献出版社，1991 年（日本語版＝劉俊南・横澤泰夫訳『毛沢東側近回想録』，新潮社，1995 年）。

陳敦徳『毛沢東・尼克松在 1972』，昆侖出版社，1988 年。

ウィリアム・バー編，鈴木主税・浅岡政子訳『キッシンジャー「最高機密」会話録』，毎日新聞社，1999 年（英文原著同）。

龔育之・逄先知・石仲泉『毛沢東的読書生活』，生活・読書・新知三聯書店，1986 年（日本語版＝逄先知著，竹内實･浅野純一訳『毛沢東の読書生活：秘書のみた思想の源泉』，サイマル出版会，1995 年）。

郭金栄『走進毛沢東的最後歳月』，中共党史出版社，2009 年。

王年一『大動乱的年代』，河南人民出版社，1988 年；人民出版社，2009 年。

馬斉彬・陳文斌・林蘊暉・叢進・王年一・張天栄・卜偉華編著『中国共産党執政四十年（1949―1989）』，中共党史資料出版社，1989 年。

胡繩「毛主席一生所做的両件大事」，『人民日報』1993 年 12 月 17 日。

余汝信・曾鳴「毛沢東“政治遺嘱”之疑」，「華夏文摘（中国新聞電脳網絡［CND］主宰）増刊　文革博物館通信（七九二）」，2014 年 9 月 23 日（『領導者』2014 年 6 月号より転載）。

李海文「毛沢東従未向華国鋒談過“血雨腥風”中交班」，『党史博覧』（河北省委党史研究室・河北省中共党史研究会主宰，月刊）2013 年第 3 期。

「蒋介石一生共写九份遺嘱：1971 年就確定伝位給児子」，「人民網」，2013 年 7 月 3 日（『鄭州日報』より転載，筆者・掲載日未記載）

羅氷「華国鋒要求承認是毛沢東私生子」，［香港］『開放』2003 年 3 月号。

産経新聞「毛沢東秘録」取材班『毛沢東秘録』（2 巻），産経新聞ニュースサービス，1999 年。

ハリソン・E・ソールズベリー著，天児慧監訳『ニュー・エンペラー　毛沢東と鄧小平の中国』（2 巻），福武書店，1993 年（英文原著＝ 1992 年）。

中共中央文献研究室編，金冲及主編『周恩来伝（1898―1976）』（4 巻），中央文献出版社，2008 年（日本語版＝狭間直樹監訳『周恩来伝 1898―1949』［3 巻］，阿吽社，1992 年；劉俊南・譚佐強訳『周恩来伝 1949―1976』［2 巻］，岩波書店，2000 年）。

中共中央文献研究室編，力平・馬芷孫主編『周恩来年譜（一九四九――一九七六）』（3 巻），中央文献出版社，1997 年。

韓素音著，王弄笙・鄒明榕・張志明・程鎮球・張連康訳『周恩来與他的世紀：1898―1976』，中央文献出版社，1992 年（英文版［1994 年］に基づく日本語版＝ハン・スーイン著，川口洋・美樹子訳『長兄――周恩来』，新潮社，1996 年）。

厳静文『周恩来評伝』，［香港］波文書局，1974 年（日本語版＝司馬長風［別筆名（ペン・ネーム）］著，竹内實訳『周恩来評伝』，太平出版社，1975 年）。

程華『周恩来和他的秘書們』，中国広播電視出版社，1992 年。

権延赤『走下聖壇的周恩来』，中共中央党校出版社，1993 年。

高文謙『晩年周恩来』，［紐育（ニューヨーク）］明鏡出版社，2003 年（日本語版＝上村幸治訳『周恩来秘録　党機密文書は語る』［2 巻］，文藝春秋，2007 年）。

周秉徳『我的伯父周恩来』，遼寧人民出版社，第 1・2 版，2001・08 年。

呉基民『周恩来與上海滅門血案』，［台北］一橋出版社，1998 年。

張民『周恩来與「首都工作組」――一個工作組員的親身経歴』，中央文献出版社，2009 年。

媛茅「周恩来跳舞規範優美，最喜歓音楽『歩歩高』」，「搜狐新聞」網，2012 年 6 月 20 日（『羊城晩報』より転載，掲載日未記載）。

中共中央文献研究室編，劉崇文・陳紹畴主編『劉少奇年譜（一八九八―一九六九）』（2 巻），中央文献出版社，1996 年。

魯彤・馮来剛『劉少奇在建国後的 20 年』，遼寧人民出版社，2007 年。

王光美・劉源等著，郭家寛編『你所不知道的劉少奇』，河南人民出版社，2000 年（日本語版＝吉田富夫・萩野侑二訳『消された国家主席　劉少奇』，日本放送出版協会，2002 年）。

劉亜洲「“二把手”」，『広場――偶像的神壇』（［香港］天地図書公司，1990）所収。

中共中央文献研究室編，楊勝群主編『鄧小平伝（1904―1974）』（2 巻），中央文献出版社，2014 年。

韓文甫『鄧小平伝　革命篇』『鄧小平伝　治国篇』，時報文化出版，1993 年。

ベンジャミン・ヤン（楊炳章）著，加藤千洋・典子訳『鄧小平　政治的評伝』，朝日出版社，1999 年（英文原著＝ 1998 年）。

毛毛『我的父親鄧小平：“文革”歳月』，中央文献出版社，2000 年（日本語版＝藤野彰・鐙屋一訳『わが父・鄧小平――「文革」歳月』［2 巻］，中央公論新社，2002 年）。

青野・方雷『鄧小平在 1976』（上巻『天安門事件』，下巻『懐仁堂事変』），［瀋陽］春風文芸出版社，1993 年。

葉永烈『鄧小平改変中国――1978：中国運命大転折　従華国鋒到鄧小平』，四川人民出版社，2012 年。

少華・游湖『林彪的這一生』第 2 版，湖北人民出版社，2003 年。
張雲生『毛家湾紀実――林彪秘書回憶録』，春秋出版社，1988 年（横山義一訳『私は林彪の秘書だった：権力者の腐臭と孤独　毛家湾紀実「林彪秘書回憶録」』，徳間書房，1989 年）。
張聶爾『中国 1971：風雲 “ 九一三 ”』，解放軍出版社，1999 年。
厳実「林彪的“一号号令”発出前後」，「鳳凰衛視網」，2008 年 3 月 27 日。
郝俊卿「関於“林彪一号令”及其他」，『炎黄春秋』2001 年第 3 期。
閻明『往事不忍成歴史』，文化芸術出版社，2010 年。
顧保孜『中南海人物春秋』，中共党史出版社，2009 年。
張黎群・張定・厳如平・唐非・李公天『胡耀邦伝（征求意見稿）』（全 3 巻），自費刊行（印刷所・発行所は未記載），2010 年。
劉崇文「胡耀邦逝世前半年的心態」，『炎黄春秋』2009 年第 9 期。
「多維歴史：王兆国為何被鄧小平舎棄」，「多維新聞」網，2012 年 8 月 29 日，無署名。
趙紫陽『改革歴程――完整録音還原歴史』，［香港］新世紀出版社，2009 年（日本語版＝趙紫陽 / パオ・プー / ルネー・チアン / アデイ・イグナシアス著，河野純治訳『趙紫陽 極秘回想録　天安門事件「大弾圧」の舞台裏！』，光文社，2010 年）。
未可「趙紫陽被軟禁的日子」，「美国之音（VOA）　中文」網，2005 年 1 月 18 日。
習仲勳伝編委会編『習仲勳伝』（2 巻），中央文献出版社，2013 年。
力伯畏口述，王凡整理「任弼時、高崗去世的現場目撃」，「人民網」，2011 年 6 月 3 日。
戴茂林・趙暁光『高崗伝』，陝西人民出版社，2011 年。
張聿温『死亡聯盟――高饒事件始末』，中国青年出版社，2007 年。
張恵卿「中共一大代表劉仁静建国後的遭遇」，『炎黄春秋』2003 年第 10 期。
陳清泉「陸定一談瞿秋白為何写『多余的話』」，『炎黄春秋』2003 年第 2 期。
雷頤「“瞿秋白冤案”不始於“四人組的迫害”」，『文史参考』（山西省政協文史資料委員会主宰，月刊）2010 年第 10 期。
劉統『北上：党中央与張国燾闘争始末』，生活・読書・新知三聯書店，2016 年。
何方『何方談史憶人：記念張聴天及其他師友』，世界知識出版社，2010 年。
徐則浩「殺害項英的凶手劉厚総」，『炎黄春秋』2000 年第 3 期。
童志強「追踪槍殺項英的凶手劉厚総的下落」，『鉄軍・紀実』2013 年第 2 期。
王凡・東平『紅墻童話：我家住在中南海』，作家出版社，2003 年。
李克菲・彭東海『秘密専機上的領袖們』，中共中央党校出版社，1997 年。
丁暁平『中共中央第一支筆：胡喬木在毛沢東鄧小平身辺的日子』，中国青年出版社，2011 年。
葉永烈『中共中央一支筆：胡喬木』，湖南人民出版社，2014 年。
肖偉俐『帥府家風』，中共党史出版社，2007 年。
呉東峰『開国戦将』，中国当代出版社，2015 年。
「王藻文」，「華人百科」網，初出時間未記載。
蘇維民『楊尚昆談新中国若干歴史問題』，四川人民出版社，2010 年。
奚青「“傷心橋下緑青波”――読李鋭流放日記」，『炎黄春秋』2012 年第 6 期。
張重天『共和国第一冤案』，華芸出版社，1989 年。
李輝『胡風集団冤案始末』，人民日報出版社，1989 年（日本語版＝千野拓政・平野博訳『囚われた文学者たち――毛沢東と胡風事件』［2 巻］，岩波書店，1996 年）。

葉永烈『反右派始末』，青海人民出版社，1995 年。
李鋭『廬山会議実録（増訂版）』，河南人民出版社，1994 年。
蘇暁康・羅時叙・陳政『烏托邦祭：一九五九年廬山之夏』，中国新聞出版社，1988 年（日本語版＝辻康吾監修『廬山会議：中国の運命を定めた日』，毎日新聞社，1992 年）。
張素華『変局――七千人大会始末』，中国青年出版社，2006 年。
「民主生活会制度的由来」，「共産党員網」，2018 年 12 月 26 日（「共産党員微信」より転載，無署名）。
高皋・厳家祺『文化大革命十年史』，天津人民出版社，1986 年（日本語版＝厳家祺・高皋著，辻康吾監訳，2 巻，岩波書店，1996 年）。
席宣・金春明『「文化大革命」簡史』，中共党史出版社，1996 年（日本語版＝鐙屋一・岸田五郎・岸田登美子・平岩一雄・伏見茂訳，中央公論社，1998 年）。
楊継繩『天地翻覆――中国文化大革命史』（3 巻），［香港］天地図書有限公司，2016 年（日本語版＝辻康吾編，現代中国資料研究会訳『文化大革命五十年』，岩波書店，2019 年）。
金振林『毛沢東隠踪之謎』，『花地』1989 年第 5 期（日本語版＝竹内實監訳，松本英紀・李潔訳『毛沢東・謎の十二日間――文化大革命の真相』，悠思社，1992 年）。
趙峻防・紀希晨『二月逆流――中国：1967 年紀事』，春風文芸出版社，1986 年（日本語版＝立花丈平・斎藤匡史訳『二月逆流　「中国文化大革命」一九六七年』，時事通信社，1988 年）
権延赤『龍困與微行』，中国文聯出版社，2000 年。
「従中共八大開始看起　毎届中央委員有何特点」，「大公網」，2017 年 11 月 6 日（『環球人物』誌より転載，筆者・掲載号未記載）。
遅沢厚「中共“九大”内幕瑣憶」，『炎黄春秋』2003 年第 3 期。
葉永烈『「四人幇」興亡』（3 巻），人民日報出版社，2009 年。
戚本禹『戚本禹回憶録』，［香港］中国文革歴史出版社，2016 年。
葉永烈『黒紅内幕――葉永烈采訪手記』（2 巻），作家出版社，1999 年。
司任主編『「文化大革命」風雲人物訪談録』，中央民族学院出版社，1993 年。
徐景賢『文革名人　徐景賢最後回憶』，［香港］星克爾出版有限公司，2013 年。
劉明鋼「陸定一蒙難記」，『党史縦横』（遼寧省委党史研究室主宰，月刊）2006 年第 5 期。
陳清泉・宋広渭「冤案不平拒不出獄的陸定一」，『炎黄春秋』2000 年第 6 期。
郭華「上書揭露秦城監獄的是劉淑清」，『炎黄春秋』2001 年第 3 期。
彭勁秀「錚錚硬骨馮基平」，「民間歴史」網（香港中文大学中国研究服務中心），「共識網」より転載（初出日未記載）。
「文革前後秦城監獄揭秘：“四人組”入獄経過調査」，「東北新聞網」，筆者・初出時期未詳。
図們・肖思科『特別審判――林彪、江青反革命集団受審実録』，中央文献出版社，2003 年。
陳東林「陳雲力排衆議反対殺江青：不能開殺戒」，「中国共産党新聞網」，2015 年 8 月 21 日。
陳冠任「揭秘：党中央“力排衆議反対殺江青”的人是誰，不是陳雲」，「陳冠任 01　新浪博客」（blog.sina.com.cn/u/3283710452），2016 年 1 月 15 日。
章立凡「真相是和解的前提」，『炎黄春秋』2014 年第 2 期。
秦全輝「比陳小魯和宋彬彬更深刻的文革道歉――劉進的道歉」，「芨芨草的博客」（blog.creaders.net/u/9588/201801/313391.html），2018 年 1 月 23 日。
林衍・高四維（本紙記者）「為心道歉」，『中国青年報』，2013 年 10 月 15 日。
『壮哉！黄埔』「康沢」，「鳳凰網」2009 年 7 月 5 日（無署名）。

魯迅「無花的薔薇之二」，『語絲』週刊第 72 期，1926 年 3 月 29 日。
魯迅「記念劉和珍君」，『故事会』週刊第 74 期，1926 年 4 月 12 日。
張良編，アンドリュー・J・ネイサン / ペリー・リンク監修，山田耕介・高岡正展訳『天安門文書』，文藝春秋，2001 年（英文原著同）。
劉統『中国的 1948 年　両種命運的決戦』，生活・読書・新知三聯書店，2006 年。
朱国明「大上海 1949――走出屈辱（十五）」，「上海档案信息網」，2008 年 2 月 26 日。
「最有美国范的上海市長呉国楨」，「搜狐」網，2018 年 6 月 18 日，無署名。
曾夢龍「1986 年，社会寛容讓『醜陋的中国人』出版，它讓人反思“劣根性｜暢銷書系列⑧」，「好奇心日報 3.0」（www.qdaily.com），2017 年 6 月 21 日。
「中国作協副主席、国務院参事、著名作家張抗抗　加強対原創文学版権保護　応加快著作権法修訂工作」，「国家版権局網」2017 年 4 月 28 日，『中国新聞出版広電報』より転載。
暁楽編「鶴立河農場杭州知青大事記」，「暁楽策劃網」（www.zxl88.cn），2016 年 11 月 26 日。
張抗抗「堅決遏制対網絡文学作品侵権的建議」，「新浪読書」網（http://book.sina.com.cn），2011 年 2 月 27 日。
中央党校采訪実録編輯室『習近平的七年知青歳月』，中共中央党校出版社，2017 年。
南方週末新聞職業倫理委員会「2013 年南方週末新年特刊出刊過程」，2013 年 1 月 7 日，「周曙光的網絡日誌」（www.zhoushuguang.com）等転載。
晧宇「『南都』因厳重“導向事故”開除編輯」，「BBC NEWS 中文」網，2016 年 3 月 1 日。
海彦「南都編輯拒絶屈膝“姓党”毅然辞職」，「美国之音（VOA）中文」網，2016 年 3 月 29 日。
志水速雄『フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」全訳解説』，講談社，1977 年。
ストローブ・タルボット編，タイムライフブックス編集部訳『フルシチョフ回想録』，タイム・ライフ・インターナショナル，1972 年。
ルドルフ・シュトレビンガー著，守屋純訳『赤軍大粛清　20 世紀最大の謀略』，学習研究社，1996 年（独文原著＝ 1990 年）。
猪瀬直樹『ジミーの誕生日』，文藝春秋，2009 年。
ダグラス・マッカーサー著，津島一夫訳『マッカーサー回想記』（上・下 2 巻），朝日新聞社，1964・65 年（英文原著＝ 1964 年）。
袖井林二郎・福島鋳郎編『マッカーサー　記録・戦後日本の原点』，日本放送協会出版，1982 年。
工藤美代子『マッカーサー伝説』，恒文社 21，2001 年。
増田弘『マッカーサー　フィリピン統治から日本占領へ』，中央公論新社，2009 年。
半藤一利『マッカーサーと日本占領』，PHP 研究所，2016 年。
中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編『現代漢語詞典』第 1～7 版，商務印書館，1979～2016 年。
辞海編輯委員会編『辞海』第 3～6 版，上海辞書出版社，1979～2009 年。
新村出編『広辞苑』第 1～7 版，岩波書店，1955～2018 年。
『日本国語大辞典』第 1 版（日本大辞典刊行会編，本文 20 巻＋別巻）・第 2 版（日本国語大辞典第二巻編集委員会・小学館国語辞典編集部編，同 13 巻＋別巻），小学館，1972～76・2000～02 年。
南出康世編集主幹『ジーニアス英和辞典』第 5 版，大修館書店，2014 年。
陳東林・苗棣・李丹慧主編『中国文化大革命事典』，［福岡］中国書店，1997 年。
天児慧・石原亨一・朱建栄・辻康吾・菱田雅晴・村田雄二郎編『岩波現代中国事典』，岩波書店，1999 年。
岡部達味・安藤正士『原典中国現代史 別巻　中国研究ハンドブック』，岩波書店，1996 年。

和泉新・佐藤保編『中国故事成語辞典』，東京堂出版，1992年。
その他，中国・日本の新聞・テレビ等の記事・報道等を参考にした。

本稿中の毛沢東・岳飛の詩・詞と曹操「歩出夏門行」の和訳は竹内實訳（武田泰淳・竹内實『毛沢東　その詩と人生』，文藝春秋新社，1965年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

『論語』の語録の和訳は金谷治訳注『論語』（岩波書店，1963年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

『道徳経』の語録の和訳は野村茂夫著『老子・荘子』（『鑑賞 中国の古典④』，角川書店，1988年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

『易経』の語録の和訳は，今井宇三郎・堀池信夫・間嶋潤一著『易経（下）』（『新釈漢文大系』第63巻，明治書院，2008年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

『孝経』の語録の和訳は，栗原圭介著『孝経』（『新釈漢文大系』第35巻，明治書院，1986年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

羅貫中『三国志通俗演義』の詩文の和訳は，小川環樹・金田純一郎訳『完訳三国志』（全8冊，岩波書店，1988年）に基づくが，表現・表記等を一部変えた処が有る。

白居易「放言五首・其三」の和訳は，田中克己著『白居易』（『漢詩選10』，集英社，1996年）に基づくが，表記等を一部変えた処が有る。

元稹「遣悲懐三首・其二」と杜牧「赤壁」の和訳は，蔭塘退士編・目加田誠訳注『唐詩三百首』（3巻，平凡社，1973～75年）に基づくが，表現・表記等を一部変えた処が有る。

魯迅の詩の和訳は高田淳著『魯迅詩話』（中央公論社，1971年），『魯迅全集9　集外集・集外集拾遺』（訳者［代表］相浦杲・伊藤正文，学習研究社，1985年）所収の入谷仙介訳「題三義塔」・伊藤正文訳「悼楊銓」に基づくが，表現・表記等を一部変えた処が有る。

（夏　剛，立命館大学国際関係学部教授）

习近平的原点和“红色基因”
——对毛泽东、邓小平的继承及超越（1）

本论著以习近平 1953 年作为党、政要人习仲勋之子出生于首都为其原点，指出始于该年的中共高层政治斗争其后导致其父倒台而影响境遇，及从“文化大革命”中“上山下乡”迈出人生第一步起，到就任最高领导人后一贯保持“红二代”思维、气质。

1953 年斯大林去世后赫鲁晓夫为巩固最高权力而枪决政敌贝利亚，翌日毛泽东攻击高岗打响了至死方休的自顶层到低端的维权肃清的第一枪。9 年后习仲勋被指责替高翻案实为“陕西帮”遭排斥的结果，半世纪后成为党魁的习近平虽深受其害却承袭毛的“斗争哲学”值得深思。本部分联系斯大林 1930 年代的大清洗、北朝鲜“金家王朝”的恐怖统治，分析毛泽东、邓小平时代的不惜严厉打击、残酷镇压的执政手法，对比习近平时代再次趋于高度集权而至极权程度不亚于“建国之父”、“中兴之祖”的走向，基于笔者多年来关于领导人素质的研究，对其背景、内涵加以分析、评点。

笔者针对中泽克二着眼“习近平密码”的“10.25”（19 届 1 中全会举行日）为俄国“10 月革命”（1917.11.7）的旧历，及基本建成现代化强国目标的 2035 年为习达到毛终年的 82 岁而涉及去留问题，提示“10.25”与志愿军赴朝作战纪念日和中国恢复联大席位之日相重合，2035 年恰逢遵义会议、中央红军长征胜利 100 周年，并举出中美贸易战吃紧时央视紧急连续播放抗美援朝战争片，及习在首都戒严令实施 30 周年之日瞻仰长征出发纪念碑为证。结合笔者多年来关于中国现代史内“天数”的考察，推测“习近平新时代”的“中国梦”之远景及其个人雄心之深处。

（夏　刚，立命馆大学国际关系学院教授）